
黒竜異聞

真下守里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒竜異聞

【Zコード】

Z6683W

【作者名】

真下守里

【あらすじ】

母一人子一人で育ってきた北方の村の少年リクは、母の死をきっかけに、単身王都を目指す。その懐には、顔も知らない父の形見だという短刀。それを手掛かりに父を探し、慰謝料のいくらかもふんだくつてやろうという心積もりなのである。そんなリクが、旅のさなかに出会ったのは、手のひらサイズの黒いチビ竜。しかも、その正体は……!? このお話は「野いちご」で公開していた『黒竜異聞』シリーズの加筆修正版です。このため、プロットがほぼ9割決まっていますので、ストーリー展開についての「ご希望には添え

ないことが多いかと思います。あしからずご了承下さいませ。
稿は、ほとんどが大筋には関わらない小さな変更です。

改

思いがけない拾いもの（前書き）

前作『竜を抱く』で、何げに人気だつたらしいリク。そんな彼のお話を、あらためて紡ぎ直してみたくて、（忙しい忙しい騒いでるくせに）つい書き始めてしまいました。彼の両親の出会いから始めるので、相当な長編かつまつたり更新となるかと思いますが、よろしくお付き合いいただければ幸いです。R15指定は念のため^^；また、ほかの竜のシリーズ同様、単位は尺貫法を使っています。この序章に出てくる「リク」は、主人公「リク」の父親です。

思いがけない拾いもの

サラハン大陸暦892年、初冬

秋口より始まつた、北の隣国・ヘキギヨク（と言つても、ここに至るまで何度も為政者が変わり、そのたびに国名も変わつたので、近在の土地では、「上つ國」（かみくに）という昔からの通り名で呼んでいたのだが）との戦は、寒さの到来とともに膠着状態に陥つた。

戦場となつた国境が雪に降り込められ、両軍ともに身動きが取れなくなつたのだ。本当は秋の収穫の時期までには勝負を決したいところだったのだが、互いに想定していた以上に相手に善戦され、戦いが長引いてしまつたのであつた。

十六になるイヅチの住む山間（やまあい）のカノヘ村にも、程なくその噂は伝わつた。国境まで十数里（約50km）という場所柄もあり、いつ戦火に巻き込まれるか、誰もが戦々恐々として成り行きを見守つていたからだ。

「けど、この分じゃ、春まではナンも起こらないっしょ

こうした場合、往々にして女の方が割り切り良く、肝も据わつているものだ。加えて、イヅチは女だてらに「猿（まじら）」の異名を取るほどのお転婆娘でもあつた。そうとわかれば、家の中にじつとしてなどいられるはずもない。

「ついでに、山向（いのち）の市で買い物もして来てやつかー！」

取つてつけたように言い添えると、荷台付きの橇（そり）にまたがり、さつさと雪の中へ飛び出した。無論、買い物などただの口実。本当の

目的は、荷台くわにべりつけてある「雪板」で、滑空の練習をする」とだった。

年明け早々に村を挙げての雪滑りの大会が行われることになつており、「猿のイヅチ」は、その優勝候補のひとりだった。優勝者には、米一俵と金一封が贈られることになつていた。貧しい小作の娘であるイヅチにとっては、滅多にできない親孝行となるだろ。それに、

（今年こそこそ、けつちよんけつちよんにしてやんだから、あの庄屋のバカ息子………）

「庄屋」とは、この村のことだ。その庄屋のひとり息子は、村で唯一の寺子屋に入学したその日、イヅチに「猿」とあだ名をつけた張本人であつた。十一でそこを卒業してからも、何かというと偉そうな態度で神経を逆撫でしていく。例えば雪板のことひとつ取つても、

『僕のは、毎年「お父様」に王都みやこで求めてきてもらつ最新式のものなんだからね。十年一日、同じ古い板で滑つているおまえなんか、逆立ちしたつて敵いつこなこさー』

とか何とか、自慢たらしことおびただしいのだ。

ところが、半刻とき（約一時間）も経たぬうちに、イヅチは戻つてきた。しかも、彼女が橇の荷台に乗せて運んできたのは、肉でも野菜でも魚でもなかつた。山賊に外套を剥がれでもしたか、薄衣うすいきと筒袴つばしものみを身にまとい、白磁のような額から血を流してぐつたりと横たわっている、イヅチと同年代の若い男

「下くだってたら、ふらふらあつて脇道から出てきてさ。ケガもし

てるし、凍えて死にそうだし、ほつたらかじにしどのアレかなつて……」

驚く家族にそう説明すると、イヅチは手際良く男を古毛布でくるんでやり、今度は、村でたつたひとりの医者様の家に櫂を向けた。方向を見失わないよう、視線は前方に置いたまま、

「あたし、イヅチってんだ。あなたの名前は？」

「……リク」

「どつから来たね？」

答えは返つてこなかつた。頭を打つた衝撃で忘れてしまつたのか、あるいは語りたくないのか……

(ま、どつでもいいけど)

年の頃から推して、恐らくは、強制的に徴兵され、前線に駆り出された少年兵なのだろう。だとすれば、雪が解ければ早々に仲間が搜しに来るはずで、そうなつたら、もつ一度と会つこともないのだ。

ほかにも傷を負つてゐるのか、リクが低く呻いた。思わず後ろを振り返ると、相手は苦しげにまぶたを閉じていた。そのまつ毛の長さに、はつと目を奪われる。スッと通つた鼻筋と、薄いがくつきりと紅い唇にも……

「……あたしょつ女らじいかも」

呟いてしまつてから、いけない、といづチは首をすくめた。案の定、リクの眉が、たちまちキツと吊り上がつた。

「どうせ私はチビで女顔だ！」

「や、チビだとまでは言つてないけど」

「……っ！」

真っ赤になつて、リクは再び黙り込んだ。つまりはそれだけ身の丈の低さを気にしているのだ、とすることが丸わかりである。

「やだ、可愛

「可愛いなどと言つなかつー！」

ますます真っ赤になつて、リクは怒鳴つた。よほど普段から言われつけていて苛立ちの種にでもなつてゐるのか、涙田にまでなつてイヅチを睨んでいる。

やつぱり可愛い、といづちは思つたが、今度は口には出さなかつた。相手の名譽のために、といつだけではなく、ふと、心の中で警鐘が鳴つた気がしたからでもあつた。

リクが口にしたのは、自分がしゃべつているような詭りまじりの荒っぽい言葉ではなく、王都みやこで話されている「お上品な言葉」だつた。それも、庄屋の息子のように格好をつけるためにわざと使つてゐるのではなく、本当に田頃から使い慣れているのだといつことが、たつた一言二言からでも、ちゃんと伝わつてくる。

ということは、もしかしたらリクはただの少年兵などではなく、どこか「いいところのお坊ちゃん」なのかもしれない。豪商の息子か、あるいは騎士か貴族の家系の出か……

(だったら、下手に「深入り」なんかしない方がいいよね)

上つ国と同じく王制が敷かれているこの国・カムナギ(といって
も、いちいちも、イヅチたちには「ウチの国」だとか「中つ国」だと

かといった通り名で呼ばれるのが常だったのだが）では、身分制度は人々の生活に深く浸透し、それを基準に何もかもが決められていた

昔ながらの因習の色濃く残るこの近在では、特に。

従つて、もしイヅチの推測が当たつているなら、彼女にとって、リクは、親しくなるどころか、口を開くことさえ畏れ多い立場なのだ。

「こりよりはるかに「進んで」いる王都あたりでは、実は身分の壁を越えたという話もなくはない。殊に、商人たちが力をつけてきた昨今では、商家の娘が、茶会あたりで貴族の男に見初められて玉の輿に……といったこともしばしばあるようだ。が、それだって、身分のくじこそ平民だが「大金持ち」の部類に入る層限定での話である。

（ビーチにしたる、あたしには縁のない話だよ）

一刀両断に片づけると、イヅチはリクを医者様に預け、さっさと踵を返した。それで、すべてが終わるはずだった。このあたりでは見かけない、ちょっと凜々しくて可愛い「都會の男の子」と、ひとときだけでも関わり、言葉を交わした。そんな、一瞬で溶けてしまう、ほの甘い綿菓子のような思い出を胸に、再び変わり映えしない日常に戻つて行くはずだったのだ。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

ところが、風邪の蔓延する季節だったからか、医者様は多くの患者を抱え、日の回るような忙しさの中につなぎあつた。今にも扉を開けて外へ出て行こうとしていたイヅチを呼び止めて、医者様は言った。

「悪いが、手当てが終わつたら、この患者の様子を見とつてくれんか。この傷と打ち身の様子では、恐らく熱が出るじゃろつ。しかし、儂ははこの通り、ひとりの患者ばかりにかかるわざうつてはおられんのでな」

村の全員の命を預かる医者様の頼みは、庄屋の命令と同じぐらい絶対だ。それに、お転婆が災いして日頃からケガの絶えないイヅチは、この医者様に何度も手当てしてもらつたり、時には冗談抜きに命を救つてもらつたりもしていたから、そういう意味でも、返事は「はい」以外あり得ない。

かくて、イヅチは一晩、リクの傍らに座つて、彼の看病をした。医者様の診立て通り、夜半過ぎにはリクは高熱を発して呻き始めた。

「い、づち……」

覚えたばかりの彼女の名を何度も呼び、不安げにその手を求めるリクの姿に、なけなしの女心を揺さぶられてしまつたとしても、誰がイヅチを責められよう？

傷が癒えると、リクは、「自分には診療代が払えないから」と、引き続き医者様のもとに残り、その手伝いをするようになった。

よほど高等な教育を受けてきたのだろう、万事について呑み込みが早く、じきに診療の手順も覚えてしまつたリクを、医者様はたいそう可愛がり、「春にはここを出て行くのだということでなければ、このまま弟子にしてしまいたいところなんぢやが」と口惜しがつた。

また、リクの整つた顔立ちは、イヅチ以外の村の娘たちの心も、あつという間に虜にした。イヅチ自身は、彼の苦しみ喘いでいる顔か、「どうせチビだ」とムツとしている顔しか見たことがなかつた

が、何でも、にっこり笑うと、その美貌はさらに際立つのだが……
何故伝聞なのかと言えば、あれ以来、一度もリクには会っていない
かつたからだ。リクに夢中になっている娘の中には、「小町」と評
判の美少女も含まれていた。それ以外の娘たちにしても、それこそ
野生の猿の「ごとく、ガサツで薄汚れた自分に比べれば、皆可愛らしく
て、女の子らしくて……

(人にはさ、分つてもんがあるんだよ)

そう自分に言い聞かせつつ、イヅチは、畠が雪で埋まってしまっ
ている冬の間の仕事であるわらじ作りや菅笠作りに黙々と勤しみ、
それを市へ売りに行つては、その帰り道に、ひたすら滑空の練習を
し続けた。

その甲斐あつてか、雪滑り大会では文句なしの優勝だった。賞品
を手に喜ぶ家族を微笑んで見つめながら、リクもどこかで見ていて
くれるだろうか、という思いが、ちらりと心をかすめた。

けれど、すぐにイヅチはそれを抑え込んだ。仮に見ていたとして
も、「猿の異名は伊達ではなかつたのだな」と思われるのが関の山
だろう。それどころか、「女の身でのような野蛮なことなどして
と軽蔑されてしまうかもしない……

降つて湧いたような

雪解けの気配が漂い始めた頃、村の若者たちに取り囲まれて何か言われているリクの姿を見た。言葉の合間合間に、小突かれたり、殴る蹴るされたりもしている様子だ。何やつてんだよおまえら、と怒鳴りかけて、しかし、イヅチは口をつぐんだ。

男の子にまじって遊んで育ってきた彼女は、彼らが時に言葉以外のものでも語り合う人種であることを知っていた。もし、あれが、彼らなりの「リクを仲間に迎える儀式」のようなものだとしたら、そこへ割って入ることは、むしろ大いなる野暮となってしまう。
それに、せっかく抑え込んだ気持ちが再びむくむくと頭をもたげそうな気もした。ケガをしていれば手当てしたくなるだろうし、傷ついていれば慰めてやりたくもなるだろう。けれど、それもまた、リクにしてみれば余計なお節介でしかないかもしれない。「小作の娘が、たかだか一度関わったぐらいでいい気になつて」そんなふうに思われてしまつたら……

しかも、さらに厄介なのは、そう思つであろう人間は、リクひとりではないということだった。例えば、リクに夢中になつている、あの「小町」ハツセ、という名の彼女は、庄屋の分家筋の娘でもあり、それだけに影響力も庄屋の息子並みに強かつた。否、「娘たちへの」と範囲を限定すれば最強とさえ言えるかもしれない。そんなハツセにも同様のことを思われ、へそを曲げられてしまえば、今後の村の女社会でのイヅチの立場は最悪のものになつてしまふだろう。

だが、切れ切れに聞こえる声の中に、「よそ者が」「田障りだ」「さつさと出て行け」といった言葉がまじり始め、殴る蹴るの様子も明らかに常軌を逸していることが見て取れると、やはり、どう

にも捨てては置けなくなつた。

「ああつ、喧嘩だ！ ねえねえ、喧嘩だよおつ！ ……あ、ほらハ
ツセちゃん、こちこちこちー！」

といつても、ハツセとは寺子屋で一緒にいたという以外特に接点はない。だいいち、彼女の姿自体、実はどこにもなかつたのだが、その名を使わせてもらうのが一番効果的だとイヅチは思ったのだ
「猿まじり」に見られたところで連中は片腹痛くもないだろうが、相手が「小町」となれば話は別なはずだから。

案の定、連中は、こちらを振り返ることすらせらず、脱兎の如く逃げ去つて行つた。その中に、といふか、ほぼその中心に、庄屋の息子の姿を認めて、イヅチは、ああ、と納得した。

真面目でよく働くリクは、最近では、医者様だけでなく村人のほとんどに好意をもつて受け入れられつつあつた。中には、「春にはお別れなんて残念だねえ」などと声をかける者さえいる。おまけに、娘たちの間での大人気ぶりも相変わらずで……「常に僕が一番」でなければ氣の済まない庄屋の息子としては、面白くないことこのうえなかつたのだろう。それで、同じようにリクをやっかんでいた者たちを集めて、こんな愚行に及んだのだ。

「……かたじけない

リクの声がした。振り返ると、彼は、右手でみぞおちを押さえ、左手で唇の端についた血を拭いながら立ち上がるところだった。その唇に苦笑が浮かぶ。

「何やら、いつも格好のつかぬとこばかり見せているな、そなたには

「え……」

返答に困つて、イヅチは立ち尽くした。はいと答えれば失礼だし、さうとていいえと答えれば嘘になる。おまけに、「そなた」という呼びかけ方 いくら「いいとこの坊ちゃん」でも、相手を「そなた」などと呼ぶ者はそうそういない。そり、例えば……

「えと……リク 様つて、まさか、お 」

しかし、そこでイヅチは硬直した。

「リクで良い」

相手のすんなりした人差し指が、そつ、と脣に当たられたのだ。

「すまん、今のは失言だった。出自がわかつてしまつような物言いは、なるべくせぬように努めていたのだがな……どつも、そないや、おまえの前だと氣が緩んでしまつて」

最初の最初で恥を搔き取くしたからかな、と付け加えて、くすりトリクは笑った。息をするのも忘れて、イヅチはその笑顔を凝視していた。

(みんなの言つてた通りだ……)

美しくて、神々しくて、何だか日がくらみやつそこまで思つたところで、本当に日がくらんだ。ぐるり、と景色がひっくり返り、そのままイヅチは氣を失つた。

次に気がついたときには、医者様の家の離れに寝かされていた。

「何をやつしているのだ！　あのよつて息を止めていっては、倒れるのは当たり前ではないか！！」

開口一番怒鳴られて、逆にイヅチはホッとした。初対面の印象が印象だつたせいか、こちらの方が、ずっとリクらしい気がする。それに、あんな攻撃力抜群の笑みをこれ以上向けられ続けたら、今度こそ確実に窒息死してしまうかもしれない。

「あ、あの……ありが……」

そこまで言ひて、再び彼女は硬直した。掛け布団の上に出でている自分の右手、そこに、相手の右手の指が、しつかりとからめられていたから。

「こつぞやと、立場が逆になつたな」

イヅチの変化に気づいたのか、リクも、いささか面映ゆげな顔になつた。が、握られた手が離されることはなかつた。

「あのときは、この手に随分と救われた。あたたかくて、心強くて……だから、夜が明けて、いつの間にか、手も、おまえも、どこかに消えてしまつているのに気づいたときには、本当に、その……」

言葉が途切れ、代わりに、手の方にさらりと力がこもつた。

「何故、あれからずっと顔を見せなかつたのだ！」

あ、いや……こちらから会いに行くことも、無論何度も考えたのだぞ？　だが、その……私のように、いろいろな意味で男らしくな

い、というか……そんな男は、おまえのような凜々しい女の好みには合わんのだろ？か、と思つと……」

「……へ…？」

とうとう眞っ赤になつて口元もつてしまつた相手を、まじまじとイヅチは見直していた。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

リクが医者様に正式に弟子入りを志願したのは、その日のうちのことだった。しかも、彼はイヅチをわざわざ家まで送つてくれ、その玄関先で、親たちに向かつて、今後もこの村で暮らし、ゆくゆくは今の医者様のあとを継ぐことに決めたので、ぜひイヅチを嫁に貰い受けたい、と頭を下げたのである。

降つて湧いたような話に、父も母も当然驚いた。特に母などは、「分不相応では」と、わざわざ医者様のところへ問い合わせにまで出かけた。けれど、応対した医者様の答えは、

「何、ウチだって、持ち出しの方が多い貧乏医者じゃ。それに、イヅチなら、よく働くし機転も利くし、下手なお嬢様に来られるより、よっぽど助かるでな」

というものだった。それといつのも、彼は、最初の晩の様子を見てとつぐに一人の気持ちを察しており、あたたかい目で成り行きを見守つてくれていたのである。

そんなこんなで、最終的には、両親も「幸せになるんだよ」と喜

んでイヅチを送り出してくれた。患者が最優先ということで、祝言は形ばかりのものを内輪でごくひつそりと行き、リクがイヅチに想いを告白したあの離れで、二人は夫婦として暮らし始めた。

「ねえ……本当に、良かつたの？」

初めて床を共にする前、やはりどうしても信じられなくて、イヅチは確かめた。

「元の身分を捨てて、おまけに、あたしみたいな猿まじら」

その先は、リクの唇に阻まれた。それ以上の続きは許さない、と言わんばかりに深い口づけを何度も繰り返すと、彼はかたくかたく新妻を抱きしめた。

「猿まじらではない、天女だ」

「え……？」

「正月に、雪板を駆つて大空に舞うおまえを見た。あれは、まさしく天女だった。それ以前からまた会いたいと思うてはいたし、人づてに、決して浮つくことなく、常に地に足のついた暮らしを心がけていると聞いて、そのことも好もしく感じてはいたが、あの滑空で完全にとどめを刺された」

呆然となつた彼女をそつと布団に横たえ、上から覆いかぶさつて、その胸元に顔を埋める。

「それに……どのみち、私には帰る場所などない。

おまえも聞いていいであろう？ 数日前、上(つ国)との間に講和条約が結ばれた、と……

ここだけの話だが、あれに調印するためには、本来なら私の立ち

合いと血判が必要なのだ。だが、実際には、何事もなかつたかのように事が進められた。恐らく、私は既に死んだものとされ、すべての権限は副将として同行していた弟に移されたのだろう。

その点、ここでは……無論、まだまだ修業は必要だが、それでも、私を私の立場やそれに付随する権力ちからではなく、私という人間そのものを必要とし、頼ってくれる者がたくさんいる。

しかも、医者というのは人の命を救う仕事だ。それが、何よりも嬉しい。正直、もうたくさんなのだ。この口から発せられた命令ひとつで、これまでいつたい何百、何千の兵が……

声が詰まつた。ぎゅっと自分の寝巻にすがりつき、肩を震わせる夫を見やつて、ああ、やはりこのひとは王族か、それに連なる家系の出であつたかとイヅチは確信したが、口にはしなかつた。

(このひとが、自分からその家を捨てようつて決めたんだものね……)

ならば、自分はその気持ちに寄り添つまで。何も知らない、何も聞かなかつたふりをして、このひとの「リクである部分」だけを見つめ、愛おしんで行けば、それで……

「い、いづち……」

あの夜と同じように、心もとなげに夫が呼んだ。

「リク……」

呼び返して、イヅチはそつと寝巻の帯を解き、相手のすべてを受け入れた。近くの川で、雪解け水が音を立てて流れ始めたのを聞きながら、一人は激しく互いを求め、いつしかひとつに溶け合つた。

懐刀と幻の手紙

(……なのに、あのバカ一人が余計なことすつから!…)

憤然と、イヅチは嘆息した。久々に昔を思い出して頭に血が上つたせいか、体じゅうが妙にカツカと熱い。

大陸歴910年の、冬の終わり あれから十八年の時が過ぎ、
「猿ましゃ」と呼ばれた少女は、「狒狒ひひ」という形容の方がふさわしい貫録を備えた中年女になっていた。

そして、でつこりと居間の円卓の前に陣取ったイヅチと向かい合つて座っているのは、あの当時の夫に瓜一つの容貌と、彼女によく似た茶色い髪と瞳を持った、次の誕生日には十七になる息子だった。が、夫の姿は、どこにもない あの初夜から一月と経たぬうちに、「国王ユアン=ナスル=ハシム四世配下の隠密」を名乗る者たちに連れ去られてしまったのである。

その原因を作った者こそが、イヅチが言うところの「バカ一人」
庄屋の息子と「小町」ことハツセであった。

リクとイヅチがつましくも幸せな夫婦生活を送り始めたのを知つて、露骨に地団駄踏んで悔しがったのがこの二人だつた。リクを毛嫌いしていた庄屋の息子と、リクに惚れていたハツセ 同じ人間に全く反対の感情を抱いていた一人であつたが、思わぬところで利害関係が一致した。

『絶対、引き裂いてやる』

かくて彼らは結託し、上つ国・ヘキギヨクとの講和が成つて王都みやこへ帰りかけていた軍隊のもとへ走つて、「これこれこういう特徴の

脱走兵がウチの村にいて、イヅチという女に匿われてゐる」と密告したのである。

軍隊からの脱走者は死罪、これを匿つた者は追放刑となるのが、昔からの習わしだった。庄屋の息子はまさしくそれを狙つていたのであろうし、ハッセにしても「このあたしを振つて、あんな猿なんかを選んで……！」といつ、「可愛き余つて憎き百倍」的な気持ちの方が勝つていたものらしい。また、「あたしを差し置いて、あのひとと恋仲なんかになつた性悪女に天誅が下るんだつたら……」という気持ちも少なからずあつたのだろう。

ただ、ひとつだけ彼らは誤算をしていた。さすがの軍部も、自分たちの総大将であつたリクを死罪に処すわけには行かなかつたのだ。そこで、隠密がこつそりと彼を連れに來たのであつた。

イヅチや医者様の前ではあくまでも只人ただひとでありたかつたのだろうか、リクは、やって來た隠密たちを別室へと誘つた。

「私は、もう戻るつもりは……」「ならば、せめて妻だけでも連れて……」「ドウタク、そこを何とか……！」そんな声が途切れ途切れに聞こえたが、どうやら全く聞く耳持つてもらえなかつたらしい。四半刻（約30分）ほどして再び現れた彼は、絶望につなだれていた。

『すまぬ……しかし、戻らねば、おまえと、それに医者様が……！』

リクが戻ろうと戻るまいと、イヅチは罪に問われ、追放刑となる。「脱走兵を匿つていたこと」自体は冤罪だとしても、「総大将がここにいることを軍に隠していた罪」「彼を平民になるよう唆し、あまつさえ婚姻関係まで結んだ罪」など、挙げようすればいくらでも挙げられるのだとか。しかも、それを見て見ぬふりしていた医者様も同罪なのだという。

『ですが、お戻りになると確約いただければ、それすべてのこと
に手をつぶります。それだけのことをしても、あなた様にはお
戻りいただきたいと、これは国王陛下じきじきの仰せにござります
ゆえ……』

リクに「ドウタク」と呼ばれていた隠密の頭領は、そう囁いて、
リクのすべての抵抗を封じたのであった。「国王陛下じきじきの仰
せ」と言われば、理不尽な、と抗議するわけにも行かない。それ
に、「国王陛下の決定」としてイヅチたちが罪に問われぬことが村
に伝えられれば、庄屋の息子もハツセも、これを認めざるを得まい
そうしなければ、「陛下の仰せに逆らひ」ことになってしまつ
のだから。

いつして、リクは、その晩のうちに村から姿を消したのだった。
愛しい妻と、恩義ある医者様を守るために……

もつとも、イヅチ自身も、半年後には村を去ることとなつた。

「国王陛下の仰せ」が効いて、確かに表立つては何もされとはい
なかつたが、ハツセの音頭取りで、村の女社会から締め出されつつ
あるのはひしひしと感じていた。それ自体は想定の範囲内だつたし、
自分ひとりのことなら耐えられる自信もあつた。

ところが、一月ほどして珍しく体調が崩れ、医者様に診ても「う
と、どうやら腹に子がいるらしい」とわかつた。

『あたしは何言われたって、何されたっていい。けど、何の罪科も
ないこの子が、やれ父なし子だの、脱走兵の子だのって後ろ指差さ
れながら育つだけは……!』

医者様にそう語ったイヅチは、彼の助言に従つて、つわりが收まり、腹の子が安定してきた頃を見計らつて旅立つことにしたのである。幸い、カノへから一十五里（約100km）ほど南へ下つたところにあるハクトという村に、医者様の医学所時代の友人が住んでいたので、そこで世話になれるよう手配りもしてもらつた。

旅のしたくをしていると、リクの使つていた文机の引き出しから、一通の手紙と、その手紙に丁寧にくるまれた一振りの懐刀ふといるがたなが出てきた。

『此度のこと、どれほど詫びても詫び切れぬほどだ。また、たとえ少しの間でも夫婦として暮らしていたのであるから、子ができるかもしだれぬと氣にもかかっている。

この懐刀は、我が家に代々伝わる唯一無二の宝刀である。もし女子が生まれたら、これを売つて嫁入り道具を買つてやるようだ。また、男子が生まれたら、私と同じリクという名をつけ、成人した暁には、この刀を持たせて王都へ来させてほしい。名前と刀、二つの証さえあれば、どれほど成長していようと、私の子だとすぐにわかる。そして、父子の対面が叶つたならば、せめてもの罪滅ぼしに、何とか身が立つようにしてやるつもりだ』

『このような形で託すことにしては、隠密たちの前で「唯一無二の伝家の宝刀」を人手に渡すのは憚られたからだったのだろう。

『ありがとよ、旦那様。最後まで、こつたら気いつかってくれて…』

押し戴くように刀を手にし、しっかりと懷に収めると、イヅチは手紙をいろいろにくべた。道中の護身の手段としても使えそうな刀はともかく、手紙の方は、こうするのが一番だと思ったのである。

『だって、万が一落としでもしたひ……』

そうして、まかり間違つてリクの家の者の目に触れるよつなことにでもなれば、きっとリクに迷惑がかかってしまう。その文面にこめられた気持ちが本当に嬉しかつただけに、それだけは絶対に避けたかった。

また、同じ理由で、彼の厚意にもすがるつもりはなかつた。だから、約束を守るという意味で、月満ちて生まれてきた息子には、名前こそ同じ「リク」とつけたが、何故そのような名をつけたのかも含め、手紙に書かれていた内容は一切教えていない。無論、父親の出自もだ もつとも、こちらについては、本人がとうとう語らなかつたこともあり、相変わらず「たぶん、王侯貴族の誰がなんだろうねえ」という推測で止まっているのだけれど。

ガタン、と音を立てて、ぶんむくれた顔の息子が卓に突つ伏した。

（ま、この子が独り立ちしないうちにあたしが死ぬよなことにでもなれば、遺言ぐらいはしてやつてもいいけども……）

まんず、それはないだろうねえ、と、イヅチは肩をすくめた。何しろ、幼い頃から風邪ひとつ引かず、つわりのときですら寝込んだことがないほど丈夫なのである。

（つていうか、下手したら、この子の方が先に逝っちゃうだよ）

自分に似たのか大病こそしたことはないものの、父親譲りの小柄で華奢な体格に、人形の如く優しげな顔立ち。おまけに、母一人子一人で育つたせいか、無類の甘えん坊ときている。頼りないことこ

のつえない。

今日も今日とて、中等学校の級友に「チビの女男」とからかわれたとかで、半べソになりながら帰ってきたのだ。そして、そんな息子を自分の向かいに座らせ、

『何だい何だいそんな情けない』ことで、母ちゃんなんか、あんたの年頃には、もうあんたのことを産んで、ひとりで頑張って子育てしてたんだよっ！』

と説教したところで、芋づる式にどうしてやうなったのかということが思い出し、ついついかあつとなつてしまつたところで今に至る、というわけなのだつた。

「……腹減つた」

せりひに情けない声で、息子が呟いた。再び深々とイヅチは嘆息した。

「つたく説教しがいのない子だねえあんたは。……でもま、確かに時分どきではあるが。どれ、夕飯にでも」

言ひながら立ち上がつたところで、突然ぐらりと体が揺れた。

(あ、れ……?)

おかしい。節々に全然力が入らなくて、体の火照りも、さつきと全く変わらない……

「……母ちゃんつー? どうしたんだよ母ちゃん、すゞい熱じやないかー!」

悲鳴にも似た息子の声を聞いたところで、ふつゝと意識が途切れ
た。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

イヅチが罹ったのは、この一帯で数年おきに流行る厄介な疫病だ
った。高熱が何日も続き、激しい嘔吐と下痢にも見舞われる。この
結果、脱水症状を起こして三人に一人は死に至るのだ。

一度この病を乗り越えた者には免疫ができる、次に流行ったときに
は罹らずに済むか、罹っても軽く終わるのだが、イヅチの場合は、
これまで病気ひとつしたことがなかったことが、逆に裏目に出た。
あれよあれよという間に病状は進行し、それからたつた三日後、彼
女は息子に心を残しつつ、三十四年の生涯を閉じた。

この疫病は三年前にも全国的に流行し、このときには、国王ハシ
ム四世と、嫡子の王太子も命を落としていた。その王太子 ユア
ン=リクこそ、イヅチの終生愛した夫・リクにほかならなかつたの
だが、彼女がそれを知ることは、ついぞなかつたのである。

旅立ち

葬式を出してそろそろ二月^{みつき}は経つといふのだが、いまだ毎日のよう
に夢を見る。発病後たった三日で、別人のように痩せこけてしまつ
た母の顔。血の気を失った唇から、かすかに発せられた最期の言葉

『……か、たな……そこの、引き出しの、奥、に……ふところ、が
たな、が……それ、持つて……み、やこへ、おゆ、き……父ちゃん、
が……おまえの、父ちゃんが、そこに……』

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

サラハン大陸歴910年、初夏

「あー、ハクト村のイヅチが息子リク、數え十八（歳）、と……」

目の前に置かれた通行手形を見ながら、関所の役人は、しかつめ
らしくその内容を記帳した。

「よし、通れ。それから……先刻は、その……悪かつたな」

この役人、リクの顔を見るなり、「ここは女子^{おなじ}の来るところでは
ない！ 女子の関所は向こうだぞ！」と一喝したのである。

髪を伸ばしていたわけでも、女物の服を着ていたわけでもないの
に、「身を守るために男の格好で旅をしている女」だと勘違いされ

てしまったのだ 誰が見ても迷うことなく「女らし」と形容するような、厄介な造作に生まれついてしまったばかり。

「の冬には満で十七（歳）にもなるのに、いまだに背丈が五尺一寸（約155cm）程度しかないと云ふことも手伝つて、手形を見せても一向に信じてもらえなかつた。拳句の果てに、明らかに下心満載な手つきで全身をくまなく触られ、その手が股間に来たところで、よつやく誤解が解けたのであつた。

だから、本音を言えば、「『悪かつた』で済むんだつたら捕り方なんか必要ねえだろ！」と瞬間の一つも切つてやりたいリクだつたのだが、とうあえずは、ぐつと我慢した。

（王都まで、まだまだ先是長いからな……）

「こゝは、村から三里（約12km）と離れていない最初の関所だつた。こんな近場で早くも騒ぎを起こして牢屋にぶち込まれているようでは、いつ田指す場所にたどり着けるかわかつたものではない。

「い……いえ、そんな……」

首を振り、精一杯の愛想笑いを浮かべる。が、そこで、しまつた、トリクは後悔した。相手の顔が、みるみるうちに首まで真つ赤になつて行く。

「とつ……とにかく、もひ行け！」

「は、はい……」

悪いことをしたわけでもないのに、逃げるよつてその場をあとした。一丁（約100m）ばかり離れた場所まで来たところで、ようやく足を止め、ふりふり……と息をつく。

「つたぐ、何なんだよも……」

自分の笑顔を見て、他人がしばしばさつきの役人のような反応を起こすことに気づいたのは、村の寺子屋を出て隣町の中等学校に進んだ時分のことだった。さらに長じて、数え十五（歳）の成年式を迎える頃になると、女よりも男の方にその傾向が強いという、非常にありがたくない事実にも気づかされた。

（おかげで、ほんと口クな目に遭わないんだよなあ……好きな娘ができたって、いつも「お友達」止まりだし、男らなんて、一言田には「女男！」だし）

中等学校をはじめとする上級学校は男女別学が基本で、恒常的に異性に飢えていたといふこともあったのだろう、時には「片恋の女の代わりだ」とか何とか言われて、触られたり、抱きつかれたり、場合によつては押し倒されそうになつたりすることもあつた。もちろん、手に噛みついたり股間を蹴り飛ばしたりして、どうにかこうにか回避はしてきたのだけれど。

死んだ母・イヅチには、「からかわれたぐらいで涙田になつて情けない！」とよく叱られたものだつたが、本当のことを言えば、「からかわれたぐらいじゃ済まなかつたから」涙田になつっていたのだ。しかし、男の誇りにかけても、そのようなことなど、よりによつて母に言えるはずはなかつたのであつた。

（あああ……それもこれも、どう考えたつて全部、「父ちゃん」とかいうクソ野郎に似ちまつたせいじゃないか！）

……と言つても、顔も知らない相手なので、本当のところは定かではない。ただ、自分から見て、母に似ていると思われるのは、茶

色い髪と瞳と、村の人々に比べてかなり白い肌ぐらいだったの、ならば顔立ちは父親から受け継いだのだろうと思つたまでだ。

（だいたい、ヤツが生きてるってこと自体、あのときまで全然知らなかつたもんない俺……）

あんまりにも母がその話題に触れないものだから、てっきりとにかく死んでいるものだとばかり思つていた。

それに、土地がやせていて、農作物を作つて売るだけでは暮らしが成り立たないハクト村では、野良仕事をしているのは、年寄りか、それを手伝う女・子どもばかり。父親世代の男たちは、盆暮れや祭りのとき以外は、王都や近在の大きな町に出稼ぎに行つているのが常だつた。つまり、どこの家でも「父ちゃんはいない」のが当たり前だから、自分の家が母一人子一人でもさほど気にならなかつたし、そのことを問いただしてみようとも思わなかつたのである。

けれど、母が亡くなつたあと、言われた場所を開けてみると、確かに、手拭いに幾重にもくるまれた短刀が大事にしまわれてあつた。花と鳥らしき図柄の入つた黒鞘はかなり古ぼけていて、全く冴えない印象だつたが、刃の方は台所の包丁よりもはるかに入念に砥がれており、それだけ母にとつて思い入れの強い品であつたことが窺えた。

《きっと、^{てい}体よく遊ばれて捨てられたんだろうなあ……》

「^{ひひ}狒狒みたいな母ちゃん」にも「天女」と呼ばれていた時期があつた、などとは夢にも思わぬ息子としては、絶対そうだとしか思いよがなかつた。

《どうせこの刀だつて、ヤツにとつちやガラクタ同然の骨董品だつ

たんだれつや》

それを、そもそも由緒ある宝物のようになつて母に渡し、「たとえ別れても、この短刀と同じぐらこあなたのことを大切に思つてゐるから。何かあつたらいつでも王都へ訪ねておいで」とか何とか、さんざん甘い言葉を駆使して言いくるめたものではあるまい。

『……だつたら、訪ねてつゝやうづじやねえか!』

我知らず、眩きが口をついて出でいた。

『んでもりつて、罵声のひとつやふたつ浴びせて、がっぽり慰謝料ふんだくつてやるからよ。覚悟しとけ……!』

正直、雲をつかむような話ではあつた。学校の地理の時間はたいてい夢の中だつたので、王都がいかほどの広さなのか、具体的な数字はパツとは出てこないのだが、少なくとも、ハクト村などとは比べ物にならないほど大規模な都市であることだけは確かだ。人口だって桁違ひなのに違ひない。そこで、この刀だけを手掛けかりに、たつたひとりの人間を捜すなど……

《だけど、村で、いつまでもパツとしない暮らし続けるよりは、ずうつとましだらうからな》

本来なら寺子屋を出たらすぐに働きに出るような身分と暮らし向きであつたにもかかわらず、家計を必死にやりくりして、母はリクを進学させ、「いざれは医学所に進んで医者様におなり」と口癖のように言つてゐた。あるいは、父親自身が、ほかでもない「医者様」だつたのかもしれない。

しかし、残念ながら自分には学問はあまり向いていないようだ
リクの方では思っていた。地理もそうだが、歴史や文学の授業にし
ても、催眠作用のある念佛にしか聞こえない。「乏しい小遣いで、
いかにおやつやメンコや喧嘩独楽を手に入れるか」といった
ことに常に腐心していたおかげで、算盤勘定や損得の判断には若干
自信があるものの、これも「数学」や「経済学」という学問になる
と一気に頭痛の種と化す。医師になるのに最も必要となるであろう
生物学の授業に至っては、力エルの腑分け（解剖）にすら耐え切れ
ず、廁に走ったという体たらしくであつた。

かと言つて、武術や体術で身を立てられるかというと、こちらも
少々難しそうだつた。その昔は「猿」と呼ばれていた母の血を継い
だか、走つたり飛んだりすることは比較的得意だつたが、剣術や柔
術となると、体格が災いしてか、毎回相手に叩きのめされて終わる。
たとえ小兵であろうと、勝てる者は勝てるのだから、要は素質がな
いということなのだろう。

これらのこと総合してみると、自分に向いているのは、何かの
商売か、出納事務方担当の村役人あたりなのだろうとリクは見てい
た。が、村役人は庄屋と同様にほぼ世襲に近く、親が役人ではない
リクに割り込む余地はなかつた。

となれば、都会へ出て商売を立ち上げ、これを足掛かりに一旗挙
げるか、村のほかの男たちと同様に出稼ぎに行くか……ならば、魅
力的なのは断然前者だ。事と次第によつては、王侯貴族並みの大金
持ちになつて父親を見返してやることだつてできるかも知れない。

「……っし、頑張ろ！」

気合を入れ直すようにひとりづけると、リクは再び歩き始めた。
この先何があるのかも、果たして父親に会えるのかどうかもわから
なかつたけれど、とにかく前を向いて進めば、きっと何とかなるは

す
だ
..

「災いのもと」、現る……？

その後は、おおむね順調に旅は進んだ。

南下するにつれて、気温が北国育ちの者にとつては尋常ではない暑さに変わつて行つたり、相変わらず関所で女と間違われて不愉快な思いをしたり、路銀（旅費）の足しに口入屋で料理屋の下働きの仕事を紹介してもらい、皿洗いや掃除のつもりで出かけてみたら、女の着物を着て酌をすることを求められてやっぱり不愉快な思いをしたり……といったこともあるにはあつたが、大きな事故に遭つたり、大病をしたりするに比べたら、まあ「ささやかな災難」「範囲内であつたろう。

それに、意外にも、この外見で得をしたことも多々あつた。宿屋の、特に女将さん連中に、かなり受けが良かつたのだ。ただでさえ顔立ちが「可愛らしい」部類に入るうえに、小柄で華奢なところが、いわゆる母性本能をくすぐるのだろう。

毎回のように「まだ小さいのに、ひとりで旅してるのはかい！」と誤解されるのが難点ではあつたが、そこで「いえ、俺はもう數え十八で」などと余計なことを言つてはいけない。「はい、母ちゃんが死んじやつて……生き別れた父ちゃんを捜して王都まで行く途中なんです」としおらしい声音で答えれば、たいてい「そうかい、それは大変だねえ……」と宿代を大幅にまけてくれるうえに、翌日の朝昼の弁当まで作つて持たせてくれるのである。

もわっと熱い空氣に、ようやくいくばくかの秋の気配が混じり始めた頃、何とか王都から十里（約40km）ちょっとのところまでたどり着いた。

リクの身分と手持ちの路銀では、当然全行程徒步であるが、街道

には、土煙を上げて駆けて行く騎士の馬や、軽快な足取りであつと
いう間に遠ざかつて行く豪商の籠や、悠然とすれ違つていく貴人の
牛車ぎゅうしゃの姿もあつた。

そういうた「いけ好かねえ連中」を横目に、あらためてきつぱり
と決意を固める。

(いつかは絶対ぜってい乗つてやる!—)

そして、どこかに座つて今朝持たせてもらった弁当でも食おう、
と路傍の様子を見渡したところで、不意にリクは目を剥いた。真つ
黒い何かが、猛然とこちらへ向かつて飛んできたのだ。

(な、何だあ……!—?)

果然としているうちに、突然視界が真っ暗になった。「何か」が、
まともにべしゃりと顔面にぶつかったのである。

「つおつ!—」

あわてて引き剥がそうとするのだが、爪のようなものでがつちつ
としがみつかれていて埒が明かない。

(猫?
蝙蝠こうもり?……!—?)

つて、猫は飛ばねえか　内心で自分に突つ込みを入れたところで、やつと相手の力が緩んだ。

「つたく」

ボヤきつつ、その首根っこをつかんで、ぶらーん、とぶら下げる。が、そこでリクは再び田を剥いた。

その生き物はもちろん猫ではなかつたし、さうして蝙蝠でもなかつた。手のひらに乗るほど小さく、胴体とほほ同じ長さの尻尾を含む全身が、真っ黒な鱗に覆われている。頭から背中にかけてだけは、やはり黒くてぽわぽわした鬚たてがみが生えており、この鬚の間から、ピンと立つた耳と、瘤こぶのように小さい灰色の角が一本覗いていた。口元には真っ白な牙。背中には、それこそ蝙蝠のよくな翼が一対

(……つて)

ぞぞぞ、つと背筋を怖おぞけ氣が走つた。まさか、これは……

「どわああ～～～つー！」

思わず叫び声を上げて、リクはそれを投げ捨てた。きゅうり、といつ悲鳴が聞こえた氣もしたが、そんなものに構つてはいられない。

「わ、わ、『災いのもと』だあ～～～つつつーー！」

ダン、と地面を蹴つ飛ばすと、脱兎の如く彼は駆け出した。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

サラハンド大陸に並び立つヘキギヨク（通称・上かみつ國くに）、カムナギ（中なかつ國くに）、ウナバル（下しもつ國くに）の三國には、こんな伝説が伝わつてこる。

はるか太古の昔、この大陸には人だけでなく、竜の一族も暮らしていた。姿がたちの全く違う二つの種族は、それはそれは仲が悪く、あるとき、とうとう戦^{いくさ}が起こつた。

最初は、空を自由に飛べる竜族が圧倒的優位に立っていた。けれど、人族も負けてはいなかつた。空を飛べない分、知恵を絞つて、ついに竜族を撃退したのだ。

敗北した竜族は、天高く、雲の上まで逃げて行き、そこに「天空城」を構えて竜の国を建国した。そして、今も彼らは、水晶玉を通じてこの城から地上界を覗いては、人族へ復讐する機会を狙つているのだという

* S *

。そんなわけで、この三国の民の間では、竜といえば「災いの象徴」。祭祀をつかさどる僧侶や呪術師の中には、「竜の姿を見た者は必ず不幸になる」と断言する者さえある。子どもたちは、これを寝物語に聞かされて育ち、どんな悪童でも、「竜に連れに来てもらひぞー」と一喝されれば、たちまちベソを搔いて謝るほどであった。

(で……「あれ」って、どう見ても、その「竜」ってヤツ、だよな
……?)

しかも、角以外、頭のてっぺんから尻尾の先まで真っ黒ときてい
る。

(……でえええつ、不吉だあ！
不吉すぎるよおおおお~~~~つ！－。)

心中でさりに悲鳴を上げつつ、リクは走った。全速力で走った。ひたすら走った。わき田も振らずに走った。一刻も早く、少しでも遠く、あの生き物から離れるために……何しろ、一生が決まるかもしない旅の途中なのだ。あんな「^{げん}験の悪い物^{もん}」のせいで水を差されたら、たまつたものではない。

ところが、しばりくして何気なく後ろを振り返ったリクは、げ、と硬直した。

(何、で……)

一間^{けん}(約1・8m)と離れていないところに、黒竜がいた。小さな翼を目一杯広げ、異様なまでの速さで滑空しつつ、どんどんこちらに近づいてくる。

(何つでくつこいて来んだよ……つーつーつーつー?)

心で絶叫したのと、スースと前に回り込まれたのが、ほぼ同時だつた。

(うつわ……)

へなへな、と座り込むと、リクは天を仰いだ。すっかり息が切れていった。膝もガクガクと笑っていて、走ることはあらか、立ち上がるということすら、もつ無理だ。

「ええい、じうなつたらヤケだ!」

やぶれかぶれに、開き直る。

「煮るなり焼くなり、好きにしゃがれ……！」

すると、黒竜はゆっくりと地上に下った。黒くて丸い目が、ひたといじりを見つめる。

「さあ、う……」

甲高い声が、牙の間から漏れた。刹那、リクはあっけに取られた。相手が、まるで謝罪でもするかのよつこ、ぺこり、と頭を下げたのだ。

「おまえ……わしあぶつかつたこと、謝つてる、のか……？」

つい話しかけてしまつてから、リクは苦笑した。

(何やつてんだ、俺……)

竜に人の言葉など、わかるさすもないのに……

そんなリクを尻目に、黒竜はくるりと踵を返した。何故か今度は飛ばず、じっとじっと歩き始める。

(……へえ)

自分でも信じがたいことに、その後ろ姿にリクは目を吸い寄せられていた。

(よく見たら……案外面白えな、ここつ
おもじか)

短い足で、長い尻尾を振り振り、じとじとじとじと……「不幸を

運んでくるもの」ところよりは、愛すべき珍獸といった趣だ。

と、突然、その背中が前のめりになつた。かと思つと、ぱたん、
とその場に倒れ伏す。

「おいつー?」

とつさに、リクは相手を拾い上げていた。手のひらに乗せ、ちょ
いちょい、と頬のあたりを指で突いてみる。

「おい! 大丈夫かよ、おいつ……! ?」「
きゅ……」

かすかに鳴いて、黒竜は薄く片目だけを開けた。

『腹が、減つた……』

「……何だ」

一気に脱力して、リクは大きくため息をついた。

「つたぐ、驚かせんな」

たしなめかけて、え、とまたしても硬直する。

(「……今、喋らなかつた、か……! ?）

しかも、その声ときたら ちゃんとした外見とも、それまで発
していた「きゅう」という啼き声とも、全くと言つていいほどそぐ
わない。低くて渋くて、まさに「大人の漢おとこ」という形容がふさわし
いような……

(何だよ、こいつ……)

頭の中を、大量の疑問符が飛び交い始める。

(こいつ、いつたい何者……！？)

すると、黒竜が、再び「あゅるつ、あゅるるる……」と小さく啼いた。それと重なるようにして、先ほどの中低音が響く。

『ああ……団子が食いたい……』

「はあー…？」

すつとさきよくな声をリクは上げ……からにがつくりと脱力した。

「おまえな……そつこいつ」と、そういう声でしみじみと呟くなよ

そんな黒竜が、この先、自分の人生にこれでもか、というほど関わつてこようとは、このときのリクには、まだ知る由もなかつた。

セツセツ、事件です！

誰かに見られでもしたらまずかんじつい、黒竜の「」とほ懷に入れて、茶店を目指すことにした。茶店なら、黒竜が食べたがつている団子も売っているだろうし、店主に断つて、茶の一杯も別に頼めば、リクの手持ちの弁当も食べさせてもらひえのはずだ。

唯一の問題は、懷に余計なものが入っているせいで、着物の帯の上あたりが不自然に膨らんでいることだった。そう、ちょうど女のお胸元のように……

「よおよおねえちゃん！ ひとつつきつでび」「行くの？」「なあなあ、俺らと遊びやせえ？」

案の定、茶店を見つける前に、田代とい遊び人風の連中に見つかった。

(だあれが「ねえちゃん」だつづーのつづーー)

リクは憤然としたが、口には出さなかつた。最初に声をかけてきたのは腕全体に真っ青に刺青を入れた着流し姿の男で、もうひとりは坊主よろしく紫の袈裟など羽織り、金剛杖を手にした男どちらも筋骨隆々として、腕つ節ではとても敵いそうにない。こう手合いは、無視してやり過ごすに限るのだ。

折良く、探していた茶店が目に入った。すかさずそこへ駆け込むと、リクは、店先にいた女将にひしきとすがりついた。

「助けて！ 変なヤツが……！」

「何だつてー？」

在りし日の母・イヅチを思わせるよつな貫禄たっぷりの女将は、たちまち皿を吊り上げて、さりと男たちを睨んだ。

「ウチの前で騒ぎを起こやうたあ、随分といい度胸じゃないか。言つとくけどね、ウチの亭主は、御上から御用を仰せつかつてるんだ。あんたらみたいな破落戸なんか、あつとこいつ間ににお縄にされて牢屋行きだよ！……あんた、ちよことあんた、出でおこで！…」

幸運にも、ビリヤービリヤは捕り方の住まいでもあつたらしい。ちつと叩打しじて、男たちは去つて行つた。

「ありがと、おねえさん！」

「ヒヒヒと笑つと、ペヒヒトリクは頭を下げた。実は、どう見ても「おばれさん」にしか思えない女将なのだが、そこはそれ、笑顔と同様、お得意の処世術といつ奴である。

そして、その狙いは見事に当たつた。

「あれま、おねえさんだなんて……嬉しこと言つてくれた礼に、お茶ぐらい御馳走しようかね」

「ええ？ い、いよ、そんなん……俺、ほんとのこと言つただけなんだし」

「まあ、やだよこの子は。ほんとに口がつまこんだから つて、あんた男の子だったのかい！ いや、「ごめんねえ。可愛い顔してるし、あんなのに追っかけられてたから、てつきり、その……」

「ああ、いいよいよ、気にしないで。いつものことだし、おねえさんに『可愛い』なんて褒められたら悪い気しないし」

「やうかい？ ならいいけど……そうだ、勘違いの説びに、もう一品つけたげるよ。何がいい？」

「ほんとっ！？ ジヤあさ、団子一串くれる？ あと、良かつたらなんだけど、そこの縁台で弁当も食わしてもらえると……」

「ああ、いいともいいとも。ゆっくり食べて行きなー。」

胸を叩いて請け合つと、女将は店の奥に消えた。同時に、『やー』
『やー』、と膨らんだ胸元が動く。

『おい……良いのか？ いくら金子を払わずに済んだとはいっても、おまえが侮辱されたことには変わりないだろ？ だいいち、「おねえさん」とは若い女性のことではないのか？ あの女将に対してそのような呼称を使うとは、まるで詐欺』

「バカ、いいんだよそれで！」

慌ててリクは遮った。

「竜の世界ではどうだか知らないけどな、人の世界じゃ、こいつのは互いにわかつてやつてるもんなんだよ」

『わかつて……？』

「ああ。女将さんだつて、あんなのは俺の世辞だつて百も承知だよ。でも、わかつてたつて、ああ言われりや氣分が良くなるもんなんだ。俺にしたつてそーや。確かに何にも思わないつつたら大嘘になるけど、結果的には、こっちの得になることの方が多いつた。つまり、双方不愉快な思いはしてないつてことだろ？ おまえみたくバカつ正直にほんとのことなんか言つてみる、団子をえ売つてもうえすに店から叩き出されちまうのがオチだぞ」

『そ、そうなのか？ それは困る』

『やうひ……と情けない声を発して、黒竜は黙り込んだ。

やがて女将がお茶と共に運んできたのは、醤と砂糖と酒で甘辛く味をつけた団子と、餡子のたっぷりついた団子の一種類だった。リクは「団子一串」と頼んだはずだったのだが、これも、たぶん「おねえさん」の礼のつもりなのだろう。

「 わぁうんー 」

興奮したよつい皿を上げると、黒竜がぴょいりと顔を出した。

「 ハハハハ、それじゃ見つかるって。それに、できたてまだ熱いし……」

リクがたしなめるのにも構わず、ぱくり、と彼が持っていた餡団子の串にかぶりつく。とたん、それこそあつという間に見つかりそうな勢いで、甲高い悲鳴が響き渡った。

「 わぁい~~~~~んつ ! ! 」

「 ほーら、だから言わんといちやない 」

膚をすくめて、リクは黒竜を懷の中へ押し戻した。ふつ、ふつと、息を吹きかけて、念入りに団子を冷ましてやる。

「 しつかし、竜のへせに猫舌かよ。ほんと、変わてんなあおまえ 」

「 …… わぁうんー 」

ぶんむくれたよつい皿をじるぶ、ぐつと黒竜は巻き筒を巻いた。

* * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * * *

互いの食欲を満たし、店をあとにしたのは、それから四半刻（約30分）ほどあとのことだった。

「なあ、おまえ」

懐の黒竜に向かつて、リクは声をかけた。

「腹も膨れたんだしゃ、そろそろ つて、寝てんのかよつ……」

懐は、規則正しく上下を繰り返していた。よくよく耳をすますと、イビキらしきものも聞こえてきてくる。

（やれやれ……）

リクはため息をついた。

先ほど来の様子を見て、相手に対する偏見 자체はだいぶ薄れつつあつたものの、だからといって、こつまでもこの生き物を懐に入れたまま旅を続けるわけには行かない。

何しろ、自分は王都で商売を始めようと思つているのだ。もし「災いの元」が傍にいる、などとわかつたら、その商売に大いに差し障つてしまつだろう。今回またまた一銭も払わずに済んだが、食い扶持だって確實に増える。竜が財布を持っているなどとは聞いたこともないから、当然、それは自分のぞしい手持ちの中から出さねばならないわけで……

「おー、起きる」

着物の上から相手を振り起しにしかけて、しかし、リクはその手を止めた。

(やつぱ、もうちょっとぐらりこなり、こつか……)

鱗などで覆われているから、魚や蛇のようになにひんやりとして、触れた感じも、ゴシゴシ、ぬらぬら、べちょべちょといった不快なもの想像していたのだが、実際にはそうではなかつた。

(案外、あつたかいんだな、こいつ……)

どちらかといえば、犬や猫の仔を抱いているような気分だ。手を触れている部分からは、着物を通して、ざく、ざくと心臓の鼓動が伝わってくる。それに、すう、すうと安心し切つたような寝息。本来ならば、彼ら竜とリクたち人は「敵」同士。いわば「敵の手に落ちた」も当然なのだから、もつと警戒してしかるべきだつた……

(……やつべ)

一瞬、冗談抜きに母性本能をくすぐられてしまつた 男なのに。

「ええ、うん……」

懐の中から、かすかに啼き声が聞こえた。

「おひ、起きたか

ならば、今度こそ、これから話をする……そつ思つて覗き込んでみると、相手はまだ巻局を巻いたままだつた。

「何だ、寝言かよ……」

というか、竜でも夢を見たり、寝言を口走ったりすることがあるのだろうか。そんな素朴な疑問が胸中を去来したそのとき、黒竜が小さく頭を振った。

『か、んにん……』

あの重低音の「人の声」だった。が、今までとは違い、か細く、震えてすらり。そして、その声に連動したかのように、全身も小刻みに震え始めた。

『かんにん、して……あね、そ……ク……ゴ、イ……』

「かんにんして」とは、確かに「申し訳ない」ということだったが、リク自身は、ほとんど使わない言葉だ。西の隣国・ウナバルの言い回しで、そこからたまに物売りにやってくる商人からは何度も聞いたことがあったが……

(そしたら、じつ、下つ國から來たのか……?)

たかだか団子を恵んでやつただけの自分に、こんなにも無防備に懷いてしまったのも、異郷の地で、異形ゆえに誰かに頼ることもできず、ひとり心細い思いをしていたから……?

ぐつと胸を衝かれた刹那、予期せぬことが起きた。
いきなり体が宙に浮いたかと思うと、ビターン、と地面に叩きつけられたのだ。誰かの足に引っかけられ、転ばされたのだと語るのに、数瞬を要した。

「こつてて……」

まともに地面に打ちつけたのか、鼻に妙な違和感がある。口に流れ込んだ鉄の味に顔をしかめたところで、胸元がペシャンコになつているのに気がついた。

（げ、つぶしちまつた！？）

慌てて跳ね起きて、探つてみる。

（良かつた、いねえや……）

どひやり黒竜は、今の衝撃で懷から飛び出したようだつた。が、安心するのはまだ早かつた。

（ちゅうと待て。じに行つたあいつ！？）

あんなにチビで、外つ国から来て右も左もわからなくて、おまけに「災いの元」なのだ。今度、誰か別の人間に見つかって捕まりでもしたら、どんな目に遭わされるかわからないではないか……！

「おーーー」

しかし、呼びかけようとした声は、そこで凍りついた。みるみるうちに、全身から血の気が引いて行く。

「おー。わっさよくも恥搔かせてくれたなー。」

「何でえ、おまえ男だったのかよ。だったら、お兄さんたち二つと金貸してくれや。……返さねえけどよー。」

先ほどの一人の破落戸、どもが、ニヤニヤしながら立ちはだかっていたのである。

ウソだらマジかよ信じりんねえ!!

「あ、いやあ……ははははは……」

ひきつった笑いをリクは浮かべた。「つたく『冗談じゃねえぞ!
だれがてめえらなんかに……!!』と啖呵を切ってやりたいのは
山々だが、彼我戦力があまりに違いすぎる。

「えーっと、その……じゃつ……」

片手をひょい、と挙げたのと同時に、リクは前方に突進した。ま
さか自分から向かつてくるとは思わなかつたのだろう、破落戸一人
は、たじろいだように身を引いた。

すかさずその間を駆け抜け、リクはひたすら突つ走つた。全速力
で。わき田も振らずに。一刻も早く。ちょっとでも遠く……

(……つて、さつさつから俺、こればっかだな)

だが、こんな連中に関わつていたら、金を巻き上げられるのはも
ちろんのこと、命だつてどうなるかわからぬ。

(やうやく、命があれば何でもできる…これ、俺ん家の家訓つ!
……今決めたんだけどつ…!!)

ところが、数丁（数百メートル）と行かないつか、急に足取り
が重くなつた。

(まづいな……)

思えば、じつは突っ走るのはこれで一度目なのだ。それも、団子屋での休憩をはさんで、ほぼ立て続け 脚力だつて落ちるはずである。

「ぜ……は……は……」

だんだん息が上がり始めた。左の足首の具合も、何だかおかしい。関節が浮いているような感覚と、ずきずきとした痛みが、数歩おきに襲つてくる。

（そつか……引っかけられたとき、ひねりまつたんだ……）

そう思い当たった瞬間、とつとう、かくんと体が傾き、ザザーッとその場に転倒した。

「ハ……ハハハ……」

再び傷めた足首を押されて、リクは呻いた。どうか振り切れていいますよう、と祈る気持ちで後方を窺う。が、祈りむなしく、破落戸たちはじつじくリクを追つてきていた。

（やつべ、こんなところで座り込んでる場合じゃねえぞ……）

渾身の力をこめて、リクは立ち上がろうとした。とたん、激痛が足から脳天までを貫き、またしても呻き声を上げて倒れ込む。逃げるどころか、もはや動くことすらかなわなかつた。

（これまでか……）

観念して、リクは田をつぶつた

「ハザードがあるみたいだねー。」

突如、絶叫が響き渡った。

(. . .)

驚いて、リクは目を開けた。
恐る恐る、後ろを振り返つてみる。
そして……啞然とした。

本来なら喜ぶべき場面が、そこには展開されていた 悲鳴を上げてのた打ち回っていたのは、刺青の男だつたのだから。その手は必死に右目を押さえており、そこからは、だらだらと血が流れ落ちている。

「い、痛え……痛えよお……！」

「だつ……誰でえ、こんな真似しやがつたのは！」

仲間を襲つた突然の悲劇に、
袈裟の男が怯えたような声を張り上げた。

「ふ、ふ、ふ、ふざけやがつて……」
「ふざけてなどいなー」

間髪入れず、に答へ、ずすいと進み出たのは、リクの全く知らない男だつた。六尺（約180cm）はあり、そながつしりとした長身に、ほんの少し癖のかかつた長くて黒い髪。浅黒く彫りの深い顔立ちは、役者と見まじうほど整つてゐる。

つまり、この男こそが、刺青男に華麗なる一撃を放つた「救いの神」だったのである。その状況から考えても、まさに颯爽という形

容がふさわしい登場ぶり

の、はずなのだ、が。

(「ど、どひしよ……俺、全然喜べねえんだけど）

刺青男の目には、串が突き立っていた 明らかに、どいかで見
た竹串が。

「私は極めて大真面目だが？」

そう続けた声にも、これまたどいかで聞いた覚えがあった。いか
にも「大人の漢」^{おとこ}という感じの、渋みの効いた重低音……

(「こいつは……黒竜^{あいつ}、だよな……？」)

あの、ちんちくりんでとてとて歩きの黒竜の特徴自体は、かけら
ほども残つていなかつた。けれど、声が声だし、得物（武器）に至
つては団子の串ときているのだ。おまけに……

(「何つでこいつ、上半身真つ裸^ぱなんだよおおつ！…」)

下半身だつて、どこから持つてきたのか、薄汚れた変な布きれを
形ばかり巻いただけで……風呂上がりかー！と突つ込みたくなるよう
な姿である。そんな外見をしておきながら、「大真面目」と言い切
るその「ズレつぷり」、どう考へても、あの黒竜以外あり得ない
ではないか。

「ち、ち、畜生お……おつ、覚えてやがれ……！」

お決まりの捨て台詞を放つた袈裟の男が、相棒をひきずつてさつと逃げて行つたのも、恐らくは「危ない」と直感したからなのだ
　　「　いりいろな意味で。

そして、そう思ったのは、どうやらソクひとりだけではなかつたらしい。ただでさえ「関わりたくない」という風情で遠巻きにこちらを見ているだけだった人の群れが、あつとう間に焼き消えた。誰もが、まるで今のことなどなかつたかのような顔で、心なしか足早にその場を去つて行こうとしている。

（何か、俺も、ちょっとこの場からいなくなりたいんすけど……）

思わず、リクはべそを搔いた。はつかり言つて、不本意だつたのだ

「まつたく、何を考えてこりのやひ……嘆かわしこことだ」

自分の方がよっぽど「何考えてんだか」という格好のまま、もつともらしくため息などつこっているこの男と「仲間だ」などと思われるのね。

「どうした少年。先を急がんと口が暮れるぞ」

「……ええ、急がますともー！」

あなたと別経路でね……！　と、一いちばん助けられた手前こそり心だけで咳くと、リクは、傷めた足を引きずりながらも、猛然と歩き始めた。

あとには、怪訝な顔の黒竜のみが残された。

「何だ、助けられたといつのに礼の一言も言わずに」

ぼそり、と黒竜は呟いた。それから、あらためて自分の身を眺め、はあ、と深くため息をつく。

(まあ、この姿ではしかたがない、か……だが、私とて、好きでこのような有様になつたわけではないのだがな)

一刻も早く助けたいと思つた。そのためには、小さくて非力な仔竜の姿ではなく、人の姿になる必要があつた。ところが、何しろ竜は服を着ていないから、そのままでは上半身どころか全裸となつてしまつ。それで、とりあえず下半身だけ隠して、急いで駆けつけたのだ。

(こんなことなら、多少無理をしてでも、衣服の入つた巾着を持つてくるのだった……)

天を仰ぎ、慨嘆したそのときだつた。いきなり、強烈な眩暈に襲われた。

(……しまつた!)

仔竜であったときなら、団子一本で十分に腹が膨れた。が、六尺余りの人にとっては、それでは全く腹の足しにならない。それなのに、あのような形で体力を使つたりしたから……

しかし、時、既に遅かつた。すうっと皿の前から色彩が消え、やがて、ふつん、と意識が途絶えた。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

次に気がついたときには、布団の上に寝かされていた。

(「これは……宿屋、か……？」)

見回すと、果たしてそこには宿屋の大部屋であるようだつた。相部屋になつた男たちの好奇の混じつた視線を感じて、慌てて我が身を確認してみると、いまだ人の姿のままであつた。どうやら、「竜だからではなく、「病人らしき者が運ばれてきたから」、様子を窺われていたものらしい。

「……田え覚めたか

ぶつきりとうな声が頭の上から聞こえた。

「少年」

「『少年』じゃねえ、リクだ」

さうにぶつきりとうに、リクは答えた。その眉が、次の瞬間、ぴーん、と吊り上がる。

「ああああもお、おまえってヤツは……つづー

そりやあ、おまえのおかげであいつらにとつ捕まらないで済んだ」とは認めるよ? けどな、それと引き換えて、どんだけ俺が大変な思いさせられたか!

ああやつて半身真っ裸^ぱで現れられただけでも十分こつ恥ずかしかつたのに、そのカツコのまんま、あんな道端でぶつ倒れやがつて……『あれ、あんたの念兄(男色における攻め役)じゃないのかい』

つて知らねえヤツに呼びに来られたときには、いつちがぶつ倒れそ
うになつたぞマジで！！

おまけに、んなこと言われたせいで、今度はその辺のヤツらみん
なに思いつ切りへんな目で見られてさ。で、その「へんな目」浴び
つつ、おまえ引きずつて、まずは呉服屋行つて、ほら、今おまえが
着てるその服買つて。おまえ寝かすのに宿探して、泊まる算段もし
て　ああ、ぶっちゃけ地獄だつたねほんと…　足は痛えし、おま
え超重いし……氣い失つてつから余計にさ…！…

あと、服代と宿代、当然いつぺんになんか支払えねえから、どつ
ちもツケにしてもう羽目にもなるし　おかげで今晚っから、こ
この風呂掃除に便所掃除に皿洗いに……ああ、おまえは手伝つてくれ
んなくていいからな？　んなことされたら、かえつて仕事が増えち
まいそうちからつつ…！…

「ひづらひづら」口を差し挟む暇も「ええす」一気に喋り倒すと、ぜい、ぜい、
はあ、はあと肩で息をつく。確かに、相当疲労困憊しているようこ
見えた。

「その……済まなかつたな」

身を起こすと、ひとまず黒竜は頭を下げた。

「頭を触ってくれれば、竜体になつたのだが……」
「つゆう、たい……？」

リクの目が、裏返らんばかりにひん剥かれた。それ自体は、黒竜
がどうさに思いついた造語である。「竜の身体」や「竜の姿」など
と言えば同室の者がどんな反応を示すかわからないので、音を聞い
ただけでは何のことだかわからぬような、しかし、彼が竜である
ことを知っている者　つまり、リクが聞けば、なるほど、と思い

当たる表現を使ったのだ。

「つてことは何か、あそこでおまえの頭を一発ひっぱたいてササッと懷あたりに突っ込んだきや、少なくともそのあと、あんな重たい思いだけはしなくて済んだ、と……」

「まあ…… そうなるな」

「……それを先に教える、この大バカ野郎——つづ——」

黒竜の胸ぐらを引っつかんで、リクは吼えた。

黒竜、はじめのおひつだい！？

「……カイツ……」

それから半刻（約1時間）ほど後。相変わらず、リクの眉は吊り上がりまくっていた。

「俺、おまえに『手伝つな』って言つたよなあ……ーっ！」

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

「カイ」というのは黒竜の名だ。人前で「竜」という言葉を連呼するのも憚られたので、自分が名乗ったのをきっかけに確認したのである。

思えば、そのときの方が、まだ状況はましだった。というか、その時点が最高だつたとも言えた。

くるぶしの痛みがなかなか引かず、このままでは約束していた宿の手伝いにも差し支えそうだつたので、荷物の中から湿布薬と包帯を出して手当てをすることにした。すると、「ひとりでは難しいであろう」と言って、カイが包帯を巻くのを手伝ってくれたのだ。最初は「ほんと大丈夫なのか……？」と危ぶんでいたリクだったのだが、相手が手を動かし始めた瞬間、息を呑んだ。

『おまえ、医者様みたいだな……』

実際、巻き終わる頃には、痛みはほぼ半減していた。しかも、力

イは、この处置に加えて、どうやって交渉したのか宿屋の主人から氷を少しばかり分けてもらい、手拭いに包んで患部を丹念に冷やしててくれた。おかげで、板場（厨房）に手伝いに向かう刻限には、歩くのもほとんじ不自由しなくなつた。

だから、カイは満で二十歳だとも言つていたので、明らかにあり得ないことはあるが、「もし父ぢやんつて野郎が医者様だったら、こんな感じのヤツなんだろ？」「などとこいつことわえ、ちらりと思つたものだつたのに……」

大部屋に泊まっている者たちは外で食事をするのが普通だが、個室を取るよつな金持ち連中は、自分の部屋に運んでもらつて食べることが多い。彼らの使つた食器を洗うのが、今夜の板場でのリクの仕事だつた。

ところが、あれほど「手伝うな」と言い含めていたはずのカイが突然現れ、洗い終わつた食器を重ねて棚にしまおうとしたのである。本人は「やはりおまえひとりでは大変そうだから」と言つていたが、まず間違いなく、くるぶしの手当ての件で調子づいたからなのに決まつている。

しかし、柳の下に同じドジョウは「匂」といないものだ。折悪しくそこへ板前のひとりがやつてきた。そして、食器を抱えて一步踏み出そうとしたカイと派手に衝突したのである。

ほんっ！

腹が立つほど小気味いい音と共に、リクの皿の前で着物「だけ」がふわりと宙に浮いた。それが、ふあさり、と床に落ちたのと、がつしゃーん！と全部の皿が床に叩きつけられたのとが、ほぼ同時にであつた。

『うわああつ！ すみませんすみませんすみませんつづつ……』

慌てて、リクは平身低頭した。とにかく、ここは謝り倒すしかない。それに、人ひとりが忽然と消え失せた、という不可思議な状況を、一刻も早く相手に忘れさせねば……という思惑もあった。

『すーーっとぐに片付けますからっつーー！』

もう一発、深々と頭を下げて、そのついでに、足元の着物を「中鳥」（じどり）とひょいとつまみ上げる。

『とりあえず、まず、これ何とかしますねえー。』

お愛想笑いしつつ、いかにもそれをどこかへ捨てに行くようなふりをしていったんその場を離れ

『…………カイツ……！俺、おまえに「手伝つな」って言つたよなあ……！？』

この時点に至るのであった。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

「いいか？」

「んやうやく、と声を潜めて、リクは命令した。

「人目につかないところにぶん投げてやるから、さつさと人になつて、ここに掃除しろー！」

「 もう、……？」

布地の内側から、怪訝な声が響く。

『何故だ……今「手伝つな」と言つたばかりではないか』
「…………あのなあ……」

ますますリクは眉を吊つ上げた。

「これは『手伝い』じゃねえ、『落とし前』だ！ 自分の尻拭いぐらいい、自分できつりやりやがれッ！…」

言い捨てて、憤然と元の場所に戻る。

（…………とはいえ、俺も知らん顔つてわけには行かねえだろ？なあ）

ため息をついて、リクはその場に屈んだ。

床の上は、まるで花火大会のような有様になつていた。赤やら青やら黄色やらの派手な絵皿のなれの果てが、あつちこつちと一面に飛び散つている。薄青色の模様入りの破片は、醤油が味噌用の小皿だろうか。てろんと茶色いかけらは、たぶん、酒か何かを入れるぐい呑みといったところか……

（まあ、俺でも泊まれるような宿だ、田ん玉飛び出るほど高価な品つてのはないだらうけど……）

それでも、これだけたくさん割れてしまったのだ、一田や一田べらい無償働きしたところで、弁償し切れるかどうか……

（…………ああああ、それもこれも、ぜんぶあの「バカラ」のせいだ

（！）

「伝説」は、正しかったのだ。実際、あの竜と出会つてから、口クな目に遭つていないではないか……

「おい、こつまでぐずぐずしてんだよつ……」

たちまち腹わたが煮えくり返つてきて、リクは相手を「捨ててきた」方に向かつて怒鳴つた。

「さつさと

」

しかし、そこで彼は瞠目した。

リクに言われるまでもなく、カイは「さつさと働いて」いた。それも、文字通り「さつさと」「ものすごい速さ」で。

異様に慣れた手つきで、床に散つた皿のかけらを次々、次々と小脇に抱えた塵箱に入れて行く。それが終わると、いつの間に見つけたのか、短めの棕櫚簾を持つてきて、食器をぶちまけた場所のみならず、板場の床といふ床を一寸の隙もなく掃き清める。さらにその床を、これもどこからか持つてきた雑巾で、きゅうきゅ、きゅきゅと磨き上げ……

「…………つて！　うへ、いらっしゃい、待てつてば、おい…………！」

ぶつたまげて、リクは相手の次の動きを制した。

「何、床なんか舐めようとしてんだよ、おまえ！？」

いらっしゃいに拭いたとはいえ……面妖な趣味の客を取る店でも

あるまいし。

しかし、カイは顔色ひとつ変えなかつた。

「以前、教わつたのだ。掃除をしたあとは、本当に何も残つておらぬかどうか、必ず舐めて確認しようと……」

「……げ」

どんな教えただ、それは それとも、竜の国では、それが「常識」としてまことにしゃかに通用しているのだろうか？

「なあ…… それ、絶対おかしいって。誰に教わつたんだよ、そんな妙なこと？」

「そうだな…… 遠い親戚と言つたところが」

ふと、記憶をたどるまなざしになつてカイは答えた。

「事情があつて預けられていたのだが、そこの中主の息子が、よくこのように床に食器をぶちまけてな。それを掃除するのが、私の日課のようなものだつた……」

「…………おまえさあ」

リクは、ありありと顔をしかめた。

「それつて、もしかして…… つてか、もしかしなくても、はつきりきつぱり『いじめられてた』んじやね？」

「そうとも言つたな」

あつさつと、カイは肯定した。その表情が、次の瞬間、何故かふつと緩む。

「そうか……やはりあれは『嫌がらせ』であつて、『常識』ではなかつたのだな。いや、自分でも、不愉快だとはいつも思つていたのだ。だが、もし、それが世の習いであって、万民が同じようにしているのであれば、私も我慢すべきなのだろうな、とも……しかし、そうではなかつたのだな。良かった。あのよつな思いをしていたのが私ひとりだけであつて……」

「カイ……」

微笑みさえ浮かべて述懐する相手を、信じ難い思いでリクは見つめた。

「おまえ、相当なお人好しだな そんなことだから、つけ入られていじめられたりすんじゃね？」

言いながら、心の隅に、妙な引っかかりを覚える。が、その「引っかかり」が何なのかを見極める前に、背後でどよめきが上がった。

「おおっ、こいつあすげえ！」

「まるで職人技みてえにぴつかぴかじゃねえか！！」

「ウチにも掃除しに来てもらいたいぐらいだよ

驚いて振り返ると、板前や下働きの女たちが揃つて感嘆の声を上げていた。その中には、何と宿屋の主人の顔も見える。

「いやはや、思つていた以上の仕事ぶり、感心しました。その気持ちの印と言つてはナンですが、湯屋の掃除のとき、ついでに一風呂浴びてくれて構いませんよ 無論、追加のお代はなしでね」「鍋釜も磨いてくれたら、あとで賄いも差し入れてやるぜ。さつきの詫びも兼ねてな」

横合いから、カイとぶつかつた板前も口をはそむ。

「うわあ、ほんとっすか！？」

たちまちリクは舞い上がつた。食事と同様、宿屋備えつけの内風呂も、基本的には個室の客のもの。大部屋の客は別料金を払わねば入れないので、外の湯屋に行くのが当たり前だったのだ。それに、板場の賄いとはいえ、食事代が浮くのもありがたかった。

「よーしカイ、それじゃ、まずは鍋釜から行くか！！」

張り切つて、彼はカイを急き立て……それつきり、「引っかかり」のことはすっかり忘れてしまった。

廁と湯屋でも大騒ぎ！

板場での作業が一通り終わると、一人は廁へ移動した。廁掃除も約束のうちであつたし、湯屋の方は、まだ人が使つてゐる気配がしていたので後回しにすることにしたのだ。

「……なあ」

先ほどと同じ調子で壁やら床やらをきゅっきゅ、きゅっきゅと拭き清めてくるカイを見やつて、おもむろにリクが口を開いた。

「ひょっとしておまえ、食器の始末だけじゃなくって、便所掃除も『皿課のよつなもの』だったとか……？」

あの板前たちの言ではないが、カイの手つきときたら、まさに本職の掃除屋のようだつたのだ。こうして見ている間にも、あつという間に、見違えるように何もかもがきれいになつて行く。

だから、実を言えばリクの出番は全くなかつた。それどころか、こんなお喋りをしている暇があつたら、先に湯屋に回つて、湯浴み客がいなくなる頃合いを待ち待ち、三助（風呂を沸かしたり客の背中を流したりする者）の手伝いでもした方が良いのではないかとう氣もする。それなのに、何となくここを離れられずにいたのは、えらく不安だつたからであつた。

（だつて、ここにひとつ置いといたら、今度は便器でも舐めかねねえじゃんか！）

いくら真実がわかつたとはいゝ、一度身についた習慣はそつそつ簡単に消えるものではない。ましてやこの男、茶屋の女将の一件で

もわかるように、筋金入りの堅物で、融通など全く利をやつにないのだ。

「いや、それは日課ではなかつた

その便器を拭き始めながら、淡々とカイは答えた。

「そつか

思わずほつと、リクは吐息を漏らした。

「そうだよな、さすがにそこまでは

」

「そちらは、三田に一度ぐらいで許してもらひえた

「そ、そうですか……」

としか言えずに、リクはポリポリと頭を搔いた。

予想通り極めて自然に便器を舐めかけたカイを大わらわで制止し、湯屋に向かつたのは、それから半刻（約1時間）ほどしてからのことだった。

掃除してから自分たちが入つては、せつかくきれいにしたものを見た汚してしまうことになりかねないので、先に湯浴みをし、その湯を落としつつ掃除することにした。このあたりの湯はどうやら温泉の質を持っているらしく、傷めた足にじんわりと心地良さが広がつて行く。

「あまり長い」とは浸かるなよ。温めすぎて、腫れがぶり返しでもしたら難儀よね

「ああ、わかつてるつて

やはり医者様のような口をきくカイに、いたせかうるむかうに心じるし、リクは、湯の中で、うーん、と伸びをした。

「何つーか……おまえって、案外『苦労人』だつたんだな。いや、竜なんだから『苦労竜』か」

誰もいのをいいことに、つい口が滑つた。ところが、並んで浴槽に身を沈めたカイから返ってきたのは、意外すぎる反応だった。

「いや、前者で正解だ。苦労したかどうか、といつことはともかく、少なくとも私は人として生まれ、人として育つてきたからな」

「……へつつ！？」

うつかり湯屋じゅうにこだまするよつな声を上げて、リクは慌てて首をすくめた。

「だ、だけど……その……」

「まあ、おまえが誤解するのも無理はないがな」

カイは苦笑した。

「先に、あの姿の私と出会つたのだから……恐らぐ、今のこの姿も『人に化けた結果』だと思つていたのだつ？」

「……はい。大当たりです……」

素直に認めて、ぶくぶく、とリクは口まで湯に沈んだ。

そんな彼を見やつて、もう一度カイは苦笑した。それから、少しだけ迷うように視線を泳がせ……話しても構わぬかな、と呴いて、

そりに続けた。

「確かに私は、厳密に言えば、人だとも言い切れぬのだよ。つまり、人と竜との混血児だというわけだ。

しかし、私自身がその事実を知ったのは、ほんの半年ほど前のことだったのだ。頭の、ちょうど竜体だと角のある位置に何らかの形で触れると竜になつてしまふのだ、ということもな。

それゆえ、そのような現象には少々不慣れで……実のところ、自分でもこの^{へんげ}変化をいまひとつ制御しきれていないのだ。そのせいで、おまえにもあれこれと迷惑をかけてしまつて……」

……ばしゃん。

こきなり、カイは湯に顔をつけ、そのままぶくぶくぶく……と水中に潜つた。

「おい……？」

驚いて覗き込んだリクは、次の瞬間、はつとした。相手の肩が、昼間と同じように小刻みに震えている。何となく追求してはいけないような気がして、何食わぬ顔でリクは浴槽から出た。

ところが、ついでに床ぐらいは先に磨いておこうか、と浴場の隅に置いてある束子たわしを取りに行き、それを持つて戻つてきただとこりで、異変に気づいた。湯の表面が、鏡のように鎮まり返つていたのだ。それは、潜っている者が一切の動きを止めたのだといふことに他ならなかつた。すなわち……

「なつこにやつてんだよおまえ～～つづ…」

無我夢中で湯に手を突っ込むと、リクはカイの頭をぺしん、と叩いた。人よりは仔竜になっていた方が助け上げやすいと思ったのだ。たちまち水中に波紋が起こり、六尺超えの偉丈夫は、手のひら大のチビ黒竜に変化した。恐れていた通り、ピクリとも動くことなく、ますます底へ底へと沈んで行く。

「ちょ、おいつ……！」

そんな相手を湯から引っ張り出し、逆さ吊りにしてその背をびしばし引っぱたいた。無論、いじめているのではない。飲み込んでしまった湯を吐かせて息を吹き返させるためだ。

「あゅ……ぴゅるるるーー！」

ややあつて、甲高い啼き声と共に、湯が空中に弧を描いた。耳を近づけてみると、荒いながらも呼吸が蘇つてきている。

「やれやれ……ほんと、おまえってば騒ぎしか起こさねえのな」

リクは眉をひそめたが、その口調には確實に安堵が含まれていた。

『何やら、また面倒をかけてしまったようだな……』

手のひらの上から、恐縮した声が聞こえた。ひょいとその手のひらから飛び下りると、カイは自ら頭を叩き、再び人の姿に戻った。当然、全裸の男が現れるわけなのだが、今回の場合は湯屋なので何ら問題はない。股間を隠していた手拭いだけは湯の中に残ったままだつたために、違う意味でリクに衝撃を与えてしまったことは別として。

(ま……しょうがねえよな。こんだけ体格差、あるんだし。……そ
おだよ、俺だつて、もつちよつと背が伸びれば、きっと、せつと
… つつー)

必死になつて自分を鼓舞していると、ふう、と物憂げな吐息が聞
こえた。見れば、カイは浴槽の縁に腰を掛け、窓の外に浮かんだ満
月を振り仰いでいた。差し込んでくる月明かりが、端正な造作の上
に絶妙な陰影を作り出し、あたかも一幅の絵のようである。

(つたぐ、全裸で、しかも溺れた直後だつづーのに、何でこんなに
キマつてやがんだよここつは……！)

相手に負けないくらい陰鬱な表情にリクはなつた。絵心があつた
ら、このまんまの図描いて高値で売りさばいてやるとこだけにな
と、やつかみ半分で不届きな了見を抱く。

けれど、程なく彼は、それを心から後悔することとなつた。

「実を言つと、『熱いもの』には全般的に慣れていないので

物憂げな表情を崩さぬまま、カイは言葉を継いだ。

「例の親戚の家にいた時分は、食事も風呂も皆が終わつたあの冷
え切つたものを……という有様だつたし、幸い今の屋敷ではそれな
りに良くしてもらつているのだが、何と言つか……贅沢者と謗られ
そうだが、正直なところ『良くなれすぎ』いると言つか……

食事は毒見役を通して運ばれてくるので、私のところに来る頃に
は味すらよくわからぬほど冷え切つているし、風呂は風呂で、火傷
でもさせたら切腹ものだからとか何とか言つて、湯冷めのしそうな
ほどぬるい湯しか使わせてもらえぬし……

そんなわけで、せつかく焼きたての団子を食う機会に恵まれても、すぐに舌を火傷するし、先ほどのような熱い湯に浸かれば、あつと、いつ間に湯あたりを起こすし……

……リク？ どうしたのだ、リク……？」

完璧にリクは固まっていた。

（な……何なの？ その「屋敷」とか「毒見役」とか「火傷でもさせたら切腹もの」とかつて……）

そして、唐突に思い当たつた 先刻感じた「引っかかり」の正体に。

（やつ語や、あんともも「万民」とか言つてたよな、こいつ……）

もともと、堅苦しい物言いをする男だとは思つていた。だが、ただ性格的に堅苦しいだけで、このような言葉がするつと口をついて出るものだらうか……？

（だいたい、「万民」なんつー言葉使つたり、その「万民」に思いを馳せたりするのつて、王侯貴族だと、いっぱい領民抱えてる御領主様、ぐらい、なん、じゃ……）

さあつ、と顔から血の気が引いて行つた。さすがに王侯貴族が王都から十里も離れた場所を普通にうろついているはずはないだろうが、「御領主様」ならば十分にあり得る。例えば、領内の視察において、「^{へんげ}変化を制御しきれず」突然竜の姿になってしまい、さすがに領民にそれが知れたらまずいので、取る物も取りあえず逃げ出してきた、とか……

(だと、したが……)

親戚に預けられ、虐げられて育つたという幼い頃はともかく、今では、「この男」否、「この御方」は、庄屋や村役人でさえ「ははーっ！」と地べたに這いつぶばらせることができる立場にあるのだ。ましてや、リクのような、さらに格下の庶民にとっては、それこそ「雲上人」以外の何者でもないわけで……

(おおおおおお俺、そんな御方の「」と「おおえ」呼ばわりして、
したり顔で説教したりとか、「」の大バカ野郎——つづ……」「」
つまでぐずぐずしてんだよつづ……」なんて怒鳴つたりとか……)

おまけに、頭引っぱたいて、床吊りにして、背中ばしばし、とか

۱۰۷

全身から、一気に冷や汗が噴き出す。

.....

絶体絶命！からの……

「これは……何だ？」

脱衣場に土下座したリクと、目の前に捧げられた短刀とを、カイは訝しげに見比べた。

「ははははいつ、ふつ、懐刀ですつ！　その、父ぢや　いや、父の形見でつ……！」

震える声で、リクは答えた。カイの方では文字通り「何だ」と尋ねただけなのだが、「相手は雲上人なのだ」という先入観が邪魔して、「どういうことだ」と責められているようにしか聞こえてない。

「しつ、知らなかつたことはいえ、これまでの数々の御無礼そつ、そのつ、お、お、御手討ちにされても、ぜ、全然、おかしくないか、とつ……！　だつ、だつたら、せめて、父の、この刀でつ……！」

「……それで、私に人殺しをせよ、と？」

「はひつ！？」

思つてもみない返しに、リクはますます縮み上がった。

(や、やべえ……かえつて怒らせた！?)

彼の知つている「偉い御方」　　村の庄屋や役人や大金持ちの商人たちは、こんな侮辱を受けたら、むしろ自分から率先して刀を振り上げ、相手に斬りつけることすら辞さない人々だった。その窮地

から逃れる方法は、ただひとつ ひたすら謝り倒し、殊勝なところを見せ、できれば金一封も差し出して、相手の心変わりを誘つこと。だから、金一封は無理としても、せめて潔さを印象づけることで、何とか罪一等ぐらには減じてもうれしいだろうか、と思つたのだが……

(……って、そつ言や、この御方つて、そういうの「常識」が通用しないんだった!)

今さら思い出して、リクは愕然とした。ああ、もうだめだ。「そんな小細工を弄して私の気が変わると思つたら大間違いだ! だったら望むようにしてやひつではないか!—」とか何とか言われて、斬られちまうんだ……

ふう、と太いため息を漏らして、カイはリクの手から短刀を取り上げた。ちらり、と上田づかいに窺つてみると、じつとその鞄を見つめ、矯めつ眇めつしている様子だ。「あ、それ、お気に召したんだつたら差し上げますけど!」と言いかけて、リクは慌てて言葉を呑んだ。いけない、いけない。ほかの「偉いさん」だつたらいざ知らず、この御方の場合、「今、父の形見だと言つたばかりではないか! それをそのように簡単に差し出そとは何事だ!」と逆に激昂されて、結局……

(「めんぬぢやん! こんなに早くせつちに行へ」とになつちまつて……!)

皿を閉じ、体を固くしたそのときだった。

「杏に鶯か 美しい文様だな」

「へつ?」

「鞆自体は古いが、かなりの業物だ。手入れも行き届いている
これは、おまえが？」

「え、い、いえっ、は、母が……」

「そうか」

相槌と共に、刀がリクの手に戻された。恐る恐る口を開けると、相手は穏やかに微笑んでいた。

「父御と母御の思いがこもった守り刀、といつわけだな。羨ましい」とだ。古来より、刀剣には魂が宿ると聞く。この先の道中でも、きっとおまえを守ってくれよう

「…………え？」

耳を疑つたせいで、一瞬反応が遅れた。

(「の先の、道中……？」)

と、こいつとは……

「お、お赦し、いただけるの、で……？」

「赦すも赦さないも、おまえは私に、感謝されることはないとも責められることなど何もしておらぬだろうが」

呆れたようにカイは言った。刹那、その表情が一転して搔き曇る。

「それ」「おまえは、人を斬り殺したことがあるのか？」

「え……」

ふるふるふる、と首を振つて否定すると、「であろうな」と言って、カイはかすかに唇を歪めた。

「ないから、そのように軽々しいことが言えるのだ。だがな、あれは……地獄ぞ」

雷に打たれたような心地で、リクは相手を凝視していた。

ぎこちない時間が流れていった。頃合いを見て、どちらからともなく湯を落とし、掃除に取りかかったのだが、全くと言つていいほど会話がない。

「……そのようだ堅苦しくするな

その掃除が終わりに近づいた頃、耐えかねたようにカイが呟いた。
「確かに、私は屋敷に帰れば当主として持ち上げられ、傳かる立場にある。しかしながら、それは、私自身の価値とは何ら関係がないのだ。

私の生母は王城の近くにある森の番人の娘で、妾として屋敷へ迎えられた。屋敷には正妻がいて、息子も三人もあった。私が他家へ預けられたのも、まあ、そのあたりの関係で……というのか？その後、家を継ぐべき兄たちが不幸にも次々と亡くなり、私にそのお鉢が回つてこなかつたら、恐らくは今も、預けられ先で奴婢同然の暮らしを送っていたことだろうな。

しかも……私には竜の血が流れていると言つたであらう？　それは、母が、実は屋敷に入る前に竜と関わりを持ち、私を身ごもつていたからだったのだ。つまり、私は

「いいよ、それ以上は」

ようやく、リクが口を開いた。

遮ったのも、言葉づかいを元に戻したのも、無論、話の流れを読

んでのことだつた。要するに、カイは本当はその屋敷の当主の血筋でも何でもなく、リクと同様に庶民の子であり、おまけに実の父親は人ですらなかつたのだ。カイの立場からすれば、当然それは絶対に秘密にしなければならないことなのだらうじ、それを知つてしまつてなお「いいですよ、それ以上はおっしゃらなくても」といつた喋り方を続ければ、かえつて嫌味に聞こえてもしまつだろう。

「あのわ……ひょっとして、お屋敷を出たのもやのことがらみで、とか……?」

迷いながらも確かめてみると、リクの口づなずきが返つてきた。

「リのままではいかんと思つたのだ。血筋についてはもはや如何ともし難いが、せめて中身だけでも当主にふさわしい者であらねば、と……

それで、まあ……格好をつけて言つなり、『修行の旅』に出た、とでも言つのか? それゆえに、そろそろ戻るつもりではあるのだが、いつまでも当主不在では、家の者も困りつしな

「やつ、か……」

リクはため息をついた。それから、急に田の色を変えた。

「だから風呂の床なんか舐めちゃダメだつて!」

「い、いや……すまん。つい、癖で」

「何が『つ』だよつ! まずいつから『修行』しおまえは一つ!」

もつとも、これをきっかけに、お互い特にリクが、完全に今までの調子に戻ることができたのだから、怪我の功名とも言えなくはなかつたのだけれど。

ともあれ、何とか掃除も終わり、二人は湯屋から廊下に出た。すると、あの板前が向こうからやってきて、

「おう！ 例のもんだけどな、大部屋に運んじまうと人目も気に入るだらうと思って、御主人さんとも相談して個室の方に運んどいたぜ。ちょうど空き部屋だったから、そのまんま泊まつてもいいってさ。もちろん、御代も口ハでいいてよ。ほれ、こっちだ」

どうやら、こちらの仕事が終わるのを見計らつて、迎えに来てくれるといったらしい。

個室は、大部屋とは別棟の平屋の建物の中にあった。南側には大きな庭園もあり、「こちや」「こちや」と人がひしめいているのが見えない大部屋とは雲泥の差だ。

ただし、リクたちに用意されていたのは、なるほど空いているのもうなずけるという趣の、北向きの小部屋だった。が、それでも何でも、相部屋の者たちを気にすることなくゆつくりできるのだから、贅沢の極みである。あらためて礼を言って、その部屋の前で板前と別れると、リクは、わくわくしながら引き戸を開けた。

「つまむ……すっげえ～～～！」

今朝、前の宿を出たときには想像もしていなかつた豪華な料理が、四角い卓一面に並べられていた。煮込んだ肉と野菜、酢締めにした魚、網の上でじゅうじゅうと焼けている海老や貝、……

「ほんとに贔いかよ、これ……」

もしかしなくとも、「贔い」というのは名田で、恐らくは板前自

身か、あるいは宿屋の主人が厚意で用意してくれたのだらう。

「じゃなの見たの、マジ生まれて初めて　」

そこで初めて、隣の男を見やつて頭を搔く。

「つて、コーフンしてんの俺だけか。ま、そつだらうな。おまえに
とつちや、こんなもん、珍しくも何とも　」

ところが、その言葉が終わらぬうちに、相手の口から素つ頓狂な
声が上がった。

「うわ、うわあ、うわあーっ…………！
こんな肉、出来立て熱々じやあ！ ナスビもナンキンも、ほかほか
皿さうに煮えとる…………！ 刺身も全然かぴかぴ乾いとらんじ、こん
貝なんぞ、まだ動いとるわ！
なあ……なアリク、ほんまにええんか？ これ、皆オレらんもん
なんか……ー？ まさか、夢じや、ちゅうじとはないわいつな…………？」

言しながらも、その双眸は料理に釘付けで、幼子のよつてキラキ
ラと輝いている。

（……な、何か、俺よつよつぼど感激しまくつてねえか？　――
……）

しかも、またウナバル詫りがまじりまくりだ　　びりやひ、心こ
こにあらうとこつとあらうこつとあらうこつとあらうこつ。

そんなリクの様子の変化に気づいたか、カイは、はっと身じろぎを
し、小さく口ホンと咳払いした。

「あ、いや……直そうと努力はしているのだが、何せ十七年もあちらにいたものでな。それに、食事に関してあまり良い思い出がないせいか、このような料理を見ると、わけもなく嬉しくなってしまうのだよ。旅に出てからは、熱々のものも生きの良いものも、それなりに食すようになつたはずなのだがな。いやはや、恥ずかしいところを見せた」

「そんなことねえよ」

首を振つて、リクは卓についた。

「おまえ、いろんな意味でカンペキすぎるといはあるからか、そんぐらこの方がホッとする」

「……そつか？」

少しだけ間を開けてそう応じると、カイも向かい側に座つた。その表情に、ちらりと影が走つた。けれど、既に料理に夢中になつていたリクは、そのことに全く気づかなかつた。

クウ、来たる

昼間、団子を食べたきりだったこともあって、それから四半刻（約30分）と経たないうちに、ほとんどの皿が空っぽになつた。

「はあ……食つた食つた！」

同時に全く同じ言葉が口をついて出で、二人は思わずふき出した。

「でもさ、ほんと皿かつたよなあ！ それもこれも、みんなカイのおかげだよ。ありがとな」

素直にリクは言った。自分ひとりでは、たとえ全館津々浦々まで掃除をしたとしても、このような展開には決してならなかつただろう。

「いや……」リクは

面はゆげな顔になつて、カイは首を振つた。

「おまえと出会えて、今までとはまた違つた良い経験が数多くできただ。それに……」

少しだけ考えるように視線をさまよわせてから、

「あのな、変な意味に取らずに聞いてくれよ？ 実を言うと、初めてなのだ このように、同世代の、それも男の知己ちきを得たのは、何しろ、虜げられるか傳かじかれるかの両極端しか経験がなくて、いわゆる『普通の』というのか？ そんな人間関係を築く機会に全く

恵まれなくてな。あえて『友』と呼べる者を挙げるとするなら、十の年に、今の竜体の私ぐらいのちんまりした体に大怪我をしているところを助けた竜ぐらいのものだつたのだが、これも、蓋を開けてみたら実兄で

「ジッケイ？……兄さんだつた、つてことか？」

「そうだ。早い話が、それをきっかけに、芋づる式に私自身の出生の秘密までわかつてしまつたのだがな」

肩をすくめて、カイは手元の茶を口に運んだ。酒の入つた徳利も並んでいるのだが、そちらには全く手をつけようとしない。何でも、飲めない体质たちなのだという。

だから、徳利の方は、リクがすべて空けていた。この国では數え十五が成人の年齢なので、既に飲酒歴は三年近くになる。それに、彼が育つたハクト村も含めた「北部」と呼ばれる地方では、冬の寒さをしのぐため、火を焚くことに加えて酒を飲むことでも暖を取るのが当たり前で、子どもの頃から酒をふんだんに入れた鍋物や酒粕を使った料理にも親しんでいる。結果、自然と「イケるクチ」となつていたのであった。

「おまえ……そんな水のよつて酒を飲んで、よく酔わぬな

五本目の徳利を飲み干してもなお、顔色ひとつ変わらないリクを見て、半ば呆れたようにカイが慨嘆した。

「その体質、少し分けでもらいたいぐらいだ 私など、何がと言うて酒席ほど気詰まりな『仕事』はないし、『男のくせにだらしない』と連れになどやされるし

「ツレ?」

「ああ、そう言えばまだ話していなかつたな」

聞きとがめたりクに、頭を搔いてカイは答えた。

「ゆえあつてはぐれてしまつてゐるのだが、実は、私には同行者が
い」

ところが、その言葉が終わらないうちに、バタバタバタバタッ、
と、けたたましい足音が響いた。

卷之三十一

威勢のいい声と同時に、バンッ！と部屋の扉が開く。飛び込んできたのは、白地に紺の矢羽模様の入った着物をまとった、リクより若干年下に見える少年だった。

問い合わせが、たちまち絶叫に取つて代わる。震える人差し指が指し示していたのは、もちろんリクのことではなく……

「何やつてたんだよ!」のスジトアシバイハーハー！」
「……げ！」

田を剥いたのは、言われたカイではなく、リクであった。少年ときたら、「何やつてたんだよ」の「な」と同時に、カイの頬をバッチーン！とビンタしたのだ。

(一)、こいつ、天下の「御領主様」に何つちゅうこと……一)

かく言う自分がつて、ちゃんと「バカ野郎」呼ばわりしてはいたのだが、それでも、この少年に比べたら全然ましな部類に入るだろ

う。道理で、あれだけ「寛大にお赦しいただけた」わけである。

が、さすがのカイも、今度ばかりはカチンと来たらしい
ぱたかれた拍子に、ほんっ！と仔竜になってしまっただけに、なお
さら。

「……きゅつ… きゅ きゅ きゅ きゅつ きゅ 」

「ええい、うるさいいつもをこいつるをこいつ！！ 何するんだもかにす
るんだもないよつ！ 昨日今日つて、あたしがどんな思いであんた
のこと捜し回つてたと思つてんだつつ……！」

負けずに少年は怒鳴り返した。ほええ、トリクは瞠目した。

(竜語と人語で、ちゃんと会話成立してゐるよ……)

たぶん、少年の耳にだけは、人語も重なつて聞こえているのだろう。

(俺と竜のカイが喋つてるときも、はたから見たらこんな感じなのが
かなあ……)

しかも、ちらりと聞こえた一人称は「あたし」だった。

(女の子、だつたんだな……)

あらためて見直すと、確かに男にしてはいささか線が細い。ざん
ばら髪を整え、小花模様の衣でも着せれば、「元気な女の子」で十
分に通りそうだ。現実にこういう女性がいるからこそ、リクも、関
所^レごとに「男装した女じやないのか」と誤解されてしまうのだろう。

(とはいえ、ショウガねえか……男の俺だつて、昼間みたいな日に遭つたらマジでビビるもんない)

「つかり記憶まで甦つて、思わずげんなりしたそのとき、あ!と声を上げて彼女が振り返つた。

「『めんねえ、せつかく食事中だつたのに、とんだ邪魔しちやつて! あたし、クウつてんだ。このバカ童の兄さんから、ここのお目付け役を任されててさ』

「きゅつ!? きゅきゅきゅきゅ」

「つるさいね、バカをバカつつて何が悪いんだよ! ああ、いやね、このバカ、いわゆる『忍び旅』つてのをしてるんだけど、昨日、事もあろうに、それを知られちゃいけないヤツと鉢合わせしまってさ。大慌てで逃げてるうちに、あたしと離れ離れになっちゃつたんだよ。

で、もしかしなくとも、あんたがこいつの面倒見ててくれたんだよね? いやありがと! ほんとありがと!! 大変だつたでしょ、ド天然だわ何でかすかわかんないわで……

でも安心しな、あとのことば、こっちでちやあんとやつとくからさ。そうだ、たぶん金錢おあしだつてあれこれがかったんだろ? その辺のところ、こいつからきつちり話聞いて、悪いようにはしないからね!」

異様なまでの早口でまくし立てるだけまくし立て、「じゃ!」と、つまんないチビ黒竜ごと片手を上げると、クウはさつとと出て行つた。いざとか果然とそれを見送つて、はあ、トリクはため息をついた。

(な、何か……嵐みたいなひと、だつたな……)

おまけに、一気に静かになつたせいか、部屋がえらくだだつ広く

感じられる。何となく手持ち無沙汰になつて口にした酒も、どういふわけか、さつきまでほど頗くはなくて……

「……片づけつか

あえて声に出してひとりいいると、リクは皿を重ねて盆に置き、何度も分けて板場へ運んで行つた。

その皿を全部洗つて食器棚に返し、戻ってきたときにも、部屋は無人のままだつた。

「しょうがねえ、先に寝とくか

再びひとりじめて、リクは押入れから布団を出した。

「うひょーー、やすが個室の物は違つぜー。」

金持ちが使うだけあって、掛け敷き総真綿の高級品である。普段使つている煎餅布団とは比べ物にならないほど温かく、触り心地も格別だつた。

それまず自分の分だけ敷き、相手の分にも取りかかるつとしたところで、その手が止まつた。

(「の分じゃ、もう帰つてこないかもな、あいつ……）

喋つていた言葉つきから推して、クウはリクと同じ庶民の子だ。加えて、異性もある。にもかかわらず、あれだけ遠慮がない態度が取れるということは、たぶん「お目付け役」などというの単なる名目。その実は、いわゆる「わりない仲」とやらなのに違ひない。

その証であるかのように、クウが叫んだ言葉が脳裏に甦る。

『あたしがどんな思いであんたのこと探し回つてたと……』

相手に格別の思い入れがなければ、あのよつな物言ひにはならないだろ？。

（つたく、あいつらしいぜ。男友達よりも彼女オランダの方が先にできちまつてる、なんてさ）

そんな一人が思いがけず離れ離れになり、やつとのことで一両日ぶりの再会を果たしたのだとしたら 朝まで一緒にいない方がおかしいというものだ。

（……つてか、「家出」しちまった原因も、ひょっとするとそっちなんだつたりしてな）

あのカイのことだ、出生の秘密に悩んでいたことも、それゆえに「修行の旅」に出たことも、決して嘘ではないだろ？。けれど、実際に屋敷を飛び出した直接のきっかけは、道ならぬ恋を周囲に反対されたことだったのではあるまいか。想いを遂げるためには、手に手を取つて出奔するしかなかつたから……

だからこそ、クウも男の格好をし、色気も素つ氣もなく振る舞つていたのに違ひない。

考えてみれば、カイほど腕の立つ男と一緒にいるのだから、身の安全は保障されているも同然だ。それよりも、あれだけ様子のいい男と、女の姿のまま仲良さげに歩いている方が、別の意味ではるかに「危険」だろ？。下手に悪目立ちして「ねえ、あれってもしかし

たら、駆け落ちした一人なんぢやないかい」などと巷で噂にでもなれば、あつという間に屋敷の者に見つかって、連れ戻されかねないのだから……

(……つと、待てよ？　だとしたら、よろしくやつてねどりじるか、といぐの間に、じつそり出立しちまつてゐ、とか……)

不意にやう思ひ当たつて、リクは愕然とした。心の臓のあたりに、ぽつかりと穴でも開いたかのよつた心地に襲われる。

(……つて、何動搖してんだよ俺)

むしろ、じいは、肩の荷が下りたと喜ぶべきところではないのか。本人も言つていたよつて、あとは全部クウに任せてしまえば良いのだから……

(……そうだよ、それでいいんだ)

自分は、道楽で旅をしているわけではない。王都みやこに行つて、大儲けして、自分と母を捨てた父を見返してやらねばならないのだ。厄介事ばかり起こして、何を考えているんだかも今一つよくわからなくて、おまけに竜で、そのくせ、とんでもなくバカ高い御身分でそんな、あらゆる意味で「めんどくさい」あの男など、じいですつぱり袂を分かつてしまつた方が……

相棒は手乗り竜

しかし、布団に潜り込んでしばらぐの時が過ぎても、相変わらず心は晴れなかつた。

(……寒一^{さみ})

ぶるる、と身震いして、リクは布団を胸元に掻き集めた。綿にくるまれてゐるおかげで背中も手足もぽかぽかと温かいのに、何故か胸のあたりだけが、いつまでもうすら寒かつたのだ。やつと穿たれたような錯覚を覚えた穴が本当に存在していて、そこから冷たい風が吹き込んでくるようだ……

(湯たんぽ……欲しいなあ)

ふつ、とそんな思いが去来した。そうだ、こりこりとおこは、湯たんぽを抱いているのが一番なのだ。^{ふいじゆ}懷にちんまりと収まる大きさで、まるで犬か猫の仔みたいに、ふんわり、ほわっとほの温かくて……

「…………」

せうせう、とさざざせんなんふつに鳴いたりなんかもある

「…………」

がばり、トリクは跳ね起きた。

「お、おまえっ……こつの間にーー?」

『何を言つてゐる。既に四半刻は已經てゐるが』

懷の奥からリクを見上げて、しれっと黒竜は言つてのけた。

『だいたい、おまえが寝言で頬んだのだらう。『寒くてたまらんから、懷に入つてくれ』と

「……つーー」

たちまち、かあつと頬が熱くなつた。窓の外は、とつぐに夜明けの気配を漂わせていた。つまり、リクは知らないうちに寝入つて、よりによつてカイ本人相手にそのような恥ずかしい寝言を発していたのだ。

「もうこいつへん寝るつーー」

黒竜を懐から放り出すと、リクは頭から布団をひっかぶつた。ぽんつ、と音がして、相手が人に変わつた気配が伝わつてくる。

もつとも、少し間を置いてそつと窺つてみると、カイは普通に着物をまとつて座つていた。見慣れぬ巾着を手に、その中身を確かめている様子だ。

「ようやく荷物が我が手に戻ってきた

リクの視線に気づいたのか、カイは巾着を振つて、にっこりしてみせた。

「これで、おまえに着物代と宿代を支払える。替えの衣も何着か入つてあるゆえ、今後の道中では、昨日のような迷惑をかけてしまつこともあるまい」

「へ……？」

再び、がばりとリクは跳ね起きた。金を支払つてもらえるのは無論ありがたかった。着物についても然り　もう、目のやり場に困るあの半裸を道端で拝まなくて済むのなら、それに越したことはない。が、

「『今後の道中』って……おまえ、あいつと一緒に行くんじゃなかつたの？」

「あいつ？　ああ、連れのことか」

やけに淡々と、カイは答えた。その淡々とした口調を保つたまま、さらりと続ける。

「あれなら、先ほど袂を分かつてきた」「は……！？」

まじまじと、リクは相手を凝視していた。

「何で

「初めから決まっていたことだからだ」

至極明快に遮られて、自分の推測が大きく間違つていたことに気づく　これは、「手に手を取つての逃避行」などではない。「やがて来る別れを覚悟しての、思い出作りの旅」だったのだ。現に、カイも言つていたではないか。「いつまでも当主不在というわけにも行かないから、そろそろ戻るつもりだ」と……そこに、「クウを連れて」という選択肢は、恐らくないのに違いない。

(庄屋おおあきんどだとか大商人おおあきんどなら、そういうときはたいてい相手を妾めかけにして

たもんだつたけど……）

「じつじゃ、それはあり得ねえな、と、すぐに考えを引っ込める。そうでなくとも四角四面すぎるほど四角四面なうえに、自分自身、妾の子としてさんざん辛酸を舐めてきたのだ。相手に生母のような苦労はさせたくないだろうし、自分のような子ができることも望まないだろ？」

「なあんか……御領主様つづーのも楽じゃねえんだなあ」

「ああ、むしろ難儀なことばかりだ」

あっさり肯定して、カイはかすかに口角を上げた。

「ましてや、私の場合、カムナギ全土の領主だからな。その分、難儀さも段違いだ」

「ふうん」「

何となく相槌を打ちかけて、ぎょっとリクは相手を見直した。「カムナギ全土の領主」つまり、中つ国のすべてを治めている、ところだとこりとほ……

（そういうえば……）

いくら半分以上居眠りをしていたとはいえ、歴代国王の名と来歴ぐらいは授業の中で聞き覚えていた。現国王は、末弟だったこともあって、幼いうちに下つ国・ウナバルへ「二国友好の証」として養子に行つたのだが、五年前、上つ国・ベキギヨクとの間に起きた大戦で次兄と三兄が討ち死にし、三年前には、長兄の王太子と父の前国王も流行病で死去して、王位を継ぐ者がいなくなつたがために、呼び戻されて即位したのだ。名前は、ユアン＝カイ＝ハシム五世。

そして、田の前に立るこの男も、「カイ」と名乗り、ウナバルで十数年暮らしたという過去を持つている……

「……………」

今まで以上に淡々と、カイは 国王ハシム五世は問いかけた。

「また平伏して畏まるか？ 別に、それでも構わぬが 隔てられることには慣れてあるやうだな」

吐き捨てるよろこび続けられた言葉には、何もかもを諦め切ったような響きがあった。昨夜は、「畏まるな」と自分から頼んできたといつのこと……

その響きを、リクは心で反芻した ビコかで覚えのある波長を感じたよと思つたのだ。

『女男？ せつ、言づなんぢ言えよー ジカとひなあ、んなこと言われんのには慣れっこなんだよつ……』

本当は、ちつとも慣れてなどいなかつた。ビコるか、言われるたびに深深く傷ついていた。けれど、そんなことを表に出したら、ますます女みたいだと言われるから……「男のくせに情けない」と母にも叱られるから、精一杯虚勢を張つて、わざと荒っぽく啖呵を切つて……

(「こつも……せつとひつなんだ）

本当に嫌なのだ 「国王陛下」と畏まられ、遠ざかられることも、その立場ゆえに、惚れた女と添い遂げるところをやかな幸

せすら許されないことも。でも、国王だからこそ、それを表に出すことはできない。出しそうによつては、咎められるのはもちろんのこと、国の屋台骨を揺るがすよつなことにだつてなりかねないからだ。

下手に隔てをなくせば、逆に家臣や国民に舐められる危険性が出てくる。弱冠二十歳やそこらの若さであるだけに、余計に。それで、肝心なときに国王命令が無視されるようなことにもなれば、あつという間に国は乱れてしまうだろう。

それに、国王は、確かにキヨクの一姫と婚約していたはずだ。五年前の大戦のよつなことを一度と繰り返さぬよう、「二国間の永遠の和睦の証」として縁組が整えられたのだと聞いている。

彼の性格を考えれば、相手が同世代の姫だったなら、恐らく素直にこの縁を受け入れ、彼女を慈しむ努力も怠らなかつたはずだ。が、あいにく姫は数え七つの祝いもまだ済ませていない幼子だった。ならばこそ、身近にいた同世代のクウに、つい心が動いてもしまったのだろう。

けれど、だからと言つて、その心のままに突つ走つてしまえば、その先には悲劇しか待つていない。自らの娘を愚弄されたと激怒したヘキヨク王が、それを口実に攻め込んでくるであろうことは火を見るより明らかなのだから。そうなれば、結局また五年前のような戦が起こり、たくさんの人死にだつて出る。

『……それで、私に人殺しをせよ、と?』

『おまえは、人を斬り殺したことがあるのか? あれは……地獄ぞ』

いくら人目がなかつたとはいゝ、一片の迷いもなくそう言い放つたこの男が、そのような結末を望んでいるとは到底思われなかつた。

(……って、どう考えたって、ここの方が背景重すぎじゃんか)

ただ、根底に流れている気持ちはきっと同じだ、という妙な確信だけはあった。

『初めてなのだ』　このように、同世代の、それも男の知己を得たのは『

そう語っていたこの男の、どこか嬉しげな顔が脳裏に甦る。そのとき、恐らく本当に彼は　カイは幸せだったのに違いない。國のために、「万民」のため、すべての個人的な望みを諦め、本音を封印してきた彼にとつては、同じ年頃の友と戯れることすら、かなわぬ望みだったのだろうから。

だつたら何で正体を明かしたんだよ、とは思わなかつた。むしろ、だからこそ明かしたのではないかという氣さえした。

あまりにも幸せすぎるとき、人は往往にして思うものだ。「夢なら醒めないでくれ」と。あるいは「醒めるんだつたら、さつさと醒めてくれよ　　その方が、現実に戻つても早く諦めがつくからな」と……

そして、カイの場合は明らかに後者だつたのだろう。王都みやこに戻れば、嫌でも現実に戻らざるを得ない立場であるからこそ……

しばしの後、ぽんっ！と変化の音へんげが響いた。次いで、チビ黒竜の驚愕したような声が上がる。

「きゅーーー？　きゅきゅきゅ」

「ばあか、誤解すんな」

ぎゅーーー、と衣の上から相手を抱きしめると、ぶつきりぱりにリク

は言った。

「ウチの家訓なんだよ」『相手に心から信じてもらひにま、百の言葉を並べるよりも、いつするのが一番なんだ』って

これは今決めたわけではなく、母が生前よく言っていたことだったのだが。

「それにな、俺が出会ったのは、今の『このおまえ』なんだよ。真っ黒で、手のひらにのっかるくらいちんまりしてて、たまあに人に変化しちゃあ厄介事を起こす、ヘンな童 とりあえずは、そんでいいじやねえか」

「きゅ……」

何事か言いかけた相手の声が詰まつた。次いで、「きゅ……きゅ……」と、何かをこらえているような音が漏れてくる。

「つたぐ、無理すんなよばあか！」

衣の内側に手を突っ込むと、リクは相手のぽわぽわした鬱^{たてがみ}髪^{くし}をくしゃくしゃと撫^{なで}ぐでやつた。あえて衣を剥^{むだ}がさなかつたのは、無論、武士の情けという奴である まあ、リク自身は武人でも騎士でもないのだが。

『……馬鹿馬鹿言つなあ、阿呆あ……』

ややあって、べソ搔^かき満載^{まんざい}な人語が聞こえた。それを潮^{うしお}に、衣が小刻みに震え出す。最初は控えめに嗚咽^{なきごゑ}が漏れ、それは、程なく激しい慟哭^{とうこく}へと変わった。

季節外れの桜花

「どうしたんだい、こんなに……！」

素つ頓狂な声を上げて、宿屋の主人は、リクと彼が差し出した小判とを見比べた。

「昨日は素寒貧すかんびんだと言つてたじやないか」

「ああ、昨夜のうちにカイのお連れさんが来て、『迷惑料だ』って置いてつたんだ。あんな豪華な飯も食わしてもらつたしさ、遠慮なく取つといでよ」

用意しておいた答えを返すと、リクは一口一口とした。本当は、力イ自身がそう言つて支払いができれば良かつたのだが、何しろさんざん泣いたあとである。泣き腫らした目を見られたら、またぞろ妙な誤解をされかねないので、今は仔竜になつてリクの懷で丸くなつていた。

「ああ……そう言や、あのでつかい兄ちゃんを訪ねて、昨夜、娘っ子が来たつけね」

主人は、ようやく納得した顔になつた。

「男の格好をしちゃいたが、あの必死ぶり見たら、いいひと搜しに來た女だつて丸わかりだつたもんだ そうか、それで、今はあんたひとりなんだね。さしづめ、兄ちゃんは、いいひとつ先にいそいそ御出立か、逆にいまだ襦じゆでしつぱりとつてか？」

「ま、そんなとこかな」

適当に返事をすると、リクはあらためて主人に礼を言い、あの板前にもよろしくと言付けて宿を出た。いつたん反転して呉服屋へ向かう。ここでも同じような説明をして、着物代を支払つ手はずになつていた。

『……何が「そんなところかな」だ』

きゅきゅきゅ、とこう啼き声に重なつて、重低音の人の声が響いた。

『というか、昨夜から少々気になつっていたのだが、おまえ、もしかして、私と連れの関係を誤解してはいなか？　あれは、純粹に旅の連れだ　少なくとも、旅に出た時点では間違いなくそうだったのだ』

「またまた」

言いかけて、リクは口をつぐんだ。相手の気性を、もう一度思い出してみる。そして、眉をひそめた。

「……マジで？」

『ああ、真面目に言つていい』

それじゃ生真面目に、カイは言つて直した。

『知つておるかもしけんが、私には許婚がいてな。婚儀こそまだが、あれこれ事情があつて、既に城に住まわせておるのだ。何分十五近くも年が離れてるので、今のところは、妹が、場合によつては娘のような感覚でしか見られずにあるのだが、幼くして実家を出されて異郷の地へ送られ、一親と離れた淋しさに懸命に耐えている様子を見るにつけ、それが、かつての自分とぴたりと重なるようだ

……だから、決してないがしろにしてはならぬと思つておる。一生かけて守り抜いてやうともな。

そのような存在があるのだ、初めから女子おなじとして意識している者を旅に同道させるわけなどなかろうが。ただ、旅の最中にはいろいろなことがあって……その際、連れの存在に救われるような場面も幾度となくあつてな。正直なところ、今の気持ちは、旅に出た時点とはいささか異なりつつある。ゆえに、それが決定的なものにならぬうちに、潔く袂を分かつべきだと思ったのだ。……おかしいだらうか？ 私の言つていることは

「い、いや……」

むしろ、いかにも堅物なこの男らしい物の考え方であり、けじめのつけ方だとさえ思つた。

「ただ……あの娘この方は、それで納得したの？ 世の中、おまえみたく理詰めで物を考えるヤツばっかじやないんだぜ？」

殊に女性は それは、母ひとり子ひとりの家庭で育ち、母親と接触する機会が人一倍多かつたりクが、それこそ理屈ではなく、体感してきたことでもあつた。

「うーん、『しなきやしじょうがなかつた』つてのが正しいかな

背後で、別の声が答えた。驚いてリクは振り返り……そして、さらに驚いた。

「え、と……」

「何？ あたしの顔に何かついてる？」

くすりと笑つたクウは、昨夜とは違つて薄紫の女衣を身に着けて

いた。ざんばらだつた髪もきれいに櫛で梳かれ、耳元には桜色の簪が飾られている。薄く白粉を刷き、頬と唇にもかすかに紅を乗せたその顔は、どこからどう見ても女性だった。それも、ほんのり色気すらまとつた「大人の女」

「もし、男の格好をする必要もないんでね　　あたしの旅は、ここで終わりだから。あちこち回ってはみたけど、やっぱり住み慣れた王都みやこになるべく近い方が、食べ物も水も合つて落ち着くみたい。だから、この街に住むことにしたよ」

その言葉は、どちらかと言えば、リクではなくその懐に向けられているようだつた。それがわかつたのか、「きゅるつ」と小さな相槌が懐から聞こえたが、顔を覗かせる気配はない　　あくまでも、意思は固いようであった。

「……あの？」

たまらなくなつて、リクはつい口をはさんだ。

「どうせだったら、王都みやこの木戸口ぎどぐちこまでは一緒に」

「それは、ダメ」

微笑んで、クウは遮つた。

「あたしはね、この先には入っちゃいけないんだ　　昔、いろいろとやらかしちまつてわ」

はつとリクは息を呑んだ。自分の思い込みが、いよいよ的外れだつたことを痛感する。

「「」、「」めぐなさい！ 僕、ろくに事情も知らないで、余計なこと

……

「いじんだよ、身から出た鎧つてヤツなんだか！」

鷹揚に、クウはがぶりを振った。その視線が、記憶をたどるよう
に遠くの方へ注がれる。

「団子をね、恵んでやつたんだよ そのひとつてば、こつそり城
下に出てきたはいいけど、懷に金貨しか入れてなくつて、小銭に両
替することも知らなかつたからね。

そしたら、たぶんその礼のつもりだつたんだろ、それからすぐには
あたし、ドジ踏んで捕まつちまつたんだけど、ほんとは島流しにな
るか、下手したら獄門台に上んなきやなんないとこを、所払い（追
放刑）で済むように計らつてくれてね。そのあとも、あたしの落ち
着き先を探して、ずうつと一緒に旅してくれて……や、もともとは
ね、この旅つて、それがきっかけで始まつたんだよ。そのひとのこ
とだから、きっとあんたには、そんなことなんか一つ言も言つてな
いんだろうけどね。

こんだけのことをしてもらつたんだ、もう十分に幸せだよ、あた
しは やう思わなくつちや、バチが当たつちまう。

だからさ、あたしのこと心配してくれるんだつたら、その気持ち、
そのひとの方に向けてやつて。ほんと、危なつかしいひとなんだ。
世間知らずだつてのもそつなんだけど、優しすぎて、何でもかんで
もひとりで背負い込んで、しまいにはそれに押しつぶされちまうよ
うなどこがあるんだよ。あたしの代わりに、そつならぬいよづこし
つかり見張つてやってね

「は……はいっ！ ！」

居住まつを正して、「へへへ」とリクはつなずいた。

クウと別れて再び呉服屋へ向かつてからも、足元が、ビロかふわふわと落ち着かなかつた。

『もう十分に幸せだよ、あたしは そういう悪わなくつちや、バチが当たつちまう』

『あたしの代わりに、見張つてもいいだね』

そんな彼女の言葉と、切なげな微笑だが、やけにくつきひとつ脳裏に焼きついていた。桜の花のような香りも、ずっと鼻孔にまとわりついて離れない気がして……

『……何だ。あれに惚れたのだったたら、おまえともいいで別れて良いぞ』
「なつ、何言つてんだよつ……！」

どうやら、胸元に密着しているせいでの鼓動が速まったのに気づかれたらしく。

『おまえならば身分的に何も問題はなかろうじ、あれの過去を知る者も、このあたりまで来ればおらぬだろ？』 そもそも、過去とは言つても、あれの場合、戦で親を亡くし、生きるためにやむなく掏摸すりに手を染めていただけだからな。私に言わせれば、ひとを奴婢のじとくに使つた拳句、床まで舐めさせた下つ(つ国)の王太子の方が、よほど罪深いぐらいだ。

それに、別れで受けた痛手の一番の薬は新しい出会いだと聞く。ならば、あれにとつても決して悪いことではあるまじよ。私も、自らの手で如何ともしがたいのなら、いっそ良い男と添つて幸せになつてくれればという気持ちであるしな その点、おまえは機転が効き、世渡りもつまい。半人半竜の私をこのよつて受け入れてくれる度量もある。安心してあとを託せるとこつものだ』

が、遠慮せずに行つて参れ、と揶揄するように続けられて、リクは首まで真っ赤になつた。

「や、その……つて、ダメ！　ダメダメダメダメ！！　俺は王都に行くのつー、行つてクソ親父に一泡吹かせてやんなきや、こいつまで来た意味がねえんだからつーー！」

『…………』

カイの口調が変わつた。

『それでは、父御は御存命ではあるのだな？』

「え……？」

聞き返したところで、昨夜、自分の懐刀を「父の形見だ」と説明していくことを思い出す。

「あ、や……それが、よくわかんないんだよね、実は」

正直に告白して、リクは頭を掻いた。

「俺は顔も知らなくつて……母ちゃんも、死ぬまで親父のことなんか一度も話してくれたことなかつたし。だから、まあ俺的には死んでるようなもんで、それで『形見だ』なんて言つたんだけど、もし生きてるんだつたら、やっぱ一言言つてやりたいじゃない。『バカ野郎』とか、『何で俺と母ちゃんのこと捨てたんだ』とかや」

そこで、ふと思いついた。

「なあ、カイ。あの刀、誰のもんだとか調べられる？　多少時間が

かかったつていいからせ』

国内すべての王侯貴族を束ねるこの男なら、それも不可能ではないかもしない そう思ったのだった、が。

『いや、残念ながら無理だな。家紋でもあれば、話は別なのだが』
「え?」

耳を疑つて、リクは聞き返した。杏に鶯、とカイが表現した文様が即座に脳裏に甦る。

「あの模様つて、家紋じゃないの?」
『違うな』
「そつ、か……」

やはり、地道に家々を訪ねるか、骨董品屋でも回るしかないか……そう思つてため息をついたとき、ちょいちょい、とカイが鼻先でリクをつついた。

『呉服屋。今通り過ぎたぞ』

「え? ちょ……それを早く言えよっ! ——!

慌てて、リクは踵を返した。

クウと氣まぐれ白竜

呉服屋で支払いを済ませ、リクは今度こそ王都に向かって歩き始めた。多少出る時刻が遅くなつたが、このまま歩いて行けば、夕方には王都の外れの関所付近まではたどり着けそうだった。

その様子を、クウは物陰からそつと見送っていた。正確には、いまだ黒竜の姿でリクの懷にちんまり収まっているはずのカイを、と言つべきだつたが。

『半年前……そながいなければ、私は義姉^{あね}上のあとを追つていたかもしだん』

昨夜、彼の腕の中で囁かれた言葉が、耳の奥に甦る。

『あの頃は、ほとんど何も食えなかつたし、夜も全く寝つけなかつた。そなが懷に入れて守つてくれたり、折を見て、手ずから粥や白湯を与えてくれたりしなかつたら、早晚、餓死するか、犬猫にでも取られて死に至るか、どちらかであつたろ？』

なればこそ……そなには、この先、誰よりもつづがなく、幸せな人生を送つてほしいのだ。本当は

『

その先を、彼は口にしようとはしなかつた。けれど、まるでその代わりであるかのように、明け方近く、こんな声を聞いた。

『もつと、もつと一緒に居りたい……許されるもんなら、ここんままで城に連れて帰りたい……』

そして、うなじを這い、胸元を乱す唇と指の感触。それは、い

まだにクウの体の奥の奥に、切なくも甘い痺れとなつて残つていた。

……ただ、ひかりの方は明らかに夢であるとしか思えなかつたのだが。

何故なら、その時刻よりはるかに前に、カイは自分の部屋に帰つていたのだ。「参つたなあ……おまえの懐に入れられて連れてこられたせいで、どう戻つたらええかわからんが」と途方に暮れたような顔で訴えられて、「ああそうだつたねえ、『ごめんごめん』と、苦笑しつつわざわざ部屋の前まで送つてやつたのだから間違いはない。

それに、ふと氣づくと、すべてが、見事なまでに寝る前の状態に戻つていたのである。乱れていたはずの布団も、胸元も、何もした記憶などないのにちゃんと整えられていたし、痛みすら覚えるほど激しく求められ、触れられたせいで、首筋や乳房にくつきりとついてしまつた赤い花びらも、一片たりとも見当たらなかつた。布団や着物はともかく、肌に刻まれた痕跡まできれいにぱり消えていたとなれば……

(……ま、今となつてはどうちでもいいけどね。夢だらつと、現だらつと)

かたや一國の王、かたや一介の咎人。もう一度と、行く道が交わることはない。そもそも、いつして一度でも重なつたこと自体、あり得ぬことだつたのだ。ならば、すべてを「いい夢を見た」ということにして、新たな一步を踏み出すまで……

(あんただつてそう思つよね、カイ。だから、何かつてえと、ひとに嫁に行け嫁に行けつてつるさかつたんだろ……?)

耳元の桜色の簪に、クウはそつと手を触れた。もう豆粒のようにしか見えないほど遠ざかつてしまつた相手が、「嫁入りのときでも使え」と購つてくれた唯一の品。そのときは、「ひとの氣も知らないで！」と憤慨しまくつていたものだつたけれど……

しゅるしゅるつ、といつ音と共に、突然、傍らに何かが降り立つた。普通の人間なら、ここでびっくりして悲鳴のひとつも上げるところだろうが、クウは全く動じなかつた。早い話が、知り合いでつたからである。振り返るより先に、彼女は苦笑した。

「何だよティエン、また仕事サボつて息抜きかい？」

ティエンは、カイの話にも出てきた彼の実の兄だ。弟と同じく半人半竜なのだが、十年近く年長であるためか、竜になつたときの身の丈は、およそ六尺（約180cm）と彼よりはるかに大きい。体の色も弟とは対照的に雪のようになつて白で、一本の角は輝くばかりの黄金色。瞳は焰の如く真つ赤だつた。

もつとも、そんな竜が現れたらすぐに大騒ぎになつてしまふし、弟とは違つてちんまり懐に收まれるような大きさでもないので、市中でのティエンはもつぱら人の姿を取つてゐる。

人外の血が混じつてゐるせいなのか、そろそろ三十路に差しかかろうというのに、見た目は二十歳そこそこにしか思えない。そして、その外見年齢と、血のつながつた兄であるということとの双方が作用しているのだろう、人の姿をしているときのティエンは、面差しと言い、背格好と言い、カイと実によく似ていた。竜体のときの色合いを示唆するかのような、真つ白な肌と、銀色の髪と、赤い瞳を除いては。

しかも、肌はともかく、髪と目については、そのままではあまりにも目立ちすぎるるので、何しろ、この近在では黒か茶色の髪と目

の者が九割方を占めていたから、父親から手ほどきを受けたと
いう幻術を使って黒髪黒目であるかのように見せていた。おかげで、
ティエンは今やほとんどカイと瓜一いつの容貌となつており、二人を
見慣れているクウでさえ、時に見間違えてしまうほどだった。あ
りていに言えば、すぐに振り返らなかつたのも、半分はそれが理由
だと言つてい。考えたことがことでもあつたから、いろいろ
な意味で、まともに相手の顔を見られない気がしたのだ。

それはさておき、そんなティエンは、カイが不在の今、彼に乞わ
れてその影武者を務めていた。そうでなくとも容姿がそつくりであ
るうえに、執務もそつなくこなしていたから、大臣から下働きの者
に至るまで、いまだ誰ひとりとしてこのことには気づいていないと
いつ。

ただ、どうも性格的に飽きっぽいところがあるらしく、しばしば
「廁へ行つてくる」と偽つて、こうしてクウの前に現れるのだ
ティエンは千里を見通せる「龍の水晶玉」を持っており、クウもそ
の片割れを渡されてるので、連絡ならば、それで十分に取れるは
ずなのに。

「あんたね、いぐり竜になれば一瞬で飛んで来られるつったって

」

たしなめながら、ようやくクウは相手を見やつた。その目が怪訝
にしばたたかれる。

相手の真っ赤な瞳が、呆然としたように見開かれていた。変化後
は牙となる八重歯の生えた口も、同じくぽかんと開かれている。や
あつて、その口があおむろに動いた。

「怖え……！」よくそこまで化け　つてえ……！」

「もつとほかに言ひようはないのかよつ……！」

相手の向こうの脛に蹴りを食らわせると、憤然とクウは歯みついた。

「つたぐ、あのおチビさんだつて、もつ少しマシな反応したつてのに……兄弟揃つて気が利かないつたらありやしない！」

「俺まで一緒にすんなよ」

脛をさすりながら、ティエンはぼやいた。

「でも、ま……蹴りが出るようだつたら、少しばかん心、かな」「え……？」

意味を取りかねて、クウは問い返し……次の瞬間、赤面した。相手の白くすんなりした指が、そつ、と田元に触れたのだ。

「ああ……まだちょっと腫れぼつたいた。慣れねえ化粧なんかしたのは、これ隠すため……だろ？」「なつ……」

何だよ、そういうとこには氣い利かせなくつてもいいんだつてば！ と言つてやりたいのに、口が動かなかつた。相手の手つきが、あまりにも優しくて。幻術で隠しているはずの瞳の中の焰に、すうつと吸い込まれてしまつたうで……

(……つて、いけないいけない！)

たぶん、この男が変にカイに似すぎているから良くないのだ。ついづかり、カイにそいつをされているよつた気分になつて、それで……

(そ、そ、うだ、さつきまたく顔を見なきゃいいんだよー)

必死に自分にそづ言い聞かせ、わたわだと視線を動かしたところ
で、いきなり鼻をつままれた。

「……ら、そやつてまたカイのこと考えてるー。」

「ふ」「ふ」ともがいてくるクウを、じとーっとティーンは睨んだ。

「あーあ、嘆かわしいなあ……お兄さん、おまえをそんなふうに育てた覚えはないよ?」

「育てられた覚えもないわっ!ー!」

やつとのことで相手の魔手から逃れると、クウはベエツと舌を出した。

「つてか仕事は!…………あとでカイが『長糞陞下』とかあだ名つけられでもしたりビツするんだよつ!ー!」

「いや、それならもうとつくにつけられてっから

「なつ……ー?」

田を剥いたのと、ずしり、と何かが手のひらに載せられたのだが、
ほぼ同時だった。訝しげにそれを確かめたクウの目の玉が、さらに
飛び出しそうにひん剥かれる。それはチビ童のカイよりも大きな
巾着袋で、中には、金銀銅貨と小銭が、これでもか、といつほど詰
まっていたのだ。

「何だよ、これ……」

「何だよつて……報酬?」

飄々と、ティエンは答えた。

「先に言つとくけど、突つ返すなよ？ これは、カイも承知のことなんだからさ。つづーか、この旅の間、あんたがカイにしてくれたことだとか、ヤツがあんたにかけた迷惑だと考へたら、むしろこんななんじや足りねえんじやねえかとさえ思つてるんだ 僕も、それにカイもな。

あとね、俺、今日は仕事ねえの。明日つから『上の荒熊（ヘキギヨク王の異名）』のオッサンと首脳会談なんつーもんをするんで、目下あつちの国田指して馬車で移動中なんだよね。おまけに『今後の段取り検討してつから、俺がいいぞつづーまで絶対覗くなよ！』って厳命してあつから、ぶつちやけ動きたい放題つてヤツ？ つてことで、これからあんたの家と仕事探しに行くぞ

「へつー？」

「へつー？ ジャねえよ。保証人がいるといないとじや、話の進み具合が段違いだらうが ましてや、あんたは女なんだからさ。それに、たとえその金を持つてたとしても、仕事はしてた方がいい。何にもしねえでぶらぶらしてゐくせに暮らしには困つてねえんじや、御近所に思いつ切り怪しまれちまうだろ？」

「それは、そうだけど……つて、ちょっとーー 何先にすたすた行つちまつてるんだよっーー！」

（三度目を剥ぐと、クウは慌てて相手のあとを追つた。

クウと坂おべね白鷹（後書き）

中盤のトライヒンのセリフ「やせりて…」は脱序ではあつません、念のため。

白魔王の気がかり

「つたくもお……兄弟揃つて、ひとのひと振り回してばっか……
「だから一緒にすんなつてばーーー！」

不満げな声をぶつけてきたクウを振り返ることなく、ティーンはひらひら、と手を振った。刹那、その唇に、かすかに苦笑が浮かぶ。

（ほんつと、見事なまでにあいつの「影」だよなあ俺つてば）

だが、もつと苦笑を禁じ得なかつたのは、そのことに自分が思いのほか打ちのめされているという事実に対してだつた。八つも年下の小娘だし、鼻つ柱は強いし、何かといふと手足は出るし……ビリ考へても「やんちゃな妹」止まりだとばかり思つていたのに。

（畜生、てめえのせいだぞカイ……！）

まさに「男に惚れると女は変わる」を地で行くよつな変化であつた。会うたび、会うたびに、あたかも芋虫が蝶になりなんとして一枚一枚皮を脱ぎ捨てて行くかの如く、どんどん垢抜けて、どんどん表情が艶めいて行つて……

男の姿をしていたときでさえ、そのような有様だつたのだ。女の格好をして化粧など施されてしまつては、息を呑んで絶句するしかなかつた。とつさに軽口を飛ばして相手に脛を蹴つてもりわなかつたら、間違いなく本能に負けて、あの場で抱き寄せてしまつてしまつたことだね！。

（つづーか、どっちみち早々ごビンタ食らつて終わるに決まつてんだから、やつちまつたつて良かつたんじゃね？）

今さら隠れていて、ティエンはがっくりと肩を落とした。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

ゴアン=カイ=ハシム五世の乗つている　　ということになつて
いる　馬車とそのお付きの騎馬隊の一行が、上上国・ヘキギヨク
との国境線の目前までたどり着いたのは、その日の昼過ぎのことだ
あつた。国境を越えてしまつてからば、そういう氣を抜くわけにも
行かない。ここで昼食こじよつとこじよつとなり、一行は歩みを止
めた。

しゅるしゅるつゝと一陣の風が吹き抜けた。風は馬車の窓の遮光
布を揺らして車内に入り込み、やがてゆるゆると人の形を取つた。

(やれやれ、どうにか間に合つたぜ……)

座席の背もたれに身をよだねて、ティエンは額の汗を拭つた。い
くら命令で誰も中を覗けないことになつてゐるとはいへ、食事を取
る様子ぐらには見せないと、確實に怪しまれるだろう。幸い、クウ
の家と職探しの方はつつがなく終わっていたので、戻ることにも支
障はなかつた。ティエン自身が言つた通り、「兄だ」と称して彼が
ついて行つたことで、驚くほど早く話がついたのだった。

ちなみに、幻術に長けているティエンは、変化^{へんげ}を解くたびに素つ
裸になるようなことはない。身に着けている衣服も含めて、自在に
姿を変えることができるからだ。

「おお、そろそろ昼餉の刻限か」

何食わぬ顔でそう言いつつ馬車から顔を出した姿は、誰がどう見ても王族服で身を固めた国王陛下本人にほかならなかつた。

一枚の衣を帯を締める形で着流すか、働きやすいよう短い丈の上衣と袴の組み合わせを身に着けることが多い一般庶民と違つて、王侯貴族の服は、詰襟で長い筒袖のついた上衣に筒型の長尺の袴といふかつちりとした形をしていた。國に有事あらば、即座に先頭に立つて軍を率いられるようにといひことや、そのような体裁になつたものらしい。

中でも、今ティエンが着ている濃紫の地に金糸銀糸で華やかな刺繡が施された王族服は、最上級の正装とされていた。國の命運を左右する大事な会談だというだけでなく、未来の舅殿である荒熊王に敬意を表して、という意味合いもあって、これを選んだのである。

頭に載せている黄金の冠も含め、普段自由すぎるので自由に生きているティエンにとっては若干窮屈な代物ではあつたが、微塵も表情には出でていない。それどころか、悠然と扇子を使いながら微笑んでさえいる。天晴れまでの影武者ぶり、と言いたいところだが、理由は全く別のところにあつた。

(ま、天空城あつちでも十何年この手のカッコしてたからな……)

十年前まで、ティエンは天界において「白竜皇子はくりゅうじゆ」と呼ばれていた。というのも、彼とカイの父親は、天界の統治者「竜神王」だからだつまり、カイは厳密には完全なる庶民の血筋ではなく、種族は違えど王者の血を引いていることに変わりはなかつた、といふことになるのだが、それはひとまず置くとして。

父は、まだ「セイリョウノミコト青竜皇子」と呼ばれていた皇太子時代、「人族殲滅」の大義を掲げる先代の竜神王に反発し、地上に下っていたことがあった。母とはその折に知り合い、所帯を持ったのである。

ところが、その母と、カムナギの先王コアン＝ナスル＝ハシム四世が密通していた。

……と、少なくとも父は思った。

『見損なつたぞ、コアン！　それに、おまえもだ！　この恨み、いずれ必ず晴らさせてもらひ……！』

激怒した父はそう言い放ち、ティエンを連れて天界に戻ってしまった。その邪推が生まれるきっかけには実のところティエン自身も大いに関わっているので、あまり偉そうなことは言えないのだが、そこを差し引いたとしても、やはり短慮であったとティエンは思う。

当時八つだったティエンは、ハシム四世と母の傍らにあって、彼らのやり取りの一部始終を見聞きしていた。そこには、父の勘繹つていたような内容は全く含まれていなかつた。母はそのとき、どういうわけか半狂乱状態になつており、ハシム四世は、そんな母を幼子をなだめるような感じで抱き寄せ、頭を撫でていただけだつたのだ。今思えば、このとき母の胎内にはもうカイイガ宿つていたはずで、つわりやそれに伴う気鬱に苦しんでいたのかもしれない。

それに、ハシム四世自身、他人の妻を略奪するような人物ではないともティエンは思つていた。何故なら、地上に下りた際に怪我を負つた父を、何のためらいもなく手当てし、あたかも以前からの親友であるかのように遇してくれたのが、ほかでもないハシム四世だと聞いていたからだ。

そこで、ティエンは何度もそれを伝えようとした。けれど、父は全く聞く耳を持たなかつた。

『御自分だつて、一時は竜と人の融和を望まれておられたのじよつに!』

『あの二人は、竜である父上を恐れることも蔑むこともなく受け入れてくれたかけがえのない存在だつたのではなかつたのですか……!』

そう突っ込んでもみたのだけれど、結果は一緒だつた。父にしてみれば、なまじ一度心から信頼を寄せた相手だつただけに、裏切られたという思いばかりが強まつて、かえつて頑なになつてしまつていたのかもしれない。

『貴様……息子の分際で父にたてつくとは何事か！　ましてや、憎ハナシあやつらをかばうなど……！』

遂にそつ咆哮した父はティエンを拷問にかけ、それでも考えが翻らないと見るや、城の地下牢に投獄した。このままでは死を待つばかりだと悟つたティエンは脱獄を敢行したが、「殺しても構わぬ」という父の非情の命により、追つ手が容赦なく攻撃をかけてきたこともあつて、あつという間に満身創痍となり、真つ逆さまに下界へ落ちた。落ちた先が下つ国・ウナバルの王宮の庭であり、そんな彼を拾い上げたのが実の弟のカイだつたのは、天の配剤であつたのか、はたまた運命の神のいたずらであつたのか

(ま、後者だろうな)

何しろ、落ちたときの衝撃で、ティエンは自分の名すり思ひ出せ

なくなってしまったのだ。ようやくすべての記憶が戻り、兄弟の名乗りを上げられたのは、ほんの半年ほど前のことであった。

ともあれ、そんなわけで、ティエンは、幼い頃から、いざれは竜一族を統べる者として徹底的な帝王教育を施されてきた。忌憚なく言つてしまえば、三年前に突然王位を継ぐことが決まり、王太子としての経験も積まぬまま即位してしまったカイとは、踏んできた場数が違うのだ。

だから、もしカイにとつて今の立場が本当に重荷であつて、すべてを捨ててでもクウと添い遂げたいという意思もあるのならば、このまま何食わぬ顔で玉座に座り続けてやってもいいかな、とも思わないではなかつた。カイのため、といつよりは、クウのあんな「無理した」姿を見なくて済むのなら、といつ理由の方が大きかつたのだが。

（ただ、なあ……）

それをやつてしまつと、あの父の思つ壺に完全にはまつてしまつ予感がする。実際、ティエンが時たまカイの影武者をしていくことなど、執務室に設えられた巨大な水晶玉を通して、とつぐの昔に知られてしまつっているのだ。「このまま王位を奪つてしまえ。さすれば中つ国一國が労せずして手に入る」と囁かれたことも一再ならずあつた。そんな父が、ティエンが本当にカイに代わつて国王になつたなどと知つたなら……

『よつやつたぞ白龍！』これを足掛かりに、次は「そなたの『婚約者の実家である上つ国を狙うのだ』

「誰がするかよ馬鹿……！」

「……陛下！？」

折しも手水鉢を捧げ持つてきた侍従のひとりが、ぴきん、と顔を引きつらせて硬直する。

「あ、いや……その」

「げふげふげふ、ヒ咳払いすると、ティエンは、あはは、じこまかし笑いをして見せた。

万が一にも刺客に狙われるようなことがあつてはならぬので、食事は車の中で取られた。例によつて、毒見役を何人も通した末の冷えた菜ばかりだが、半口歩き回つて空腹になつていたせいか、それなりに順調に箸は進んだ。

(つづーかあのチビ……)

もきゅもきゅと口を動かしつつ、ティエンは、ふと眉をひそめた。

父のそれよりはるかに小型とはいえ、ティエンの持つている水晶玉とて玩具ではない。昨日のうちに、だいたいのことは把握していいた カイが突然同行することを決めた「リク」という少年のことも、二人の間に何が起つたのかといふことも。

リクが「父の形見だ」と言つて持つていた懐刀の文様は、カイが言つた通り家紋だというわけではなかつた。が、「御印」ではあつた。それも、国王かその嫡子だけが持つことを許されている品にしかつけられないといふ、まさに「国王または王太子であることの証」なのである。

無論、それだけでは模造品を所持しているという可能性もなきに

しもあらずなのだが、ティエン自身の記憶が、そうではないのだと
いつことうをはつきりと証明していた。天空城にあつた頃、例の巨大
水晶玉を通して見たことがあつたのだ リクに極めて面差しが良
く似た男の姿を。深紅の王族服に身を包んだ彼は、皆から「ユアン
＝リク王太子殿下」と呼ばれていた……

(……しかし、カイは何を考えてやがんだ)

ティエンほど確固たるものではないにしろ、あの懐刀を見た以上、
カイにも推測ぐらいはついているはずだ リクこそが、本来なら、
王太子亡きあと王位を継ぐべきであつた人間のではないか、と。
幸い、リク本人はそのことには全く気付いていない様子だった。
ならば、何かしらの理由をつけて、さりげなく離れるか、いつそ故
郷に帰るよう促すべきではなかつたのか。そうでなくとも、十数年
を異国で暮らしてきたカイの即位については贊否両論あつたのだ。
何かの加減で、王宮の事情 殊に故王太子の顔をよく見知った者
が、リクの姿や、彼の持つている懐刀を見たりしたら。しかも、そ
の「誰か」が、実は「反・ハシム五世派」であつたとしたら……

王都到着！

「……ちょっと待ちなさい」

「はあ？」

露骨に嫌な顔をして、リクは立ち止まった。

（なんだよ、珍しく役人には止められなかつたつてのに……）

王都と各街道との境の木戸口には、王都から見て最初、街道から見れば最後の関所が設けられていた。どうせまた女と間違えられてすつたもんだするんだろう、と覚悟していたのだが、そこでは驚くほどすんなりと「通つてよし」と言われたのである。なのに、まさかその直後に、こんなケチがつくことにならうとは……

行く手に立ちはだかっているのは、白髪の老人であった。年の頃は六十前後か。着ている衣と、鼻と顎の下にそれぞれ生やした立派な髭から察するに、それなりの身分の者と見える。

（カビ、やうやつてひとのこと舐めるみたぐジロジロ見てる時点で、カンペキ、ドン引きつてヤツだよなあ……）

はあ、と大きく嘆息すると、リクは渋々「いつもの台詞」を口にした。

「あのねじいちゃん。俺は、いつ見えても男

といふが、思いがけず、相手は真顔でうなずいた。

「それはわかつてゐる

「へ？」

「噂に聞いたのだ。私が捜している御方に良く似た偉丈夫が、昨夜、おまえのような少年と同じ宿に泊まっていたと……それで、先回りして、おまえが通りかかるのを待つていた次第なのだ。

頼む。教えてくれ……！ その者は、どこにいるのだ？ もし途中で袂を分かつたのなら、どのあたりでその者と別れた……！？」

「え……」

がしり、と両肩をつかまれ、取つて食わんばかりの勢いで尋ねられて、リクは皿を白黒させた。

（えーっと……それって、たぶんカイのこと、だよな……？）

自問したところで、あ、と思い当たる。

昨夜、クウは、カイと離れ離れになってしまった理由を「知られちゃいけないヤツと鉢合わせた」からだと言つていた。その「知られちゃいけないヤツ」こそが、この老人なのではないだろうか。恐らく老人は、「国王陛下」に極めて近いところにいる大臣か、お付きの誰かなのだろう。それで、カイは、大騒ぎになるのを避けたくて、早々に竜に変化して逃げ出した……

（……つと待てよ？ 「捜してゐる」つづりことは、こいつ、カイのこと捕まえて、そのまんまお城に連れて帰るつもりなんじゃ……）

そういうえば、懷の中の黒竜も、心なしか身を固くしているようと思える。きっと嫌なのだ。せっかくの「修行の旅」が、自由に行きたいところへ行き、身分を気にすることなくさまざまな人々と触れ合い、あたたかい食べ物も存分に堪能することができる機会が、こんな形で強制終了してしまうなど……

(……わかるかよ！)

即座にリクは決意した。『のむち、いつして王都に入ってしまった以上、旅が終わるのは時間の問題なのだ。ならば、せめてあと一両日ぐらいは好きなように遊びさせてやつたって、罰は当たらないではないか……！

「……ああそうそう、確かに、昨夜はえらくガタイのある兄ちゃんと一緒に宿に泊まったよ」

ややあつて、リクはおもむろに口を開いた。

「だけど……そいつって、ぶっちゃけ、竜だよ？」

「何……！？」

たちまち相手の目が三角になった。

「貴様、ふざけたことを

「

「ふざけてなんかないさ。だって、頭触つたら、ぽんつーって竜に変わるんだもん。おまけに、朝になつたら、いつの間にかどつかに消えちまつてさ。おかげで、俺、一人分の宿代払わされて、迷惑だつたらありやしなかつたよ。

つつーかさ、だいたい『御方』つつーからには、じいちゃんが捜してるのって、かなりの偉いさんなんだろ？ そんな人が、俺ら庶民と一緒に宿に自分から泊まるわけなんかなくね？

だからさ、そう、あれだよ。たぶん、竜がその御方に化けてたんだほら、キツネやタヌキが人を化かすみたくさ」「なるほど……」

眉をひそめて、相手は考え込んだ。

「確かに、おまえの言つ通りかもしれんな。そもそも、へ、いや、あの御方は、ずっとおし、お屋敷にいらしたのだ。先日、湯治に出かける際にも、面と向かって、挨拶申し上げたはずだし……それなのに、あのような場所で御姿をお見かけするなど、面妖なことだとは思っていたのだ。しかし、それもこれも竜めの仕業とあらば……いや、妙なことを聞いて申し訳なかつたな。このことは、忘れてくれ、儂も、『じいちゃん』などと無礼な呼び方をされたことや、ぞんざいな口をきかれたことは見逃してやるゆえ。そうとわかれれば早々に戻らねば……！」いつまでも、副宰相に向かもを任せではおけんしな」

ぶつぶつ呟きつつ、そそくさと老人は去つて行つた。

「フクサイシヨウ……」

同じくぶつぶつと、リクは口の中で呟いた。

「つて」とは、あのじいちゃん、もしかして……」

『ああ、ハクロウは我が國の宰相だ』

懐の中から重低音の声が答えた。

『それはそうと、済まなかつたな。私とて、決して戻らぬつもりはないのだが』

『わかつてゐつて。要するに、『連れ戻される』んじゃなくつて、

『自分の意思で帰りたい』んだろ？』

ぽんぽん、と衣の上からリクは相手の背を叩いた。

「それに、いつちにせじめん。迷惑だとか言つたり、キツネやタヌキと同列扱いにしちまつたりしてさ。でも

『わかつていい。ああでも言わなければ、相手が納得せぬと思つたのである』

黙り返して、黒竜はきゅきゅきゅ、と小さく笑つた。

『その見立て、決して間違つてはおらぬぞ　ハクロウは、一度言い出したらよほどのことがない限り引かぬからな。

あの男は、私が即位するよりずっと前から、たゞまな大臣を歴任していくな。私などよりはるかに政務に通じておるゆえ、即位当時には、政のイロハからあれこれと教えてもらつたのだ。

ところが、少しでも私が妙な答えを返すと、自分の思ひ通りの返答になるまで、何度も何度も同じことを問うてきてな。おまけに、ほんのわずかでも下(つ国)の訛りが混じると、これまた何度も言い直させられて　あれには、まこと往生させられたものよ。

まあ、だからと言つて、決して悪い人間だというわけではないのだが……私のことも、良くも悪くも非常に公正に評価してくれるしな。厳しい教えも、國のため、良き政のためを思つゆえであったのだろう。何しろ私は

そこで、突然カイは言葉を切つた。

『いや、これ以上はよそつ。つまらぬ繰り言になりそうな気がする
それよりも、ちいと腹がすかんか?　団子でも食いに行こうではないか』

「ええつ

「

また団子かよ、と言いかけて、リクはそれを呑み込んだ。思い出

したのだ カイにとつては、団子とは、クウとの田舎の思い出につながる特別な食べ物だったのだ、ところどきを。ましてや、王宮に戻つてしまえば、もつそれを気軽に食べに行へりともできなくなゐ……

「つたくしょうがねえな。ま、夕飯時まではまだ間もあるし、付き合ひつてやつか」

「あやるーん!!」

懐の中から、歓喜の声が上がった。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

「いやあ食つた食つた!」

それから半刻(約一時間)後。リクはすっかり満足して、その屋台をあとにした。

『この御店主はな、老舗の和菓子屋で、のれん分け寸前まで行つたという技量の持ち主なのだ。私が団子を食いに城下へ行きくなつたのも、視察中、この屋台から流れてきた匂いに、どうじょもなく心惹かれたからだつたのだよ』

団子が焼き上がる前から、カイはそう言つて絶賛しまくつていたのだが、その言葉に違はず、出された団子はどれも、外はカリッと香ばしく、中はふんわり柔らかで、甘辛いたれにしづ、餡子にしづ、これまでにリクが食べたどんな団子とも違う、うつとうつするような味わいだった。

しかも、王都へ来た理由を問われるままに店主に話したところ、「こんなことまで言つてもらえたのだ。

『なるほど、お父つあんをねえ……そういうことなら、ウチで手伝いとして働いてみねえか？』

いや、別に団子屋になれつゝてるわけじゃねえんだぜ。ただ、人搜しつたつて、王都は見ての通り広えんだ、一田一日で終わるもんじやあんめえ？ だつたら、食い扶持ぐれえはどうかで稼がねえとどろ？ おまけに、さつきっから、でつかい兄ちゃんが、「頼む！」 そうしてやってくれ！」 ってな田でじいつとこっちを見てるしよ。俺あ、兄ちゃんに初めて会つたときっから、どうせやの田に弱えんだよなあ。

つてことだからよ、落ち着き先が決まつたら、いつでもまた訪ねてきな。そうだ、ナンだつたら壇なべの方も、ウチの長屋の大家に口きいてやるつか？』

無論、リクにとつては願つたりかなつたりの話である もつとも、カイは、それを見越したうえで、わざわざ店主とリクを引き合わせたのかもしれないが。

「ほんと、おまえに付き合つて団子食いに行つて良かつたよ。ありがとな」

懐の中で、はたはた、と尻尾を振る気配があつた。

直接帰着の挨拶をしたい、といふこともあつて、店主の前では人の姿をしていたカイだったのだが、今は、またチビ黒竜に戻つて、リクの懐にちんまりと収まつていた。これは、団子屋に行く道すがら、一人で話し合つて決めたことであつた。王都から十里以上も離

れた湯治場でさえ宰相と鉢合わせたのだ、王都の市中とあらば、「国王陛下」を見知っている者と出会う確率はさらに高くなるだろ？」と思われたからだ。

このような形で長時間隠れていなければならないのは、「人」として育ったカイにとつては、かなり窮屈であるはずだった。が、それでも「城に戻る」とは言い出さなかつたところをみると、やはりまだ旅を終えたくはないのだろうとリクは見ていた。

だから、団子屋で働くことが本決まりになつたとき、一瞬「ほんとはこのまんますぐに手伝いに取り掛かつた方がいいんじゃないかな」と思いはしたもの、結局は当初の予定通り、引き続きカイと行動を共にすることにした。店主には、幾重にも礼を述べたうえで、「これから王都見物もしたいし、今夜はカイと到着祝いに飲みに行きたいんで、明日また来ますね」と言い置いてきていた。

『「ひからこせ……またしても何やら氣をつかわせてしまつたようですが、申し訳なかつたな』

自分から言つて、カイはくるん、と蟠局を巻いた。程なく、ずしん、とその体が重くなる。腹が膨れて眠くなつたのか、ここ数日の疲れがどつと出てきたのか……

「ま、俺は勝手にその辺見て回つから、ゆっくり寝てな

そつと懐をつついてリクは相手に語りかけ……再び顔を上げたとこりで、ぎくりと立ちすくんだ。

「カツ……ー？」

そこから先が続かない。思わず交互に見比べる　目の前に立つ
ている男と、自分の懐を。

少し癖のかかった黒い短髪。浅黒くて均整の取れた長身。まさに
「目元涼しい」という形容がぴったりの切れ長の目。役者のように
スッと通った鼻筋に、程よく引き締まつた唇　着ている濃紫の王
族服を若干薄汚れた着流しの麻衣に変え、髪を長く伸ばして後ろで
結べば、彼は、まさにリクが知っているカイ以外の何者でもなかっ
た。

(けど、あり得ねえよな……)

今も、懐はずつしり重いままなのだから。ちらりと覗いてみると、
黒くてふさふさした鬚たてがみが規則正しく上下しているのも、はつきりと
見て取れる。

「……そつかー」

突然閃いて、リクは身構えた。カイは、血のつながつた兄がいる
と言っていた。兄弟ならば、顔が似ていっても不思議はない。そして、
もしかすると……

「あんたもカイを連れ戻しに来たのかよ！？」
「『も』？……ああ、そづ言や宰相のオッサンに絡まれてたっけ
な、おまえ」

ひょい、と相手は肩をすくめた。

「そうね、ま、そんなとこかな　俺はティエン。おまえの懐ん中にいるちんまりした生き物^{もの}の賢くて素敵なお兄様にして、有能な影武者様だ」

「影武者……？」

「ああ。だつて、国王陛下がいきなりいなくなつちまつたら、城も巷も大騒ぎになつちまうじやねえか。だから、俺がカイのふりしてやつてたつてわけ。宰相も言つてたろ？　カイは城について、湯治に岀かけるときに挨拶だつてしたはずだつて　その挨拶の相手は、実は俺だつたのさ。

だけど、本人がこうして戻つてきた以上、もはや俺は御役御免つーか、こんな窮屈な仕事、むしろこつちから御免こうむりたいです一刻も早く、みてえな？　つてことで、さつさとそいつをこつちこよこしな。んでもって、おまえもさつさと故郷に引っ返した方がいいい

「だあれが！！」

叫んで、リクは着物ごとぎゅっとカイを抱え込んだ。

「つづーか、『賢くて素敵なお兄様』なんだつたら、もっと弟の気持ち汲み取つてやれよ！　このまんまトンズラするようなヤツじやねえことぐらい、あんたにだつてわかるはずだろ？　なのに、何であの四角四面なじいちゃんみたく、無理やり連れてこうとするんだよーー　おまけに、じわくさに紛れて俺にまで妙な命令しやがつて……あんな、俺は

「親父さんだつたら、この王都^{みやこ}にやいねえよ」

「……え？」

「カイから聞いたかどつか知んねえけど、俺、千里を見通せる水晶

玉つてのを持つてるんだよね
何せ、竜の息子なもんで?」

ふふん、と鼻を鳴らすと、ティエンは口角を上げ、牙を思わせる八重歯を見せた。

「だから、おまえとカイが出会つたときから今までのこともだいたいのことは知つてゐるし、おまえの親父さんらしき人が玉に映つたのも見たことがあるのだ」

「なつ……」

愕然と、リクは相手を見つめた。

「じゃ、じゃあ、あなたは、俺の父ちゃんが

「どこに誰か知つてゐるのか、」と聞きかけた、そのときだつた。

だしぬけに、黒い影が懐から飛び出した。影はティエンめがけてまっすぐに飛んでいき、がぶり、とその腕に噛みついた。たちまち、ティエンの口から悲鳴が上がる。

「いいつ、てええ～～～～つつつ！ ちよ、カイ、おま、何ぢつ

.....

「キイツ、キイツ、キイーーツツー！」

ティエンの腕に噛みついたまま、黒竜は甲高い警戒音を発した。黒くて丸い目が、真っ向から相手を睨みつける。その目につるつとした光が宿っていることにリクが気づいたのと、ティエンがハツとした顔になつたのだが、ほぼ同時だった。

「……………わかつたよ。だつたら好きにしろー。」

吐き捨てるよつこいつと、ふいとティエンはそつまを向いた。

「その代わり、何があつても知んねえからな俺は……」
「あゆみ、あゆみるみつ……」

噛みついていた口を離すと、毅然とした声で黒竜は答えた。ティエンに向けられた言葉だったからか、リクには人語の方までは伝わつてこなかつたが、恐らく「ああ、わかつている」とか「無論、覚悟のうえだ」とかいつたよつなことを言つたのだろう。

「何だあ？ あれ」「真つ黒で、羽なんかついてやがるぞ」「「ノウモリか……？」

悲鳴が響き渡つたせいか、まわりがざわついてきた。チッと舌打ちして、ティエンはパチンと指を鳴らした。とたん、カイの姿が黒い猫に変わり、「にゃうん！」と一鳴きしてリクの懷に飛び込んだ。さらにもう一度パチンと指が鳴ると、今度はティエン自身が真つ白な一本の煙となつて、しゅるしゅるひ、と大空高く立ち上つた。

雲の上に出たといひで、ティエンはすかさず白竜に変化し、一直線に北を指した。その先には、明日からの余談の場になつてゐるヘキギヨク王宮がある。本當は、カイを引き取つてそこまで連れて行き、宿泊のために用意された部屋で彼と入れ替わるつもりでいた。やはり、荒熊王には「本物の婿殿」に会つてもうつて越したことはない。それに、当初から覚えていた「本来の王位繼承者」リクが王都に腰を据えてしまふことに対する懸念も、どうしても拭えなかつた。なればこそ、朝から何度も変化と移動で正直くたくなつて、いた体に鞭打つて、何千里もの距離を飛んで戻ってきたのである。

が、もちろん、そのようなことはティエン以外の誰も知る由もない。

「な、何だ、手妻（手品）か！？」

「幻術師だ！ あれは絶対幻術師に違いないぞ……！」

さつきまでカイに向いていた人々の視線は、今や上空のみに注がれていた。その隙に、急ぎ足でリクはその場を逃れた 結局ティエンに救われた形となってしまったのが、若干悔しくはあつたけれど。

「……さてと、氣を取り直して、王都見物再開すつか

ようやく人だかりから離れたところで、そう言つて懐を見下ろすと、カイは、またしてもこくこくと船を漕いでいた。それこそティエンの見せた一瞬の幻術だったのだろう、黒猫だったその姿は既に黒竜に戻っている。

「あれま、よっぽどくたびれてたんだな、おまえ」

リクは苦笑した。

（ほんとは、聞いてみたかつたんだけどなあ……「おまえも、もしかしたら父ちゃんのこと、知つてたんじやね？」って）

ティエンが知っていたといふことは、その可能性は大いにある。なのに黙っていたのだとすれば、その裏にはよほどの仔細があるのに違いない。ならば、包み隠さず教えてほしかった。だって、クラウに頼まれたのだから 「何でもかんでもひとりで背負い込んで、

しまいにはそれに押しつぶされちまうようなことがあるんだよ。あたしの代わりに、そうならないようにしてやつてね」と。

（ああ、でもあれかな、俺があんまり張り切つてたもんだから、「王都にはいな」なんて言えなかつたのかな……）

ふつとそんな思いが頭をかすめたとき、こきなり背後から荒っぽい声が響いた。

「どけどなどけどけいっ！」

「うおっ！？」

慌てて飛びのくと、荷物を満載した大八車が恐ろしい勢いで走り抜けて行つた。大八車だけではない。牛車も馬車も、人波を縫うようにして何台も走つている。牛車にしろ、馬車にしろ、月に一度通ればいい方だつたハクト村とはえらい違いだ。

（つづーか、ナンもかもが全然違えよな……）

大通りには、村の全員よりはるかに多い人間がひしめいているし、その通りの両側には、見上げるだけで首が痛くなるような高い建物が所狭しと立ち並んでいた。きらびやかな着物や反物をこれでもか、というほど並べた呉服屋。食欲をそそる匂いをふんふんと漂わせている飯屋。リクの顔ほどもある大きな錠前ががつちりとかかつた米蔵や金蔵。路地の奥の暗がりからは、そこはかとなくなまめかしい芳香も流れてきていて……

ぽかん、と口を開けた状態でそれらの光景を見て回つているだけで、あつとう間に時間が過ぎて行つた。いつしか日はとつぱりと

暮れ、通りの店屋にも、ひとつ、またひとつと明かりが灯り始める。そのつりの一軒の軒先に一膳飯屋の提灯を認めて、腹の虫がぐううと音を立てた。思わずリクは赤面した。

（あんなに団子食ったのになあ……）

ま、育ち盛りだもんな、と自分で自分に言い訳して、のれんをくぐる。いらっしゃい、と威勢のいい声に迎えられ、店の隅の席に座つた。

「何にしますよ？」

「そうだな……じゃあ、握り飯と粕汁と鶏の煮しめちょうどだい。そうそう、握り飯と煮しめは、もう一人前作つて包んでくれる？ もう少ししたら宿屋で連れと落ち合つてしまつて、そいつに食わしてやりたいんだ」

言ひ添えたのは、懐の中のカイが相変わらず目覚める気配がなかつたからだった。この分なら、夜中あたりに目が覚めて、「腹が減つた」と騒ぎ出すのに違いない。

刺身や焼き魚と違つて、あらかじめ用意してある煮しめは出でてくるのが早い。それをわしわしと搔つ込み、もぐもぐと握り飯を頬張つていると、先ほど注文を取りに来た女将と常連客らしき連中とのやり取りが、聞くともなしに聞こえてきた。

「しかし良かつたよなあ、ここ立ち退きの話がなくなつて」「ほんとだよ。これも、国王様が悪徳地主たちをとつ捕まえて下すつたおかげだねえ」

それを皮切りに、ひとしきり「国王陛下の政^{まつり}」についての評判が

飛び交う。やれ税金を下げる下さった、だの、歩きづらかった道を整備して下さった、だの、前の戦で身寄りを失った子たちのために、寝泊まりできる場所や、手に職をつけるための学校を増やして下すつたおかげで、子どもの掏摸^{すり}やかつぱらいが目に見えて減った、だの……

「いやあ、あの若さで王位を継いで、おまけに外^とつ国人も同然だつたろ？ 最初はどうなることかと思つていたが……なかなかどうし

て、やつてくれるじやねえか」

「上^{かみ}司^じとの国境の警備も、前と比べてかなり手厚くなつたらしきな これで、この国もすっかり安泰だな！」

すずすず、トリクは粕汁を飲み干した。その椀の陰で、知らず知らず笑みが浮かぶ。

（……そつか。良かつたな、カイ……）

本人は「万事に不慣れで」などと謙遜していたが、見る者はやはり見てくれていたのだ。どれほどカイが頑張つて政務をこなしていったのか。どれほど「万民のため」を思い、心を碎いていたのか……

（つたぐ、こんなときに限つて爆睡しまくじやがつて）

それだけが、何とも残念だった。けれど、だからと言つて、ぐつすり眠つているのを叩き起しすのも忍びない。

（あとで、ゼーんぶ話して聞かせてやるひつと）

耳の穴をぐるぐると、とぼじぐると、リクはさうじつと話して耳を傾けた。

我惱む、ゆえに我

夕餉を取つた飯屋の程近くに小体な宿屋もあつたので、そこへ逗留することにした。無論、今夜は昨夜のようなわけには行かないから、泊まるのは、いつもの如く一番安い大部屋である。

部屋の隅に積んであつた煎餅布団を窓際に敷き、「口口」と横になると、リクは相部屋になつた客たちに背を向けて死角を作つた。懐からカイを出して、そつと布団の上に置いてやる。かすかにカイは身じろぎしたが、目はつぶつたままだつた。気持ち良さげに一伸びだけして、またぐるりと蟠局を巻く。

(やれやれ……もしかして、朝まで寝る気かよ)

もつとも、苦笑したそばから、リク自身も、ふわあ……とあぐびを漏らした。ほぼ一日近く街道を歩き、王都の市中も歩き回つて、すっかりくたびれ切つていたのだ。またたく間に、体が鉛のように重くなつて行く。カイが起きたら一緒に湯屋に行つて、今日の汗と垢とをきれいにぱり洗い流すつもりでいたのだが、

(やつべ……無理だわ)

目が覚めたとき、カイが匂いで食べ物があるとわかると、そのまま鼻先に飯屋から持ち帰つた菜を置くと、リクは、とふん、と眠りに落ちた。

リクがすうすうと寝息を立て始めたとき、黒竜が再び身じろぎしうすく片田を開けた。まるで見計らつたかのようであった。それもそのはず、カイが本当に眠り込んでいたのはティエンが来る前まで、そのあとはずっと、田を開じたまま起きていたのである。

『おまえも、もしかしたら父ちゃんのこと、知つてたんじゃね？』

ティエンの言を聞いたリクが、そう問うてくるであらうことは、カイにも予想がついていた。そして、確かに、リクの懐刀を見たときから、彼の父親は自分の亡き長兄ではないかと思つてもいた。ただ、確信を持つまでには至つていなかつた。実際にコアン＝リク王太子の姿を見たことがあるティエンとは違つて、懐刀以外の判断材料が全くなかつたからだ。

生まれてすぐにウナバルへ送られてしまつたので、長兄の顔など当然のことながら覚えていない。肖像画でもあれば話は別だつたのだろうが、あいにくカムナギでは、国王のものしか描かれないので慣例となつていた。国王そのものを神格化する、という意味合いもあつたし、病死や戦死等が原因で、嫡子が何度も変わつたり、今回のように想定外の王子がいきなり王位を継いだり……といったようなこともままあつたので、下手に「王太子」と銘打つた絵は残せない、といふいささか現実的な理由もあつてのことだつた。

そんなこんなで、昨日、文様のことを尋ねられたときにもばぐらかざるを得なかつたし、今回も、軽々しく「その通りだ」という返事はできなかつた。かとつて、「知らなかつた」というのも嘘になる。それで、寝たふりをして答えること自体を回避したのであつた。

だから、飯屋では、ここで目が覚めた体を装おうかなとも思ったのだ。ちょうど小腹もすいてきており、煮しめや焼き魚煮魚の匂いも、しきりと食欲をくすぐつていた。

ところが、目を開けようとした刹那、その食欲が一気に減退した

「国王陛下の御評判」が、耳に飛び込んできたせいであつた。

(あれは……「私の」功績などではない。……)

すべては、カイが旅に出ていたこの半年の間になされたことだつた。つまり、影武者を務めてくれていた兄・ティエンの手腕によるものなのだ。

(私は……)

本当に、「あの」あとを引き継げるのだろうか

ティエンにしてみれば、特に他意もなく、自らでやれる」とをしたまでのదりう。だが、同じことを、果たして自分はなし得るのだろうか。

……否、実は「同じ」ではないのだ。暮らし向きが良くなれば、さらに良き暮らしを望むのが人の常。その期待に、自分は応えられるのだろうか……

(……難しい、だろうな……)

「そのような御了見で、一国の王が務められるとお思いか!」「その程度の御判断、何故瞬時にお出来になりませぬ! 事が事ならば、一村すべてが食えて死にかねませんぞ!…」宰相・ハクロウにも、何度……否、何十、何百度、そんな叱咤を受けたかわかりはしない。決して自分という個人への攻撃ではなく、国のために、民人のためを思つてのことだと理解はできたから、必死にそれに応えようとはするのだけれど、そうやって気負えば気負うほど、ますます頭の回転が鈍つて行つた。まして、そのような折にウナバル訛りのことなど指摘されれば、さらに頭が真っ白になってしまつて……

(リクならば、きっと、そういうのではないのだろうな……)

数刻前、彼がとつさに見せた機転が、鮮やかに脳裏に甦る。あの判断力に加え、育ちも育ちだ。一般庶民の心の内を察することなどお手の物だろうし、それだけに、下すであらう決断もさぞかし的確なのに違いない。

加えて、「王家の嫡流」である まだ不確定だとはいえ、ティエンのあの物言いから推して、恐らく、ほぼ間違いはないのだろう。

(私とは、大違ひだ……)

本当は王家の血など一滴も流れではおらず、それどころか、人外の それも「災いのもと」であるとされる竜の血筋ですらある、この血分とは。

(やはり、彼を連れてきて良かった……)

明日にでも、リクを伴つて城に戻る。そして、彼を、特に長兄を良く知る古い家臣たちに引き合わせ、「確かにこの方は、コアン＝リク殿下のお子様かもしません」という声が上がれば、潔く王位を明け渡すのだ。無論、最初は不慣れで戸惑うこともあるが、ティエンを説得して自分の姿をしたまま攝政になつてもらい、政界の重鎮であるハクロウと共に補佐してもらえば、リクのことだ、すぐを持ち前の才覚を發揮して、良き国王となるのに違いない。

(されば、この国はもっと良くなる……)

少なくとも、単に戸籍上王家につながつているというだけの理由で「無能なよそ者」が玉座を占めているよつは、ずっと、ずっと……

「……っ！」

キリキリ、と胃の腑が痛み、吐き気がこみ上げた。矢も盾もたまらず、カイは布団から、そして大部屋の窓からも飛び出した。ほとんど落ちるように路傍の茂みに飛び込み、激しく咳き込む。空腹だったのが幸いして、出てきたのはわずかな胃液のみであった。が、吐き気は一向に止まらなかつた。仔竜の小さな体であつたのも良くなかつたのだろう、どんどん体力が奪われて行き、だんだん目の前がかすんでくる。

「『あやうん！』

唸り声に我に返つたのと、左肩から右脇腹にかけて鋭い痛みが走つたのだが、ほぼ同時だった。

「ぐぬっ、ぐぬぬぬぬぬ……」

狩人の田になつた虎猫が、じいつとこちらを見下ろしていた。痛みをもたらしたのは、その両の前肢の爪だつた。黒竜の小さな両肩をしつかりと押さえつけ、地面に繫ぎ止めている。人の姿をしていれば払いのけるなど造作もないが、相手の頭ほどしか大きさがなく、しかも消耗し切つてている状態では、いかんともしがたかつた。カイは、じつと相手を見返し……ゆっくりと目を閉じた。

『殺るんなら、早^{はよ}うしいや』

口をついて出たのは、使い慣れたウナバル言葉であった。

(そうだ……思えば、あそこへいた頃から私には「居場所」などなかつたのだ)

そんなものなど、求めてはいけなかつた。

なかじゅ

中下両国の和睦の「証拠品」。しかしながら、ひとたびその約定が破られれば、あつけなく首を落とされる、まさに「捨て駒」。それが自分の立場であり、「分」でもあつたはずだつた。ならばいつそ、この猫に食われてその血肉となつた方が、「捨てられ甲斐」だつてあらうというも……

ふつと体が軽くなつた。一瞬、人の姿に戻つたのかと思ったが、そうではなかつた。

何事もなかつたかのように悠然と、猫は立ち去ろうとしていた。ピン、と上げた尻尾が、ふん、と嘲笑うように揺れる。

(猫に取られる価値すらなしか、私は……)

ズキリ、と痛んだのは、果たして体の傷だけだつたのか……

『おのれユアン＝カイ＝ハシム……！ よくも我が弟を……！』

今度は、半年前、とある山中で聞いた怨嗟えんさの言葉が、くつきりと脳裏に甦つた。翻る銀の刃、脾肉を絶つ嫌な感触、血しづきと臓腑の飛び散るさまも……

刃を向けてきたのは、ウナバル王の一の姫で、政略結婚によつて長兄の妻となつていたユナ妃であつた。

さらにさかのぼること半年前、カイは、ユナ妃の弟であり、長年の因縁の相手でもあつたウナバル王太子を斬つたことになつていた。本当は、その原因となる国境紛争が起きたとき、カイは流行病に臥せつていて、例によつて影武者として代わりに戦場に出たティエンが、「よくもカイに無体なことばつかしやがつたな！」とばかりにはつたりと斬り捨てたのであつたが、そんなことなど知らな

いユナ妃にしてみれば、カイこそが弟の仇であることに他ならない。それで、どこで聞き知つたのか、旅先までカイを追いかけてきて、親しげな素振りで人気のない山の中へ誘い込み、斬りかかってきたのだ。

だから、返り討ちにした。

あのときは、それもしかだがないと思つていた。国王たるもの、国のために、民のために、たとえ相手を斬つてでも生き延びねばならぬのだ、と。だが……

(義姉様……)

仰向けのまま見上げた夜空が、ぼんやりとかすむ。

(やはり、あのとき……あの瞬間、喜んであなた様の御手にかかりておくべきだったのですね……)

ユナ妃は、「用事で北部へ行くところなのです」と言つていた。これまで、それはただの方便だつたのだろうと思つていたのだが……

リクも、北部の出だ。団子屋の店主との世間話の中で、本人が「北部のハクトつて村から来た」と言つていたのである。といふことは、もしかするとユナ妃は、夫の忘れ形見の存在を知つて、迎えに行く途中だつたのではないだろうか。カイの義母の王太后がそうであつたように、本来ならば妾腹の子など迎え入れたくはなかつたのだろうが、「弟の仇」にのうのうと玉座にふんぞり返らされているよりは、まだましだと考えて……

だと、するならば。

（死ぬべきだったのは、やはり私だ……）

そうすれば、リクは何の問題もなく父親の後を継げたのだ。ユナ
妃も、長兄との間に恵まれた二人の姫君と共に、今も健やかに……
「憎きユアン＝カイ」への仇討ちも見事なし遂げて、心晴れやかに
過ごさせていたのである（うに）……

「かん、にん……」

堪忍してな、義姉様……その呴きを最後に、小さな黒竜は、ぴく
りとも動かなくなつた。

ババア降臨！？ 伏魔殿への正体！！

それから、一刻（約一時間）ほど後。

「うーん……」

「ごそ、」セトリクは身を起こした。飯屋で粕汁をお代わりしたうえに、廁に寄らずに寝てしまつたので、今頃になつて尿意と便意を覚えたのだ。

その手が偶然、菜の包みに触れた。そこで、はたと我に返る。

「あれ？ カイ……？」

包みの傍で寝ていたはずのカイが、いなくなつていた。包みを開いた形跡もない。

（あいつも、便所かなあ……）

しかし、廁にも彼の姿はなかつた。おかしいな、入れ違つたのかなど訝りつつ用を足すと、リクは再び大部屋の布団に戻つた。あらためて掛布団をめぐり、敷布団の下まで覗いてみたが、やはり、黒竜の羽一本さえ見当たらぬ。

（まあ、荷物も一式、ひつそり置いてあるし、そう遠くへは）

そこまで考えて、ギクリとする。

（ちよ、待て……それって、むしろヤバくなー？）

荷物の方も、リクが置いたそのまで、カイが人に戻つて着替えた気配は全くなかった。ということは、彼は黒竜の姿のまま街へ出たのだ。そんな状態で、万が一、何かの加減で変化が起こつてしまつたら……

「ちょっと出かけてくるから!」

宿の帳場に断つて、リクは荷物小脇に、もう一度夜の街に飛び出した。

もう真夜中も近いというのに、相変わらず通りは人であふれ返っていた。ここに全裸の男がいきなり出現すれば、昨日以上の大騒ぎになつてしまふのは必定だろう。

それに、ここは何と言つても「国王陛下のお膝元」。騒ぎを聞いて駆けつけてくる捕り方だつて、みんな「本物の陛下」を見知つているはずだ。そうしたら、あつという間に正体が露見して、そのまま王宮に連れ戻され……!!

「カイ? カイ……!? カーイ!…」

叫びながら、リクはその辺一帯を走り回つた。けれど、反応はなかつた。

(何せ、あのちつちええ翼だ。いくら時間が経つてゐつつたつて、せいぜい二三つ先の角ぐらいまでしか行けねえはずだけど……)

もしかして、ティエンを呼んで、自分から王宮に戻つてしまつたのだろうか。

「でも、それだったら、カイのことだ、一言ぐらゐあつてもおかし

くねえよな……？」

半ば自分に言い聞かせるようにひとりしゃれたそのときだった。横合いから、ぐいっと袖をつかまれた。そのまま、路地に引きずり込まれる。

「何だよカイ、ビリモツヒコヒコおあああーつーー？」

最後まで言えなかつたのは、心底からぶつたまげたからだつた。

そこにいたのは、カイではなく。
……といふか、男ですらなく。

(な、んなの、じこつ……)

ありとありゆる化粧品で極彩色に塗りたぐられた顔。
でつぶりした腹に、ヒョウ柄の派手な着物。
活火山と見まじつぼどに高々と盛り上げた真っ金の髪

(何これ、新手の化け物！？)

それとも、悪魔の化身か何かだらうか……！？

死んだ母に「お年寄りのことば、ちやあんと尊敬するんだよ」と
教え込まれて育つたから、女性の年配者の呼び方はたいてい「おば
あさん」。どんなに親しくても、せいぜい「ばあちゃん」止まりだ
つたのだが、今回に限つては、そのどちらでも呼べそうにない。

(ほんつと申し訳ねえけど、マジ「ババア」としか言こよつねえわ
……)

「ビ派手ババア、ここに降臨！？」 そんな瓦版の見出しが浮かびそうな勢いである。後光ならぬ金ぴかの髪の光で、頭がくらくらしそうだ。

しかも、「恐怖体験」は、そこで終わりではなかつた。

ク

わなわなわな、と唇を震わせたかと思うと、ババア もとい老婆は、いきなりリクに抱きついてきた。そして、おんおんと声を上げて泣きじやくり始めたのだ。

「おおおお、コク……マジン=コクウ~~~~~」

穴のあくほど、リクは相手を見つめていた。

(何こいつ? 何で俺を「リク」って……)

一瞬混乱しかけたところで、なん?と顔をひそめる。

「あの、人違いなんじゃ……俺、確かに『リク』ですけど、ただの『リク』ですから！　『コアン』？とかいうのはくつついでませんから……！」

肖像画が描かないと同じ理由で、王子たちの名前も世間には公表されていなかつた。国王となって初めて「御名」が明らかにされ、学校でも教えられるのである。王子たちの側近にだけは名が知らされてはいたものの、その彼らでさえ、本当に名を呼ぶ必要があ

ると認められたとき以外は、「王太子様」だとか「一の君（第一王子）様」だとかといった呼び方をするよう厳しく教育されていた。つまり、リクにとつては、「ユアン＝リク」とは、

（つか、誰だよそれ……）

という存在にすぎなかつたのである。もう少し平静であつたなら、「ユアン」がカイの名前の一語と一致していることに気がつけたかもしないが、何しろ、妖怪変化のような生き物にがつちりと抱きつかれたままなのだ、とてもそこまでは気が回らない。

そんな時間が永遠に続くのではないかと暗澹たる気分にとらわれ始めた頃、ようやくバタバタバタ、と別の人間の足音が響いた。

「姫様……姫様つ……！」

姫様？ 思わずきょろきょろとリクはあたりを見回した。無論、絵草子に出てくるような可憐で楚々とした「お姫様」を想像したことだ。が、そんな人物はどこにもいなかつた。代わりに、白髪をぴたりと七三に撫でつけ、針金のように細い体を渋茶の上下衣で包んだ老爺が、慌てふためいた足取りで駆け寄つてくる。

「ああ、申し訳ありません！ 姫様が失礼なことを
…………は？」

ぎょっとして、リクはいまだ自分に抱きついている老婆を見直した。

「…………」

「あの……姫様つて」

「はい、その御方にござります」

何の迷いも見せず、老爺は肯定した。

「確かに、そうお呼びするには畏れながらこちやか臺じゅうが立ちすきでいるきらいはござりますが、十代の頃から執事としてずっと御傍にお仕えしております私にとりましては、やはりこの御方は『姫様』にほかなりませぬので」

「そ、そう、つすか……」

としか返しようがなく、リクは、あはは、と呑めつた笑いを浮かべた。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

「息子さんを亡なくされた……？」

「ええ、三年前の流行病で」

ドウタクと名乗った老爺は、牛車を御しながら応じた。その横にリクが座っているのは、後ろの座席にどつかりと鎮座しま正在する「姫様」が、どうしてもリクを屋敷へ連れて行くのだと言つて聞かなかつたからであつた。

「そして、あなた様は、そのお坊ちやまの若かりし頃に大変そつくりでいらっしゃるのです。ですので、姫様は、お坊ちやまがこの世に甦つて来られたかのように錯覚されてしまったのでしょうか。

聞けば、お名前もよく似ていらつしゃるとのこと、これも何かの御縁かもしれませぬ。私からも、お願いたします。今夜はぜひ私どもの屋敷へお泊まりになり、明朝、お宿の方に戻られては……お

召し物も随分と汚してしまつたようすで、お洗濯もさせていただきたいです」

お宿の方には「からから」連絡をさせていただきますので、お友達が戻られても大丈夫だと思ひますよ、と付け加えられれば、そうですね、と答えるしかないだろう。本当は「ちゃんと『戻られ』るかどうか」、 자체が気になつてならないのだが、この流れでそんなことを口にすれば、「だったら、お友達も捜してお連れしましょうか」などといふ話になりかねない。その結果、どうこうことが起こるか……少なくとも、吉報がもたらされるとは到底思えなかつた。

(「じめんな、カイ……朝には絶対帰るからさ」)

心でそつと謝ると、リクはその申し出を受け入れた。

屋敷は、京都の西の端の山中にあつた。

「では、妾は部屋着に着替えてくるわ」

びつしつした腰を振り振り、「姫様」は早々に浴室へ消えた。

「あ、リク様も御召し替えを」

ドウタクに促されて、リクも、相手のあとについて歩きだした。その口から、程なく感嘆のため息が出た。

(「しかし広えなあ……廁が最低十か所はなきや、確實に漏りしちまつんじゃね?」)

おまけに、ドウタクの話では、「こは「姫様」の実家の別荘で、

もとは、王都の中心近くの、もつと広くて立派な屋敷に住まつてたのだといつ。

「ところが、お坊ちやまが亡くなられ、そのあとを継いだのは、姫様にとつてはなさん仲の……それで、姫様は、その者に追い出されるような形でこのよつな田舎に」

本当に、お坊ちやまさえお元氣であったなら……悔しげにそう呟いて、ドウタクは目頭を拭つた。それから、はっと居住まいを正して、面映ゆげに付け加えた。

「ああ、申し訳ございません！　あまりお坊ちやまの在りし日を思い出せてもと、姫様のいらっしゃる前では極力このよつな話題は避けているのですが、その分、とつことなのでしょうが、今のよううに姫様が御傍にいらっしゃらなくなると、つい本音が出てしまつて……

さて、ここから先が、お客様のお泊まりになるお部屋になります。今宵はこの一番手前のお部屋へお泊まり下さい。お召し替えもこちらでお願いいたします。脱いだお召し物は、扉の傍の籠にお入れ下さい。新しいお召し物は、部屋にあるものどれでも好きなものをお選びになつて構いません。では、私はお茶のしたくがござりますので……頃合を見て、お迎えに上がりまつ

「は、はあ……」

戸惑いながらもうなずくと、リクは部屋に入った。言われた通りに脱いだ着物を籠に入れ、衣裳戸棚を開けたとたん、その表情が、ますます戸惑いの色を帯びる。

(何だよ、この着物……)

「姫様」などと呼ばれていて、これだけの屋敷に住まつていて、しかもそれが「田舎の山荘」だというのだ、それなりの家柄なのだろうとは思つっていた。

(けど……これって、ぶっちゃけ王侯貴族の服じゃんか)

数刻前、カイに扮したティエンが全く同じ形の服を着ていたのを見たばかりだから、間違いはない。それに、寺子屋や中等学校で見た歴代国王の肖像画でも、王たちは皆、この手の衣裳を身に着けていた。

ちなみに、この肖像画、いまだに先代王のものまでしか描かれていない。王太子と国王の両方が立て続けに亡くなつたので、その分、喪に服す期間も延ばしたからだと聞いている。リクがカイの正体に気づくのが遅れたのも、そのためだつたのだが……

(……つと待てよ？ カイって言やあ……)

彼が妾腹なのにもかかわらず王位を継承することになつたのは、王太子が亡くなり、ほかの王子たちも既に鬼籍の人となつていたからだつた。一方、この家では、「姫様」の息子が亡くなつたために、妾腹の子が後継者になつたといつ。これは、單なる偶然なのだろうか？ それとも……

ウソだらマジかよ信じりんねえ!! 再び

「……って、ふんどじ一トで悩んでてもじょうがねえ、か」

あとでさつげなくドウタクに探りを入れてみよう、と決めて、リクは衣装戸棚の中では一番地味そうな紺無地の服を身に着けた。

(えへへへ、ちょっと偉くなつたみてえな気分?)

こんな服装ができる」となど、今後の人生ではまずあり得まい。だったら、せいぜい楽しめねば……そう思い直して、鏡の前で役者のように格好をつけたり、くるりと回つたりしていのちひと、コンコン、と部屋の扉が叩かれた。

「お支度は整いましたでしょうか?」

そう言いながら入ってきたドウタクは、リクの姿を見るなり絶句した。

「ほ……本当に、よく似ておられる……」

じぼしの闇を置いて、よつやくそつやくと、まるで気分を切り替えようとあるかのようにそそくさと汚れ物の入った籠を持ち上げる。ところが、そこで再び彼は唸つた。

「な、何と……!..

「あの……どうかされましたか?」

「どうかしたどいの話でござれこません!..」

今度は間髪入れず、ドウタクは答えた。そして、やけに厳しいまなざしで、じつとリクを見据えた。

「正直にお答え下さい」　この籠の中の懐刀、どちらで手に入れられたのです？」

「へ？　…………あ！」

言われて初めて、リクは脱いだ服と一緒に懐の中身まで籠に入ってしまったことに気が付いた。

「いやあ……すんません！　俺、こんな立派な部屋に入るの初めてで、すっかり緊張しちまつて……親父の形見なのに、うっかりそれ、洗濯に出しちまつと」「だった

無論、場を和ませようと、あえて冗談めかして言ったのである。しかし、ドウタクの表情は変わらなかつた。

「お父様の形見……それは、まことなのですか？」「ますね？」

「え？　あ、はい……」

わけがわからぬなずくと、せりに畳み掛けるように聞こてくる。

「それで、あなたさまの」「田舎は

「……は？」

ますますわけがわからず、リクは田舎を白黒させた。

「（）田舎、つて……えーっと、北部のハクト村　」

「その前は

「はい？」

「先祖代々、ハクト村とやらに住まっていたわけではないのです？」

お母様は、どちらからいらしたのです？」

「母ちや　いや、母、ですか……？」

何でそんなことまで詮索するんだ、とは思つたものの、答へねば次に進ませてもらえそうにない。

「えーっと……やうにえれば、俺が生まれるちょうど前まで、もつと北の、カ……カノ……？」

「カノへ村、ではないですか？」

「ああそうそう！……つて」

さすがに、疑いの眼を向けざるを得なかつた。

「ヒツジさん。何で、そんなこと知つてるんです？」

「……シツジ、ドジヤルコモク」

律儀にドウタクはリクの北部訛りを訂正した。それから、だしあけに籠を放り出し、リクの前に跪いた。

「よくぞお戻り下さいました、新王陛下！」

「じん、おつ……ー？」

ナニソレ、オイシイノ？ そんな埒もない思いが頭に去来する。

「あ、あの……言つてゐる意味が……」

「そのまま、ヒツジやります」

跪いたまま、ドウタクは応じた。

「あのような格好で街に出られていることが知れるといろいろと面倒よね、あえて口をつぐませていただいたのですが……姫様こそ、前王妃様にして、現在の王太后陛下。そして、あなた様は、王太后陛下の実のお孫様 今は亡き王太子コアン＝リク殿下の忘れ形見に間違いございません！ その懐刀と、御母君の王太后陛下でさえ見間違われたほど殿下そつくりのお顔が何よりの証にござります……！」

沈黙が流れた。リクは、相手の言葉を一回、心で反芻した。そして、三回目の反芻が終わった瞬間、素つ頓狂な叫びを上げた。

「嘘、だろ……！？」

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

……嘘では、なかつた。

それから間もなく、応接間に通されたリクは、一通の書状を手渡された。

『父上様、母上様。

私は、もう長くはないでしょう。世を去るにあたって、唯一の心残りは、ユナとの間に男子をもうけられなかつたことです。これで王家嫡流の血筋が絶えてしまうかも知れないと思うと、お一人にはまこと申し訳なく、胸ふさがれる心地であります。

しかし、実を申さば、全く希望がないというわけではありません。父上はご存じの通り、そして母上も、もしかしたらお聞き及びかもしませぬが、私は十五年ほど前、まだユナと婚姻する以前に、北

方戦線はカノヘにて、村の娘イヅチとの間に契りを結びました。この結果、子ができるいて、それが男子であつたとするなら……

イヅチには、形見だと言つて私の懷刀を渡し、もし男子が生まれし折には私の名の一部を取つて「リク」と名付けよと記した書付を預けてあります。私に万一事あらば、イヅチを探し出し、男子が生まれていれば、何卒この子を私の後継とお定め下さい。イヅチのことも、側室待遇で快く王宮に迎え入れていただきたく……

お一人には、あれこれと思うところもおありかとは存じますが、王家存続と繁栄のため、曲げてお聞き届け下さりますよう、伏してお願い申し上げます。

大陸歴907年冬 カムナギ国王太子ヨアン=リク記す

紙には、リクの懷刀の文様と同じ杏と鶯の透かしが入つていた。それに何より、本来なら王太子のような立場の者が知るはずのない母の名がはつきりと記されていたことが、その書状にある「男子」が紛れもなくリク自身であることを物語つていた。

「これは、昨年末、王宮内で大掃除が行われた際に、殿下の使われていた御机の文箱の中より出てきたのです。そこにも書かれてあります通り、殿下と奥様のコナ妃殿下の間には姫君様しかお生まれにならなかつたので、恐らくは、病を得られた際に、お世継ぎのことをご心配されてお書きになられたものの、ご両親様にお渡しになられるには至らなかつたのでござりましょう」「う」

そう説明して、ドウタクは頭を押さえた。

「私どもは、狂喜いたしました。これも先ほど いろいろとほかしながらではございますが お話ししました通り、今の国王陛下は王太后陛下とはお血がつながつておられませんで……なさぬ仲の常にて、どうしてもわだかまりは避けられず、王太后陛下は新国王

の即位式後間もなくお城を出られたのです。「主人様を亡くされたユナ妃殿下も、そんな王太后陛下を氣づかわれ、姫様たちと一緒にこのお屋敷に移られて……」

ですが、もしユアン＝リク様の直系の男子が見つかり、「遺言通り、今の陛下に代わってその男子が王位を継ぐことになれば、お二人は、晴れて再びお城にお戻りになることができる。そこで、まずはユナ妃殿下が、御自らあなた様のお母様に会いに行かれたのです。ところが、慣れぬ北の地でご無理でもされたのでしょうか、しばらくして病にて身籠られたという知らせが……」

それで、もはや希望はついたものとばかり思っていたのですが……まさか、このような形であなた様にお会いできるとは……！」

「これも亡きお父君のお引き合させでしょうか、と言ひ添えて、遂によよよと泣き崩れたドウタクを、呆然とリクは見つめた。

（俺が……！」の俺が、国王に、だつて……？）

カイに出会う前だつたら、きっと「すっげえ……究極の大出世じやん！」と単純に喜んで、さつさと首を縦に振つていたことだろう。けれど……

（あいつみたいに強くて眞面目で賢くて立派なヤツだつて、ああして何もかも投げ出して旅に出たくなつちまうぐらい大変な稼業なんだろう？ 王様つて……）

それを、カイほど腕が立つわけでもなく、賢いわけでもなく、王宮での暮らしも、王族としての立ち居振る舞いも、全く、かけられも知らない自分が、ただ血筋が直系だというだけの理由で、ましてやカイを押しのけてまで……

(やー こやこやこやこや…… ……)

母が生きていたら、きっと横つ面のひとつもひっぱたかれて、こう言われるだろ？。

『人にはね、「分」つてもんがあるんだよつー…』

というか、だからこそ、母はリクに父のことを何も知らせずにいたのではないか。庶民の子として育つた者がいきなり分不相應な立場になつても、何もいことなどありはしないから、と……

(ッフーか、だいたい、そうなつたらカイはどうなるんだよー…)

物心ついたときからウナバルで人扱いすらされずに育ち、やつと帰ってきた祖国でも苦労続きで……そんなカイを、また別の場所へ追い出そつといつのか。

(まあ、全く行き場がないつてわけじゃないんだろ？けどな……)

国王とこつ身分がなくなれば、クウとだつて堂々と一緒になるだろ？し、ティエンと一緒に暮らす手だつてある。が、だからと言つて、「追い出された」という記憶まで帳消しになるわけではない。しかも、その後釜に座るのは、事もあろうにリクなのだ。

『俺が出会つたのは、今の「このおまえ」なんだよ。真つ黒で、手のひらにのつかるくらいちんまりして、たまに人に変化へんげしちゃあ厄介事を起こす、ヘンな竈 とりあえずは、そんでいいじゃねえか』

そう言つて、あるがままの自分を受け入れてくれたはずの相手。

初めてできた、掛け値なしの友だとばかり思っていた相手。その相手に、手のひらを返されたように自分の地位も居場所も奪われてしまったら、カイはどうほど傷つくだろう。どれほど哀しい思いをするだろう……

すれ違つ思い、暴走する思惑

「無論、事が事でござりますので、すぐには諧とおひしゃつて下せることは申しませぬ。ただ、お祖母様のお気持ちと我々お付きの者の思ひもどうか御考慮に入れていただきて、何とぞ前向きに……」

そう言い置いてドウタクが去つて行つてからも、リクはまだ、座つていた長椅子を動けずにいた。

（つづ一か、今の物言いからしたら、「嫌だ」つづ一選択肢はなしつてことじやねえかよ……）

「こんなことなら、ここに来ること自体、何が何でも断るんだつた後悔が心を去来したそのとき、そつと肩に手が置かれた。

「済まぬな、ドウタクが無理を言つて。そのように困らせるなどとなるのなら、招待などするのではなかつた……」

「いえ

「

応じかけて、リクは田を瞪つた。

その声には、はつきりと覚えがあつた。でつぱりとした腹回りにも。だが、そこに立つていたのは、あの派手派手な物の怪のような「姫様」ではなかつた。落ち着いた藤色の地に、裾の部分だけ銀糸で季節の花々が刺繡された衣。ゆるやかにひとつに結ばれた、ふんわりと癖のかかつた銀髪。薄化粧を施した柔軟な顔……リクの反応を見ても気分ひとつ害した様子もなく、につこりと微笑んださまは、まさに「貴婦人」と形容するにふさわしかつた。

「あのような面妖な格好、妾わらわとて好きでやつておるのではないのじ

や。ただ、ほかの歴代の王妃と違うて、妾は外つ国の王家の出ではなく、この王都で生まれ育つたゆえ、存外、市井に知り人も多くての。そういう者と万が一にもすれ違うのを心配したドウタクが、あのような変装を考え出して……気持ちはまことありがたいのじやが、化粧のしかたと衣や鬘^{かつり}の選び方には、正直もちつと工夫をしてくれたら良いのにも思わぬではないの」

リクの隣に腰を下ろしながら、もう一度くすりと王太后は笑った。それから、ふと表情を引き締め、声を潜めた。

「ドウタクの話じやがな……断つて一向に構わぬのじやぞ」「え？」

耳を疑つて、リクはまじまじと相手を見直していた。

「で、でも、ドウタクさんは……」

「あれは眞面目な忠義者なのじやが、少々一本氣すぎるといろがつての。今回のことも、当人は、妾のためを思つていろいろなであらうが……」

ふう、と王太后はため息をついた。

「妾は、決して五世殿 そなたが今『国王陛下』と呼んであるゴアン＝カイ＝ハシム五世殿に追い出されたわけではない。妾の方から、顔を合わせるのを遠慮したのじや。なさぬ仲とは厄介なものでな、顔が合えば、余計なことがいつ口からこぼれ出るとも限らぬ。現に、恥ずかしながらその昔は、そのせいで五世殿にもその御生母にも随分と酷い仕打ちをしてしもうた。ゆえに、一度と同じ轍を踏まぬよう、あえて離れて暮らし、一切互いに関わらぬ道を選んだのよ。

しかし、妾がどんなにそう言つても、ドウタクは一向に聞く耳持たず、『たとえそうであつたとしても、引き止めるのが当たり前と言つもの。それをしなかったのだから、やはりこれは五世殿の落ち度である』の一^{てん}張りで……それゆえに、そなたが現れたことで、これで五世殿に一矢報いられるとするかり舞い上がつてしまつたのである。

じゃがの、妾は、何もそなたに、何が何でも五世殿の代わりに王位についてほしことは願つておらぬのじや。五世殿が悪政を行つてゐるといつのならばいざ知らず、我が国は現在、内外共に近年稀に見るほど安定しておる。そのようなときに、いきなり上に立つ者が替わつては、かえつて世の乱れに通じるといつもの。それに何より、そなたは、今の今まで何も聞かされることなく、平民の子として自由闊達に過ごしてきたのであるう。そんなどなたをせまい王宮に閉じ込め、望んでもおらぬことをさせるなど……実の祖母なればこそ、孫にそのようなことを強いつのはないのじや

鳶色の瞳が、ひたとろくを見つめた。

「しつこいつて申し訳ないようじやが、ほんによつ似ておる……今、いくつになる」

「へ？ あ、えつと……數え十八、ですが」

「そなか……そなたの父がそなたのお母御と出合つたのは一^{はたち}十歳のときであつたから、だいたい同じぐらこの年頃じやな。北方戦線で深手を負い、お母御に助けてもらつたのが縁であつたらしい。実は既に祝言も挙げておつてな、本人としては、そのまま平民となつて添い遂げるつもりであつたようじや。ゆくゆくは一国の王となる者にそのようなわがままなど許されぬと、無理やり王宮へ連れ戻したのじやが……どのみち王位も継^{さだめ}げぬ運命だつたのじや、いつそ望み通りにさせたやれば良かつたのかもしれぬのづ。されば、親子三

人、今も平穀無事に暮らせていたかもしれなかつたものを……」

懐から手巾を取りだし、王太后はそつと田元を拭った。そうか、トリクはようやく得心した。その後悔をずっと胸の内に抱えていたからこそ、このひとは、こんなことを……

「あの……ありがとうございます」

少し考えてから、リクは言つた。

「俺、ほんと言うと、父ちや 父には捨てられたんだってずうつと思つてて、心ん中じや、憎んでさえいたんです。こうして王都に出てきたのも、商売を始めて、大成功して、父に田に物見せてやるう、なんて思いがあつたからで……」

でも、さつきの手紙を見て、王太后様のお話も聞いて、決して父は俺や母を見捨てたわけじやなかつたんだなつてわかつて……嬉しかつたです、すく。だから、ほんとなら、父の思いに応えなきやならないのかもしねいんですけど」「わかつておる」

首まで言わせず、王太后は深く首肯した。

「それに、商売をするといつのもなかなか良い考えじや。それこそ、血筋も血筋じやからの」

「血筋……？」

「妾の父は、もとは両替商だったのよ。それが、先々代の三世陛下に商才を認められて、勘定方を任されることとなつた。ところが、平民の立場では国政に携われぬゆえ、特別に貴族に列せられたのじや。実際、妾も、幼き頃は、商家の娘として街なかを普通に遊び回つて育つたものよ。縁あって先代王に嫁いだ際に、言葉づかいも立ち居振る舞いも、姑であった当時の王太后様にじこかれて徹底的に

矯正されたゆえ、今では妾が平民の血筋であると思つ者などほとんどおらぬがな

「やうだつたんですか……」

確かに、あのカイ以上に時代がかつた喋り方だとは思つていたが、それは、先々代の王家で使つてはいた百年近く前の言葉を強制的に仕込まれた結果だつたのか……

そう考へると、この王太后も、カイに負けず劣らず苦勞が多くつたのかも知れない。もしかすると、突然現れた側室とその子であるカイに「酷い仕打ち」とやらをしてしまつたのも、それゆえだつたのではあるまいか。自分はこんなに大変な思いをして王妃を務めているというのに、横合いから「おいしいところ」だけを搔つ攫つて行つて、という思いに駆られてしまつて……もちろん、だからと言つて、それが許されることなのかと問われれば、是非もないわけなのだ。

「とまれ、そなたには王家の血だけでなく、王都隨一の大商人の血も流れておるのじや。もしそなたがそちらの才を受け継いでおつて、自身でもたゆまず努力を重ねれば、曾祖父様の再來になるのも夢ではないかもしれぬぞ」

自分から話を元に戻すと、王太后はつと立ち上がり、部屋の隅に置かれた書き物机に移動した。慣れた様子で紙と筆を用意し、さらさらと何事か書き付け始める。

「あの、それは……」

「紹介状じゃ」

「紹介、状……？」

「親族は、今も城下で商売をやっておる。妾の立場が立場ゆえ、中には寄合の取締役とか称して幅を利かせている者もあるらしいか

ら、そなたが何を始めるにせよ、必ずや挨拶に行くことにならつ。その折に、多少なりとも助けになればと思つてなみれば、このよつた手など借りずとも良いと言いたいところじやうが、使える物は賢く使うのも商いの極意のひとつだ

一瞬だけ「商人の娘」の顔に戻つてにんまりと口角を上げると、王太后は、書き上がつた紹介状にふう、ふうと息を吹きかけた。完全に乾いたところで、厚手の紙に包んで封をする。

「あ、これを持つて、早々にここを去るが良い。事情が事情ゆえ送ることもできぬが、くれぐれも気をつけてな

「ありがとうございます！」

押し戴くよつにリクはそれを受け取り……懐にしまおうとしたそのとき、手に固いものが触れた。この応接間に来る前に、籠から出して隠しに戻した父の形見の懐刀であった。

「……あの、これ」

書状と入れ替わりにその懐刀を引っ張り出すと、リクはそれを王太后に差し出した。

「俺は、もう持つてる必要ないんで」

「持つていて良いのか？……妾が」

王太后の両眼に驚きが宿つた。ややあって、それはつむつむとしだ光に変わつた。まるで我が子ユアン＝リク自身であるかのようぎゅうつと刀を胸に握り抱くと、またしても王太后はおんおんと号泣した。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

それから間もなく、リクはこつそりと客用寝室に戻った。

もう王太后の前に出ることもないのだから、畏まつて王族服を着ている必要もない。荷物の中にあつた洗い替え用の普段着に着替えると、王太后からもらつた書状と錢の入つた巾着袋だけを懐にしまつて、再び忍び足で廊下に出た。雨合羽だとか、カイの着替えだとかも置いて行くことになつてしまつが、ドウタクに黙つて密かに出て行くことを考え、動きやすさを最優先したのだ。

(ま、たいていのもんは金さえ持つてりやまた買えるんだし、カイのことなら、お城に帰るまでずっと竜のまんま懐に入れといつてもいいんだし……)

街へは、多少遠いがほぼ一本道だと王太后から聞いていた。ならば、一晩中歩き続ければ

「……ビルへ行かれるのです、リク様」

ひんやりした声が呼び止めた。げ、と硬直してリクは立ちすくんだ。

「や、ちょ、ちょいと、廁にかわや

「そんな巷にでも出る格好をなされて、ですか」

さうに冷ややかに、ドウタクは指摘した。その声音が、一転、低くドスの利いたものに変わる。

「勝手なことをされては困るのですがね」

どこかで見たような……と迷つたら、お腹によく出でてくる悪代官の顔つきだった。その顔つきのまま、相手は何気ない様子で手を伸ばし……

「……がはっ！」

みぞおちを突かれたのだ、とわかつたのは、腹を抱えてうずくまつたあとだつた。

（何だよ、ここの……ジジイとは思えねえ攻撃りよ　）

心中での突つ込みが終わらないしつこい、今度は首の後ろに手刀が炸裂する。

「……っつー！」

声にならない呻きを上げて、リクは床に転がつた。すうっと暗くなつて行く景色の彼方で、これでもか、といつほど冷酷な薄ら笑いが閃く。

「あなたには、ぜひとも王位を簒奪さんだつしていただきないと。王太后陛下のためにも、そして……この私の名誉回復のためにね」

「なつ……」

こいつ、何を　　そう思ったところで、完全に目の前が真っ暗になつた。

戻れない！

窓から日の光が差し込んで、ティエンの顔と、銀色に戻った髪を照らした。

「ん……もひ朝か……」

ぼんやりとした眩毛と共に、まぶたの奥から赤い瞳がゆっくりと姿を現し……

「やべつ……」

叫んで、ティエンは跳ね起きた。昨夜、最後にカムナギの王都に行き、何百里もの距離を飛んで、このへキギヨク王宮へ戻ってきたところで、とうとうドドドッと疲れに襲われた。そのまま寝台に倒れ込み、「もうだ、寝る前にもう一度あいつらの様子見ないと」と思つて……思つただけで、何もせずに爆睡してしまつたのだ。

（まあ、一晩だけのことだし、たいしたことば起つちゃこねえだろつが……）

半ば自分に言い聞かせながら、首にかけた小さな袋を引っ張り出す。銀地に紺の市松模様の入つた縮緬の袋で、もともとは亡き母が守り袋として作ってくれた、いわば形見の品であった。今は、そこに爪ほどの大きさの水晶玉をいくつも入れている。そのうちのひとつを取り出し、ふつと息を吹きかけると、たちまち手のひら大に膨らんだ。カイとリクの姿を信じながら、透明な球体に気を送る。こうすることと、本当に見たいものだけを、確実に映し出すことができる

はづだつた、のだが。

「う、そだろ……！？」

球体の中には、この部屋の景色が透けて見えているだけだったのである。

（まさか、疲れすぎて神通力出なくなっちゃった……！？）

恐る恐る、念ずる対象を変えてみる。すると、今度は、既に起き出して甲斐甲斐しく朝餉の支度をしているクウと、まだ寝台ですやすやと休んでいるカイの婚約者・ユイファの姿が、いずれもはつきりと映し出された。ということは、神通力そのものに問題が起つたわけではないのだ。

（だとしたら……何であの一人は映んねえんだよ！？）

考えられる理由は一つ。水晶玉が映し出せる範囲から出でてしまつたか、ティエンの神通力を凌駕するほどの何らかの力を持った者に、どこかへ拉致されてしまったか　だが、千里四方が見渡せるのだ、前者である可能性はまずないだろう。

（とすると、拉致説濃厚つてか？　……つづーか、まさかあのクソ親父の仕業じやねえだろ！な）

決してあり得ない話ではなかつた。父・竜神王は、カイが血を分けたもうひとりの我が子であることをいまだに知らず、「憎き人族のひよつ子王」だという認識しか持つていない。それゆえに、隙あらばカイを亡き者としてカムナギを我が物にしようと狙つてゐるし、

一度など、実際に刃を向けたことさえあつたのだ。その折には、ライもまだ相手が実の父親だとは知らず、全力を振り絞つて戦つたので、今も竜神王の左の手には、カイの短剣に刺された傷跡がくつきりと残つている。

(ただ……)

あの父のことだ、もし本当にそんなことをやらかしたのであれば、眠つているティエンを叩き起こしても、意氣揚々とその凶報告してきたはずだ。

(つてことは、幻術が使える別の誰か、か……?)

となると、それはたぶん「反・ハシム五世派」の者なのに違ひない。自分たちの陰謀はがくひいが万が一にも露見しないよう、特殊な結界を張つて、その中に一人を誘い込んだのではないだろうか。もちろん、その目的は、カイの命を奪い、リクを「新王・ハシム六世」に仕立て上げること……

(だとしたら……!)ひしひやーうんねえ!)

急いでティエンは窓辺に寄つた。まずは、昨日同様、風に姿を変えて、一路力ムナギへ向かおうと思つたのだ。

ところが、窓を開け放ち、頭に触れようとしたそのとき、とんとん、と扉が叩かれた。

「陛下。お困りましたでしょうか? 上かみ(つ国)の国王陛下が、朝餉を一緒にと……」

「……げ

あまりの間の悪さに、ティエンは露骨に顔をしかめた。けれど、舅殿のお招きとあれば、たとえ体調が悪かつたとしても断るわけには行かない つまりは、「ちょっと腹具合が悪いので廁に……とか何とか」まかして……といつ手も使えない、ということだ。

「わかった。すぐ参る」

白竜の代わりに黒髪黒田のコアン=カイ=ハシム五世に変化するへんげと、ティエンは身支度を整え始めた はるか彼方のカムナギに心を残しつつ。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

だが、本当は、ティエンはもつと竜神王を疑つてかかるべきだったのかもしない。そして、水晶玉を通じて相手に問い合わせてみるべきだったのだ そうすれば、少なくともカイの居場所だけは判明し、一緒にリクを助けに行けたかもしれないから。

「…………ああっ！？」

田を開けたとたん、カイは悲鳴を上げて硬直していた。

どうやら、傷の痛みのせいで、いつの間にか氣絶していたらしい。そこを、運良く救われたのだろう。よく見ると、傷もきれいに手当され、寝心地の良い寝台に寝かせてまでもらっている。

……のは、良いのだが。

(何故、その「救いの神」が、よりによつて……)

豪華絢爛な細工の施された天井にまで届きそつた巨大な体。

立派な顎鬚たてがみがたくわえられた、青銅色の角張つた顔。

鬚の如く長い黒髪の間に生えた、緑青色の一一本の角。

恐らく前の対決でカイにつけられた傷跡を隠すためなのだろう、

真っ黒な眼帯に覆われた左の目

どう見てもそれは、「竜人体」とでもいうべき姿となつた竜神王の姿にほかならなかつた。天空にあると伝えられし竜の国の帝王であり、カイの本当の父でもある男……

一方、カイはといえば、いくら半分は竜の血が流れているとはいへ、今現在の立場は紛れもなく「人族の王」であり、竜神王にとっては「敵国の将」でもあつた。おまけに、相手は、よもやカイが半人半竜で、かつ我が子でもあるなどとは夢にも思つていない。どころか、「生意氣にも自分に真っ向から立ち向かい、左目を傷つけました不届き者め……！」と、新たな憎悪まで燃やしているかもしないのだ。

(そんな、いわぐ因縁ありすぎな私を、どうして　　)

そう思いかけて、カイは、自分がまだちんまりとした竜体のままであつたことに気がついた。

(ということは、彼は私をただの竜の子どもだと思って……?)

その推測を裏付けるかのように、竜神王は、見えている方の目を、まるで孫に対する老爺の如く優しく細めてみせた。

「おお、田が覚めたか。傷が膿んで、三日三晩生死の境をさまよつておったのだぞ。どうだ、気分は？　何ぞ欲しいものはあるか……？」

青べ『ゴジゴジ』とした手が伸び、カイの鬱^{たてがみ}をわしゃわしゃと撫でる

「…………あやうつーー？」

カイは、再び悲鳴を上げていた。万が一、その手が角に触れてしまったら、自分は…………！

…………といひのが。

「じつした？　やのよつて怖がらずとも良いのだぞ」

慈愛に満ちた語りかけとともに、なおもわしゃわしゃと鬱を撫で続ける手は、確かにカイの一本の灰色の角に触れていた。

…………はずなの。」

カイの体は、相変わらず、ちんまつした仔竜のままだった。

「何故だ……」

思わずカイは咳きを漏らし……次の瞬間、愕然とした。その言葉が相手に通じてしまつたからではない。その逆だつた。カイの発した「発した」「つもりだつた」言葉は、文字通り「きゆるるん……」「こう」「音声」にしかならなかつたのだ。慌てて言葉を継ごうとするも、

「ああー、ああ るああ るああ るー……！？」

「おおそつか、腹でも減ったのかな。どれ、何か滋養のつぐもので
作りせよ。」

やはり、見事なまでに通じていない。恐るべく相手の耳には、カイ
の声は、赤子が発する意味を持たぬなんじ喃語（赤ちゃん言葉）のよつこ
しか聞こえていないのだろう。

（句と云ふことだ……）

果然と、カイは心でひとつうけた。

（私は……私は、いつたいたいがつになってしまったのだ……！？）

我が家は「さゆるる」と！？

結局、竜神王の庇護のもと、カイはこの場 天空城にどりあることとなつた。人に戻ることもかなわず、事情を説明する言葉すら奪われてしまつた状態では、それ以外に選択肢がなかつたのだ。

「ここは息子の部屋なのだが、今は誰も使つてはおらぬやえ、自由にしてよいぞ、さゆるるん」

今一度カイの頭を撫でると、竜神王は微笑んだ。

(やうか、この部屋はティーンの……)

思わずしみじみとカイは室内を眺め……ふと眉をひそめた。

(今、最後に何やら妙な言葉が聞こえなかつたか……?)

確か、「さゆるるん」とか……

(まさかとは思つが、それは……)

嫌な予感と共に相手の顔を窺つと、至極あつけらかんとした反応が返ってきた。

「何だ『さゆるるん』、変な顔をして」「さゆるーつー？」

完璧にカイは田を剥いた。

『嘘、じゃね……？ そげないつい外見しどこで、「やめぬるよ」？ あり得んがなほんま！』

驚愕と動搖のあまり、ウナバル言葉が口をついて出てしまひもつとも、幸か不幸か、それはやはり「きゅるわる、わるわる」といった音声にしかならなかつたのだが。

「ん？ どうしたきゅるるん。……ううか、もししゃいの呼び方が不満なのか？」

よつやくカイの心中を悟つたのか、龍神王が、カツカツカツと咲笑した。

「だが、しかたがあるまい？『きゅるるん、きゅるるん』ばかり言つて、名がわからんのだから。かと言つて、そこにも親からもらつた名があるのでどうから、いかりで名付けをするわけにも行かんだろう？」

「ああ……」

言われてみれば、確かにその通りではあるのだが……

そんなカイの困惑をよそに、龍神王はさつと家臣を呼びつけ、自分の食事とカイの分らしい粥の支度を任せた。

「おお、此ご真面目に煮えておるが。しかし、まだ少々熱いようだな。どれ、ふつ……ふつ……ふつ……つむ、こんなものだりが。ほれきゅるるん、『あーん』せこ」

「…………」

ひきん、と音でも立ちそつた勢いで、カイは固まつていた。

『な……な……何しよんぞ貴様！…』

通じないと知りつつ、再びウナバル言葉で叫んでしまう。相手が何をしたいのか、全くわからなかつたのだ。何故、自ら粥を冷まして差し出したりなどする？まさか、毒でも仕込んであるのではあるまいな……！？

「……何だ何だ」

粥をのせた匙を持ったまま、龍神王は苦笑した。

「だから、そのように怖がりすぎとも……儂を親だと思つて、存分に甘えて構わんのだぞ」

オ、ヤ……？

とたん、フツと体から力が抜けた。

(わづか……親とは、いつことをするものなのか……)

そういうえば、遠い記憶の中で、ウナバルの王太子が乳母ちのへにそのようなことをしてもらつていたのを見たような気がする。

……そう、「してもらつていたのを見た」だけ。

すべての者が自分に注がれていなければ気が済まなかつたのだろう、王太子は、乳母をはじめ、周囲の者たちがカイに少しでも関わろうとするとい、烈火の如く激怒した。だから、カイは常にほつたらかしにされていた。食事のときには、無造作に目の前に乳や菜の入った器が置かれて、それでおしまい。飲むのも食べるのも、すべて見よう見真似でひとりで覚えた。

それが、こんな年齢にもなって、このような形で、しかも、こんなにも慈愛に満ちたまなざしと共に、食事を与えてもらえる機会に恵まれると……無論、これとて所詮はかりそめの関係。何かの加減でこちりの正体がわかれれば、あっけなく霧散してしまつたぐいのものではあるづが……

「 もう……」

「み上げた何かと共に、ぐぐっと飲み下した粥は、どこか塩辛い味がした。

「おお、済まぬ済まぬ。わしが不用意なことを言つてしまつたから、かえつて親が恋しうなつたか」

「わざか的外れな言と同時に、ひょいと体が持ち上げられ、相手の両の掌に包みこまれた。

「よしよし、もう泣くでない」

わしゃわしゃと頭を撫でた太い指がまた角に当たつたが、依然としてカイは仔竜の姿のままだつた。が、今は、それがありがたかつた。むしろ、夢なら醒めないでくれとすら思つた。

「……おや、眠うなつてきたか」

おとなしくなつたカイを見て、竜神王はまた何か誤解をしたようだつた。

「良い良い。寝つくまでちゃんと抱つこしてあるから、何も心配は要らぬぞ」

ダッシュ……？ 怪訝に首をかしげたとき、体が相手の胸元に押しつけられ、ぎゅっと抱きしめられた。

（なるほど、親が子をこのように抱擁する」ことを「ダッシュ」と称するのか……）

そんなことも知らないほど、その手の経験とは縁遠かつたカイであつた。

（しかし、何やら不思議な気分だな……）

抱擁されたという経験自体は、ないこともない。各国要人との挨拶にはこの行為がつきものだし、ティエモンにも、落ち込んだときなど、何度も肩を抱いて慰めてもらつたことがあつた。

が、今覚えている感触は、そのどちらとも微妙に違つ。あたたかくて、心地良くて……強いて言えば、懷の中に通ずるものがあるだろうか。ただ、懷がふんわりと包み込むような心地良さなのに對しこちらは、がつしりと支えられているところ安心感に根ざした心地良さ、ところのカ……

「思ひ出すのア……ティエモンのやつも、かつてないようであつたわ

問わず語りの呴きが降つてきて、あ、ヒヨヒヨして泣いていた

すると、これが。

これが、親の 父親の……

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

次に気づいたときには、室内に日が燐々と差し込んでいた。心地良すぎて、いつしか本当に眠つてしまっていたのだ。

執務にでも出かけたのか、竜神王の姿はなかつた。それを幸いに、カイは布団を深くかぶつて自分で角を叩いてみた。けれど、相変わらず微塵の変化も起こらなかつた。

（本棚に、どうこうしたことなのだろう……）

天意といつものがあるのならば、何のために、自分にはこのよつな試練が……

体の痛みはほとんど引いていた。カイは恐る恐る翼を動かし、飛べると認識できたので、室内をあちこち見て回つた。

ティエンが暮らしていたときそのままの状態であるのが、衣装をしまつてある戸棚には、彼のものと思われる王族服が、きれいに洗濯された状態で掛けられていた。背の方に翼と尾を出す穴が開いているところがいかにも竜族の着物といった趣だが、仕様自体は詰め襟の上衣と細身の長袴の組み合わせで、大きさも含めて、カイが普段着用しているそれとさして変わらない。もし人に戻つても、これを借りれば何とかしのげるだろ？

続いて目に留まつたのは、壁一面にしつらえられた本棚だった。

（何なのだ、この蔵書の多さは……！）

しかも、帝王学はもちろんのこと、政治学、経済学から、民俗学や、カムナギを含む、竜族にとって外つ國にあたる國の本まで、

実際に多岐にわたっている。

うんうん唸りながら、適当に何冊かを引っ張り出してみたのだが、どれにも確かに読んだ形跡があった。紙の端の部分が折つてあったり、重要な部分に線が引かれてあつたり、時には細かい書き込みがあつたり……すると、これらは決して「書棚の飾り」などではなく、すべてティエンに読まれたものなのだろうか。

(こんなにも勉強熱心だったのか、ティエンは……)

全く知らなかつた カイの前では、そんな素振りなど全く見せたことがなかつたから。

カイとは違つて竜の姿と人の姿を自由に使い分け、幻術も使いこなせるティエンは、日頃から、王宮と巷ちまたを気ままに行き来していた。そして、そんな彼を、カイはいつも羨ましいと思っていた。あのようないい政治手腕を發揮できるのも、そうやって市井じせいを好きだけ見て回れるからなのだとばかり……

(しかし、それだけではなかつたのだ……)

それ以前に、こうして勉学を積み、王族としての基礎固めをしたからこそ……

(それに引きかえ、私は……)

ウナバルにあつたときは、確かに書物は読んでいたが、あくまでも、家庭教師が持ち込んできて、「お読み下さい」と言われたものだけにすぎなかつた。

人質ゆえのはばかりがあつて、書庫になど入れないゆえ……自分ではずっとそう思つていたのだけれど、もしかするとそれは、ただ

の言い訳だったのかもしれない。どうせ捨て駒として死に行くが、仮に生き延びられたとしても養父であるウナバル王の命に従うだけの「人形」にしかなれない運命ならば、必要以上の勉学などしても無駄だ。それよりも、目に見えて「強さ」が実感でき、時には稽古という形を借りて、あの意地悪な王太子に一矢報いることさえできる武術の鍛錬に精出した方がずっと良い。心のどこかで、そう考えてはいなかつたか。

一方、故国に戻つてからは、いきなりついた王位に慣れるのが精一杯で、読書どころではなかつた。……と、これも思い込んでいたのだが、その思い込み自体、実は間違つていたのではないか。

時間は与えられるものではなく、作るものだと聞いたことがある。勉学する時間とて、作ろうと思えばいくらでも作り出せたのではないか？ 例えば、これでもか、というほど毒見を重ねて、延々とした時間をかけて運ばれてくる食事をいささか苛立つた思いで待つている間であるとか、視察に出かける際に乗る輿こしの中で、「いくら暗殺の危険を避けるためとはいえ、少しは窓を開けて外を眺めたって良いではないか」などと不満たらたらに考えている間であるとか

……

「……何と、言葉も喋れぬのに本を読むのか、きゅるるんは！」

感じ入ったような声に我に返つたときには、既に窓の外は夕焼けになつっていた。どうやら、読書に没頭する余り、時間を忘れてしまつていたものらしい。

「明日からは、読みたい本があつたら、執務が始まる前に儂に言いなさい。棚から取つてから出かけるやえ」

相好を崩したまま続けると、竜神王はカイを手のひらにのせ、く

しゃくしゃと鬚を撫でた。

「しかし、よりこよつて政の本を選ぶとは……人を捨ててもなお、王としての矜持までは捨てておらなんだか」「さあ、ぬ……！？」

はじかれたように、カイは相手を見直していた。

(この男、今、何と……！？)

戻れぬ理由

「……これ！ これ待たんかコアン＝カイ！…」

「きゅるつ、キィイイーツ！…」

構わず甲高い警戒音を発すると、カイは相手に向かつて頭から突つ込んで行つた。

「キイツ、キイツ、キィイイーツ！…」

悔しい！

悔しい！…

悔しい……！…

最初からこの男は、こちらの正体を見抜いていたのだ。現に今、ぽろりと「ゴアン＝カイ」と口走ったのが動かぬ証拠。この分なら、人に戻れずにはいることも、とうにお見通しなのだろ？見通したうえで、「きゅるるん」と小馬鹿にした名などつけ、心中ではさんざん嘲笑つっていたのに違いない。

（それなのに、私ときたら、ほんの一瞬とはいえ、こんな輩に「父親のぬくもり」など感じて……）

あまつさえ、気を許して眠り込んだりまして……！

一本の角が熱を持ち、雷の力が溜まってきたのがわかる。

「キィイイイー——ツツツ！…」

さらに一聲叫ぶと、カイは一気にその力を放出し……バーン！といつ衝撃と共に、唐突に意識を手放した。

自分の発した雷に自らまで打たれてしまったのだと気づいたのは、再び意識を取り戻したときのことだった。

「……まつたく」

竜神王の苦笑する顔が見えた。

「存外、考えなしに突っ走るところがあるのだな……まあ、何しろ儂の子なのだから、しかたがないといえばしかたがないのだろうが」「きゅっ……！？」

「意識が戻らなかつた三日三晩の間、何度かそなたは人に戻つていたのだよ。竜であり、人でもある　おまけに、色を除けば十年前のティエンと瓜二つだ。認めぬわけには行くまい？」

驚愕したカイに向かつて、相手はあつさり種を明かした。それから、つと立ち上がり、手ずから茶を淹れ始めた。自分とカイの二人分ということなのだろう、円卓の上に大きな湯呑みと小さな猪口を出して茶を注ぎ、ひょいとカイをつまみ上げて、猪口の前にちょこなんと座らせる。そして、カイの目を覗き込み、再び苦笑した。

「何故、今までそのことを言わなんだか、と言いたげだな。いや、儂とて迷いはしたのだぞ。だが、そなたを『そなたと認めて』しまえば、立場上、そなたをここに留め置くわけには行かぬ　國王自ら『敵國』の王に必要以上の情けをかけたとあっては、臣民に對して示しがつかぬからな。それに……ふと思つたのよ。もしかして、そなた自身も『そなたではなくなること』を望んでいるのではないか、とな」

怪訝に、カイは首をかしげた。私では、なくなること……？

「人の姿になつたとき、そなたはしきりと咳いておつた。『自分が死ねばよかつた。あねさまの代わりに逝けば良かつた』と……そうそう、『このままティエンに王位を継いでもらつた方が、国のためにもなるのではないか』とも言つておつたか」

記憶をたぐるまなざしになつて、竜神王は続けた。

「何があつたのかは知らぬが、そなたは『人族の王・ゴアン=カイ=ハシム』であることに耐え難くなつていたのではないか？　そして、いつしか『人であること』 자체をやめたくなつてしまつた意識が戻つたとたんに竜から人へ戻れなくなつたのも、もしかするとそのせいかもしだれぬな。ほれ、ティエンが十年もの間、そなたに竜の姿ばかりしか見せておらなかつたのを覚えておらう？　ちょうど、あれと同じように……」

その表情が、ふとほろ苦く歪む。

「まあ、あやつも一度は自嘲しようとしたゆえ、そう思つだけなんかもしれぬが」

カイの瞳が見開かれた　彼自身も、その場には居合わせていたからだ。

記憶を失つていたティエンがすべてを思い出したのは、例の竜神王とカイの対決のさなかであつた。最初、竜神王は、自ら手を下すのではなく、神通力を使ってティエンの心を操り、彼にカイを倒させようとした。皮肉にも、そのとき加えられた刺激が記憶を取り戻

すきつかけとなつたのである。

そして、竜神王の言つ通り、カイに出会つてからその瞬間までの十年の間、ティエンは、九割方の時間を竜の姿で過ごしていた。カイの影武者を務めたり、街へ遊びに行つたり……といった目的で人に変化することはあつたが、それは、あくまでも「第三者に変化している」だけ。「ティエン自身」の姿を見せたことは、一度たりともなかつたのだ。カイにとつては、それは「ごく当たり前」のことであつたし、「以前のことは覚えていなかつたのだから」「白髪灼眼のままでは目立ちすぎると思ったのだろう」という頭もあつたので、さして気にも留めていなかつたのだが……

言われてみれば、ティエンも抱えていたのだった 「心の闇」 を。

地上界にあつた頃、竜神王は、幻術を用いて角や尾や翼を隠し、カムナギ王宮に程近い森で森番をして暮らしていた。妻・ナナリの父親がもともと森番だったので、その仕事を引き継いだのである。それに、森ならば、うつかり幻術が解けてしまつたとしても、そうそう誰かに見つかることもない。

二人の間にティエンが生まれたのは、結婚後七年が過ぎた頃、だつた。懷妊の兆候が表れたとき、夫婦はもちろん大喜びしたが、生まれてきたティエンを見て、一転、言葉を失つた。

サラハン大陸の人々は、天空界に住む者たちを単に「竜」と称しているが、厳密に言えば、そうではない。彼らもまた、もとはといえば「人」であり、カムナギとウナバルの国境に位置する山間の里に、小さいながらも一国を構えて暮らしていたのだ。

ただ、彼らは、生まれながらに変化や幻術や飛行といった特殊能力を持つた種族であり、寿命も百年単位と桁違いに長かつた。このため、他国の「持たざる人々」から恐れられ、徒党を組んで攻撃さ

れた挙句、故郷を追われてしまったのである。

四方を敵に囲まれ、逃げる場所は空の上しかなかつた。が、そこで彼らを待ち受けていたのは、地上に比べてはるかに過酷な環境だつた。いわゆる「竜」の特徴を持つようになつたのは、この環境下でも生きていけるよう、体が適応した結果だつたのだ。

それゆえに、彼らは「竜（族）」と称し称されながら、実際には、竜の姿よりも、今の竜神王の如き「角と尾と翼を持った人」の姿をしていることが多いつた。そして、高速で移動する必要や地上と行き来をする必要ができると、竜体に変じて空を飛ぶのである。

ところが、ティエンは、そんな竜族の赤ん坊とも、さりとて人族の赤ん坊とも違つていた。形としては人に近いのだが、髪の毛一本に至るまで全身真っ白で、額と背中と尾てい骨の、ちょうど角と翼と尾にあたる部分に妙に目立つ瘤ができている異形の体。人族の間でも竜族の間でも滅多に見ることのない真っ赤な瞳。額の瘤に触れてみると、竜体に変わることは変わるのはけれど、大人の親指ほどの大さしきかない。その後だんだんに、角が生え、尾が伸び、翼が生じ、竜体の方も、親指大から手のひら大になり、犬猫の大きさを経て、やがては六尺余りにまで成長することになるのだが、その時点では、そのようなことなど予測できるはずもなかつた。

『この子は、人の間でも竜の間でも生きては行けまい。私たちが守つてやらねば……』

そう誓い合つた夫婦は、以前にも増して、自分たち一家の存在を必死に隠し続けるようになつた。だから、ティエンが友だちを欲しがる年頃となり、たまに森に遊びにやってくる子どもたちを見て、「一緒に遊びたい」とせがむようになつても、頑としてそれを認めなかつた。

だが、幼いティエンには、その親心がわからなかつた。それで、

短絡的に思つてしまつたのだ この森を焼いて、その隙にここから逃げ出そう。そうすれば、自分もあの子たちと同じように「自由」になれるのに違ひない、と。そして、ハツになつたある日、とうとうそれを実行に移してしまつた。風の向きや強さも災いして火は瞬く間に燃え広がり、森の大半を焼き尽くした。

この火事の責任を取る形で、竜神王は捕縛された。と言つても、彼の親友でもあつた先代王ユアン＝ナスル＝ハシム四世は、彼の普段の熱心な働きぶりをよく知つていたので、せいぜい数日ほど拘留するだけで済ませるつもりでいた。また、よもやティエンが火付けの犯人だつたなどとは思いもしなかつたため、「父親が不在では何かと心細かるう」と、ティエンを母親のナナリともども王宮へ呼び、面倒をみるとこととした。

しかし、この氣づかいが裏目に出た。王宮に入る際、ティエンの姿を人目に晒しては、と、ナナリは彼を仔竜の姿に変えて懷に入れていた。このため、周囲の人間には、ハシム四世がナナリだけを迎えたようにしか見えなかつた。結果、「国王が妾を作つた」というまことしやかな噂が立つてしまつたのだ。

やがて、その噂は、王宮の地下牢につながっていた竜神王と、同じ王宮の最上階で暮らしていたハシム四世妃、双方の耳にも入つた。激怒した竜神王は脱獄し、ナナリを離縁して、ティエンを連れて天界へ戻つてしまつた。一方、ハシム四世のもとに残されたナナリは、嫉妬に駆られた王妃にあの手この手の嫌がらせをされて心身共にぼろぼろになり、カイを産んでもなく世を去つたのであつた。

『悪いのはすべて私なのです。私があんな短慮をしなかつたら、父上も母上も、きっと今でもここ人界にあつて仲睦まじく……』

心を操られた際、姿の方も竜人・白竜皇子に変えられていたティエンは、白皙の面おもてに苦悶を浮かべてそう呟いた。そして、ためらい

ひとつ見せずに短刀を手にし、自害する素振りを見せたのである。とつさにカイがその頭をひっぱたいて竜体にしてやらなかつたら、確実にそのまま命を絶つてしまつていたことだらう。

「あれは……本当は十年前からずつと、あやつが心の奥底で願つていたことだったのかもしれん」

ほろ苦い表情を崩さぬまま、龍神王は湯呑みを取り上げ、茶をすすつた。

「あのようなことをしてしまつたせめてもの罪滅ぼしに、必死に儂を説得し、コアンたちと和解させようとしていた。だが、とうとう叶わなかつた。それで、絶望してしまつたのだろう。しかし、たとえ半竜であつても、並みの地上人に比べたらはるかに丈夫な体だ、天界から落ちたぐらいでは死にはしなかつた。だから、代わりに過去の自分を自分で消してしまつたのだ。その結果、記憶が消え、ただの竜になつてしまつていたのだろうな。

なればこそ、儂は、正体不明の竜の迷い仔として、そなたを扱うこととしたのよ。あのときのティエンと同じように、今のそなたも、これまでの己の一切合財を捨てたがつておるのではないかという気がしてならなかつたのでな」

そうしておるうちに、そなたが再び人に戻る気力を取り戻さば、仇敵の首級くびを取るまたとない機会を得ることもできようし、と不敵に笑つて付け加える。しかし、それはあくまでも建前であつたろう。何故なら、その双眸には、いまだ「父の慈愛」が確かに宿つていたから……

「ともあれ、そなたのその反応からすると、ティエンとは違つて、記憶まで失つているわけではなさそうだな」

「どうやら、それを確かめるために、竜神王はあえて鎌をかけるようなことを言つたらしかつた。

「だとするなら、あとはそなたの心の持ちよう次第なのだろうまあ、実家に静養にでも来たと思うて、焦らず時を待つことだ」

「ぐり、とカイもうなずいて、ようやく程良く冷めた茶をすすつた。

かくて、それからもカイは、「迷い竜・きゅるるん」という立場のまま、天空城で暮らし続けた。

政のことも、挨拶ひとつせずに別れた形になつてしまつたリクのこと、気にならないと言つたら嘘になる。けれど、この姿のまま王宮に戻つたとしても、誰も国王コアン＝カイ＝ハシム五世だとは思つまい。それどころか、「よりによつて国王陛下のお住まいに『災いのもと』が現れるとは！」とか何とか言わされて、家臣・使用人総出で追い出されるのが闇の山だ。

一方、リクと行動を共にする道を選んだとしても、相手に迷惑をかけることにしかなるまい。このようなことになつてしまつた以上、リクを王宮に連れて行つて、次期国王として推挙することは不可能だ。ならば、リクは、本人が予定していた通り、商売を始めることになるだろう。それなのに、「災いのもと」がいつまでも傍にいては、商いにも大いに差し障つてしまつに違ひない。

朝になると、竜神王がやつてきて、約束通り、カイが鼻先でつついて「読みたい」という意思を示した本を出して行ってくれる。

昼間は、もつぱりその本を読んで過ごした。その中には、王位についたばかりの頃、宰相ハクロウに無理やり読まされたものも混じっていた。ある程度国王としての経験を積んだ状態で読み直してみると、以前は単なる文字列でしかなかつた記述が、驚くほどすんなりと、頭に といつより、心に落ちて行くのがわかつた。「ああ、あの案件はこの法をふまえて処理すれば良かつたのか」とか、「あの陳情は、このような見地からも受理してしかるべきものだつたのだ」とか……今さらそのように得心できたところで、果たしてこれを活用できる日は来るのだろうか、と時に暗澹たる思いに駆られることもあつたが、できるだけすぐに打ち消すように努めた。竜神王の言つ通り、人に戻れぬ理由が自分自身の気持ちにあるならば、そういうつた負の感情も持たないに越したことはない。

宵の口になると、竜神王が再び顔を見せる。執務はもちろん、夕餉も終えているらしく、その懐からは必ず小皿一杯分ほどの食べ物が出てきた。これが、その日のカイの夕食と、翌日の朝・昼の食事となるのだ。一見すると、「これだけ?」といつ印象なのだが、ちんまりした体のせいか、はたまた一日中室内にいてあまり動かぬせいか、あまり空腹感を覚えるということがない。この分量だけでも十分、時には余ってしまうほどだった。

「ちゃんと食べねば、治るものも治らぬぞ

皿に食べ物が残っているのを見るたびに、毎度毎度心配げに諭していた竜神王も、やがてその可能性に思い至つたらしく。

「そなた、体がなまつておるのだろ?」

カイの傷が完全にふさがると、そう言つて彼を懷に入れ、湯浴みに連れて行くようになった。

さすが竜族の王が使うだけあって、国王専用の浴場は、彼が竜体となつてもなおゆつたりと入れるほど広く作られていた。その、さながら大池の如き浴槽に、体を洗い終えたカイを放り込むのである。

最初は何事かと驚いたが、そこはカイも西国の育ち、泳ぎなら心得たものだ。というか、いつ、あの意地悪な王太子に、それこそ湯の中やら庭の池やらに沈められるかわかつたものではなかつたから、心得ておかざるを得なかつた、というのが本当のところだったのだが……

何にせよ、広々とした湯の中で泳ぎ回るのは、思つてはいた以上に心地良かつた。最初からカイを泳がせることを想定して沸かさせていたのか、湯自体もそれほど熱くはなく、前にリクと入つたときのように湯当たりを起こすこともなかつた。少しくたびれてくると、動きを止め、腹を上にしてふっかりと浮いてみる。揺れる湯に身をゆだねてみると、心にしまい込まれていたすべての憂い事が、すうつと湯に溶けて消えて行くような気がした。

そうして二月みつき近くが過ぎたある日、こつものよつて湯の中を泳ぎ回つてから、ふかりと水面に浮かんでみると、竜神王が、感じ入つたよつて言つた。

「いや、見事なものだな。古来、竜は川や水をつかさどると言われているが、まさに水の化身とも言つべき泳ぎぶりよ」

ひょいとカイの体をすべり上げ、耳元に口を寄せて、こわつと囁く。

「リクだけの話だが、ティエンは全くの金づちでな

「 もちろん…？」

意表を突かれて、カイは相手を見直していた。「あの」ティエンにも、苦手とするものがあつたのか……

「ほお、そんなにも意外であつたか」

そんなカイを鼻先まで近づけて、竜神王はにんまりと牙を見せた。

「まあ、あやつは弱みを見せるこ^トを良しとせんからな。

ただでさえ地上人との混血、しかも、そのせいだつたのか、体の成長も同年輩の者と比べてかなり遅くて……『父方の血筋が直系だ』というだけで次期国王になるとは生意氣だ』『貴様など皇太子でなければただのクズだ』などと、特に王位繼承権に近い親せき筋の者らに、やっかみ半分に言われては、随分といじめられてな。そんな連中を見返してやろうと必死に勉学に励み、武術や幻術の鍛錬にも精出し……そうして、連中にぐうの音も言わさぬ力を自力で手に入れたのよ。

あやつがそなたの目に『万能』のよう^に映るのも、いわばその結果。内実は、案外、そなたに侮られぬよう、懸命にあれこれと取り繕つてあるのかもしけんぞ　　実は水練が苦手だつたのだということを、ひた隠しにしていたのと同じようにな

「どうだ、少しばかり力が抜けたか、と、からから笑う。

「はい、おかげさまで」

素直にカイはうなずいた。実際、「少し」どころか、かなり気が楽になつていた。ティエンもまた、自分と似たような過去を持つていたのだ。そして、血のにじむような努力を重ね、そこから這い上

がって来た 決して「すいすいと要領良く」ではなく。

(そんな努力なら、愚直さだけが取り柄の私にもできるやもしけぬ)

諦めずにそれを積み重ねて行けば、あるいは……

「そりゃ、それは良かつた」

竜神王は、満足げにもう一度笑った。それから、彼らは同時に顔を見合せた。言葉が……通じた!?

「そなた、ちよいと角を触つてみい」

こたさか急いた口調で言つと、竜神王はカイを再び湯に浮かべた。

「いいなら、人に戻つたとて何も不都合はあるまい」

「い……いかにも……」

何しろ風呂の中である。いきなり全裸の人になつたとて、何ら違和感はない。しかも、竜神王は全くお付きの者を伴わずに入浴していたから、誰かに見咎められる心配もなかつた。

「で……では、御免」

ちよこんと頭を下げるとい、その姿勢のまま、カイは両方の角に手を触れた

……
が。

ぱんつ、という音ひとつ、風呂場には響かなかつた。

「……ひひむ」

ややあつて、竜神王が唸つた。

「何かがまだ足りんといふことなのだろうな」「御意……」

ため息をついて、カイも脱力した。たちまちぶくぶく、と沈みそ
うになり、慌ててぱちゅぱちゅと体勢を立て直す。

竜神王が風呂から上がつて着替え終わるまで、彼らは互いに無言
でいた。手拭いで体を拭いつつ、カイは、さらに何度も角に触れて
みたが、結果は同じであった。

「どれ、戻るか」

きゅ、と寝間着の帯を締めると、竜神王は、カイをひょいと懷に
放り込んだ。

「明日から、執務にも連れて行つてやる
「え……？」

またまた虚を衝かれて、カイは頓狂な声を上げていた。まるで世
間話でもしているかのように相手は言つているが、これは明らかに
ゆゆしきことだ。

「良いのですか？ いくら今は迷い竜となつてしまつていてはい
え、いつ『敵國の王』に戻らぬとも知れぬ私に、貴國の政の内情を
まつづけと

「戻らねば良いだけの話だらう」

「は……！？」

「まったく、どこまでもクソ真面目なやつよの、そなたは。普通ならば、むしろ敵国の内情を探れる千載一遇の好機と喜ぶだらうものを、そのように、いの一一番にわしに氣を遣うて……」

衣の上からカイを撫でて、竜神王は苦笑した。

「だが、そのような好男子だからこそ、再び敵に回すには惜しい。そこで、考えを変えてみたのよ。思えば、中つ国は既に『ティーンの国』のようなもの。ならば、そなたには、今後もずっとここへ留まつてもらい、正式に儂の第一子としてまわりにも紹介して、『この国の』王位を継いでもらつたらどうか、とな。

さすれば、人族の征服という我らの大義も果たせるばかりか、この国の王家も安泰。そなたにしても、無理に人に戻らなくとも良いいざとなつたら、『人の片鱗すら持たぬ、生粹の竜』という触れ込みにすれば良いだけの話だからな。むしろ、その方が民心とてつかみやすかるう。どうだ、双方にとつて良いことずくめではないか？」

「なつ……！？」

愕然と、カイは相手を凝視していた。

迫られし選択

記憶が甦つてからも天空城には戻らず、地上に骨を埋める決心をしたティエンに、竜神王は「人族と馴れ合つた罪により、竜族から永久追放する」と申し渡していた。もつとも、それは立場上そう言うしかなかったというだけのことだ、本音では、そんな形で息子の罪 罪いろいろな意味で をこつそり赦してくれたのだろうと、カイも、それにティエン本人も思つてはいるのだが……

「あれ以来、皇太子の座は空位になつておつてな」

戸口へ向かつてのしのしと歩きながら、竜神王は言葉を継いだ。

「皇太子がするべき公務は、代行という形で弟にやつてもらつておるのだが、あやつにはあいにく子がなくて、その先を引き継ぐ者がおらんのだ。さりとて、ティエンをさんざん侮辱したような者どもの誰かに、待つてましたとばかりにその椅子に座られるのもシャクで……」

親馬鹿だと笑われるかもしけんが、と竜神王は肩をすくめたが、カイは笑わなかつた。

自分が彼だとしても、同じように考えただろう。後継者に誰を選ぶかによつて、国の命運は大きく変わるからだ。親馬鹿ならずとも、信頼できぬ者になど引き継いでもらいたいはずはない。カイ自身にはあとを継がせるべき子はないが、例えば、半年もの間、のほほんと「巷での修業の旅」などにうつつをぬかし、今もこうして天空城で人に戻れる時を待ち続けていられるのも、影武者に立てたのがティエンだつたからこそであつて

「……あの

不意に嫌な」とに思い当たつて、恐る恐るカイは確かめた。

『「「」のままティエンに王位を継いでもらつた方が、国のためにもなるのではないか』とも言つておつたか』

『思えば、中つ国は既に「ティエンの国」のよつたもの』

ティエンに代理を務めてもらつていることは、カイの意識の中では既に当然の「」となつてしまつていたので、うっかり聞き流していたのだが……

「「」に来た頃に私が口走つていた、その、『わ言』と言つましょうか……それは、その、どの程度……』といふが、貴殿は、どこまで……』といふか……』

『くら高熱に浮かれ、朦朧としていたとは言え、自らの口から、今玉座に座つているのがティエンであると暴露してしまつていたのだとしたら。また、それ以外の國家機密に関しても、万が一、べらべらと喋り倒してしまつていたとしたなら……仮に人に戻れたとしても、王位に返り咲くどころか、その場で腹搔つ切つて全国民に詫びねばなるまい。

だが、すっかり血の氣の引いてしまつたカイの頭の上から降つてきたのは、あのからからとした哄笑だった。

「心配せずとも良い。先だつて言つた以上のことは何も聞いてはおらんよ。まあ、だからと言つて、全く何も知らぬというわけでもないのだがな。ただ、それを知つたのは、そなたの口からではない。自分の水晶玉を見ておつたからよ」

「水晶、玉……？」

言われて、カイも思い出した。ティエンも、小さな水晶玉を持っていた。それを持った者には千里四方が見渡せ、その千里の先からでも、対となる水晶玉を持つ者に自らの顔と姿を伝えることができるという、摩訶不思議な「竜の水晶玉」

「地上の動向に目を配るのも国王の大事な務めなのでな、折に触れてあちこちの国の様子を水晶玉に映しておるのよ。特に、各國の王が何らかの動きを見せるときにはな。

その姿を見れば、必ずと知れる　ほかの者には全くの同一人物にしか映るまいが、少なくとも生まれてから成人になるまでの間ずっと、父親としてティエンに接してきた儂の目はごまかせんよ。

して、今回の『取り替えばや』はどうやらの意思なのだ？　たまには玉座に座つてみたいというティエンの遊び心か……いいや、玉座に座つてあることに疲れたそなたを、あやつが兄として見かねた、といふのが正解かな」

「恐れ、入りまして」「ざいます……」

ちんまりした体を、カイはますます小ちく縮めた。

少々長話になりすぎたのだろうか、外から、湯当たりを心配する声がかかった。

「大丈夫だ、今出る」

大声で答えると、龍神王は衣服の上からぽんぽん、とカイの背を叩いた。

「先に儂の部屋に寄るぞ。今話した水晶玉を見せてやる

　ティエ

ンのものなどとは比べ物にならんほど大きくて、よく見える代物を

な

「水晶玉を……？」

驚いて、カイは相手を見上げた。確かに、興味はある。竜族の王者が持つ水晶玉とは、いかなるものなのか……

「しかし、それは、もしや門外不出の秘匿品では」

「どのみち、そなたに引き継ぐものだ。今から見ておいても構うまい？」

「は、はあ……」

……参ったな。

心中で、カイはため息をついた。どうやらこいつらの意思とは関係なく、竜神王の頭の中では、既にカイが後継者であると決定してしまっているようだ。

人に戻れるという確たる証がない今、それを否と突っぱねられる理由は、実のところ全くなかった。だいたい、どこにいようと、自分は所詮「代わり」なのだ。人界にあっては、先代王及び王太子の代わり。それが、「ティエンの代わり」になった。ある意味、それだけのことではないか。それに、今度はいきなり国王になるのではなく、まず日嗣ひつきの皇子みこから始めるのだ。経験を積む時間も、人脈を築くゆとりも、十二分にある。無論、特に後者については、決して容易な道ではないだろう。何しろ、敵たる人族の血が半分入っているのだから。しかし、それなら今までとて同じようなものだった。ウナバルにあつてはカムナギの、カムナギにあつてはウナバルの間者呼ばわりされ、陰口を叩かれて……それが、今度は「人族の」に変わるだけの話だ。

にもかかわらず、強烈な違和感が心をとらえて離さなかつた。自分は、ここにいてはいけない　あたかも警鐘の如く、そんな思いが明滅して……

『いやあ、あの若さで王位を継がれて、最初はどうなるとかと思つていたが……』

『まったく、あの男が国王になつてから、どうもやりにくくて困る。誰か、あいつに「中つ国の流儀」つてやつを教えてやつてほしいもんだね』

『やれやれ、三日も待たされて、やつと謁見の順番が回つてきたよ。前の陛下のときには、こんなことなんかなかつたのにねえ。あれかい？　言葉がよくわからなくて、はいもいいえも決めかねてるのかね。それとも、実はおつむそのものがトロいとか……？』

『何であんなのが王位についたりなんかしたのかねえ……それともあれかい、もしかして、前の陛下や王太子様が立て続けに亡くなられたのつて、あの男が』

『しつつ、滅多なことを言つもんじゃないよ……』

自らが思つほど、「いなければならぬ存在」ではないといつのに。

『おのれユアン=カイ=ハシム……！』

……むしろ

『あなたさえいなければ……あなたにここで死んでもらえれば、すべてがうまく行くのです……！』

むしろ……

突然、ふわりと体がつかまれ、懐から出された。大きな左手の上

にカイをのせると、竜神王は、反対の手でそつと彼の目元を拭った。

「めつ……面目次第もつ……」

恐縮して、カイは思わずくるん、と丸まつた。自分でも気づかぬうちに、涙してしまつていたらしい。

「何、恥じ入ることなどない」

竜神王は、しかし、鷹揚に微笑んだ。

「子どもは泣くのが仕事、思う存分泣かせてやるのは親の仕事それを怠ると、ろくなことにならん。現に、儂ら夫婦は、それを怠つたがために、ティエンを火付けに走らせるほど追い詰めてしもうた。まあ、そなたはもう子どもという年齢ではないが、見ていると、どうも子どもらしい子ども時代を送つてきていないようだからな。そして、それもまた、明らかに儂の責任だ」 儂さえ短気を起こさねば、そなたは最初から儂の子として生まれ、実の両親に思う存分甘え、兄と遊んだり、ときには喧嘩したりなどしながら、『ごく普通に』成長できたはずだったのだから……」

大きな両手が、カイをふんわりと包み込んだ。意識を取り戻したあの日と同じように、ぎゅっと胸元に抱き寄せられる。

「よう聞け、ユアン＝カイ。そなたはな、決して『いなくとも良い存在』などではないぞ。記憶を失つている間、ティエンは、そなたにあたたかく受け入れられ、友として遇してもらつておつたことに、どれほど救われておつたか……そもそもば、記憶が戻りしのちもそなたと共にある道を選ぶはずはない。ましてや、自らの利になるわけでもないのに、わざわざそなたの代わりを務めておるはずなどな

かろう？ 儂とて、このような形で再会できたおかげで、長年コア
ン＝ナスルとナナリに抱いておったわだかまりが解け、ようやくと
『まつとうな心』を取り戻すことができたのだ。それに……

しかし、そこで龍神王は言葉を切った。

「……この続きは、部屋に行ってからの方が良いな。何と言つても、
自らの目で確かめるのが一番であろうよ」

水晶に映りしもの

もう一度龍神王の懐に入つて、相手の執務室へ向かつた。やがて、人払いを命ずる声と共に、ギギイ……と古びた音を立てて扉が開く。

「もう出ても良いだい」

言われてカイは、ぴょこんと懐から顔を出し……息を呑んで目を瞠つた。

「これは……」

サラハン大陸全土、それにその周囲を取り囲む海までもがそこにあつた。正確には、部屋の半分を占めようかというほど大きな大きな水晶玉の中に。

夜のこととて、全体的に薄暗くはあるのだが、ヘキギヨクとカムナギの王都は、恐らく繁華街の明かりゆえであるが、かなりはつきりと見て取れる。西の方のウナバルに至つては、どうやらまだ日暮れの時刻であるらしく、街も村も海も美しい夕焼けに彩られていた。

「この玉はな、普段はこうして広域を俯瞰して映し出しておる。普通の水晶玉が映せるのは、よく言われておる通りだいたい千里四方だが、この玉に限つては、時間と天候に恵まれれば、海の向こうの、そなたらひとつでは未知の島々まで見ることもできるだい」

誇らしげに龍神王は胸を張つた。

「そして……このよくな使い方もできる」

両手の指をいくつかの形に組み合わせて印を結ぶ。再びカイは息を呑んだ。映つていた大陸の一部が、どんどん拡大され始めたのだ。

「上へして見たいものを念ずるとな、そこに焦点が合ひよつになつておるので」

そう説明を受けているうちに、見たことのある建物がぐんぐんと近づいてくる。住み慣れた　　と、ようやく思えるようになつてきた　カムナギ王宮であった。

王宮にはいくつか庭園があるのだが、宮殿の一階の屋根の上にも小体な庭が作られていた。建物正面から見ると裏側にあたるそこは、最上階にある国王とその家族の居室から直接出られるようになつていて、いわば、彼らの専用庭と言つても良かつた。

その「裏庭」に、松明の灯に照らされて、二つの人影が浮かび上がっていた。既に執務を終えたのだろう、王冠を脱ぎ、くつろいだ部屋着姿になつているカイそつくりの男と、その腕に抱かれて散策を楽しんでいる幼い少女　　カイの許婚、ヘキギヨク王の一の姫のユイファであった。

透き通るような白さの肌に艶やかな黒髪、愛らしく整つた顔立ち。弱冠五歳にして古今東西の書物のほとんどを読んじてしまったという聰明さ。まわりの者は、一様に「まさに三國一のお嫁様ですね」と口を揃える　　「あと十五年も経てば」という暗黙の条件付きではあつたが。

こののような場合、普通は婚約のみ整えて、婚儀は姫が年頃になつてからあらためて執り行つものなのだが、ユイファは婚約の時点でカムナギにやつて来て、そのままこちらに留まつた。これは彼女の実家であるヘキギヨク側の希望で、実のところ国力はあちらの方が若干勝つてもいたので、「そうですか」と受け入れるしかなかつた

のだが、ひょんなことからその理由が判明した。

コイファは、盲目だったのである。しかも、見えない目を補うべく、まわりの風景や人の気持ちを心で感じ取るという人外の力まで備わっていた。コイファ本人の話では、それゆえに、故国では二親にすら「気味が悪い」と遠巻きにされ、たまに口をきいてくれたかと思えば、

『田が見えない』ことと、奇妙な力を持つていることは、誰にも言つてはならぬ』

……つまり、ヘキギョク側としては、政略結婚にかこつけて、ついの良い厄介払いをした、といったところだつたのだひつ。

そんな彼女の境遇は、カイのたゞつてきたそれと、どこか通ずるものがあった。だから、カイは

「まだ陛下はお戻りにならないのね、ティエン」

コイファの澄んだ声が、カイを現実に引き戻した。

「いやあ、姫さんの『心眼』にはかなわねえな

あはは、と笑つて、ティエンは腕に抱いたコイファを揺すり上げた。客人を通すこともあるほかの庭とは違つて、裏庭には国王一家以外の者の立ち入りは禁じられ、警備の者も、建物の窓越しに目を配つているだけだ。それゆえに、コイファは遠慮なく「本物のカイ」の居所を尋ね、ティエンも誰憚ることなく「国王陛下の仮面」を外したのだろう。

「結構気合い入れて、あいつっぽい『氣』をまとつてみたんだが、

やつぱバレバレか

「だつて、ティエンの『氣』には邪念があわざるんだもの、すぐわかるわ」

ませた口ぶりで返して、コイツアはふふふ、と笑った。

「眞面目な陛下の眞似ばかりしていて、息が詰まつてこるのでしょう? わたくしは構わないから、たまには街で遊んで来たらいいのに」

「……おーおー、あんたほんとにまだ七つ（数え年）の祝いもまだなのかな?」

ティエンの目が丸くなつた。

「ひつや、カイのヤツと十五近く離れてて逆に幸いだつたかもしがねえな。下手に年齢としが近かつたら、間違いなく尻に敷く」

「何ですって?」

「い、いえ、何でもないつす……」

……確かに、一理あるかもしれない。

「……しつ、しつかしアレだな、ほんとじゅうがねえよなカイのヤツも」

旗色が悪くなつたティエンは、ビツやからカイを悪者にすることで難を逃れるつもつらしご。

「あれほど『半年経つたら戻れ』つて念押ししたのによ。いつたいどいをほつつき歩ごてんだか……」

すると、コイファの表情が、スッと変わった。否、厳密には、「なくなつた」思わずカイは龍神王の懐を飛び出し、玉を覗き込んでいた。覚えがあったのだ。それは……その顔つきは、かつてのカイのそれそのものだつたから。どのみち、望んでもかなえられるわけなどない　　そう自分に言い聞かせ、何もかもを諦めてしまった末の無表情……

「大丈夫。さみしくはないわ」

むしろ自分自身に言い聞かせるように呟くと、コイファはいつも持ち歩いている熊のぬいぐるみを、ぎゅ、と抱きしめた。

「いつも、カイと　」この子とお話ししているから、さみしくはないの」

ゴン、と水晶玉に頭がぶつかったのにも構わず、カイは身を乗り出していた。ティエンは、決してコイファに「さみしいのか」と聞いたわけではない。にもかかわらず、自然にそのような言葉が出てきた　それは、本当はさみしくてたまらないのだ、と暴露しているのと同じことではないか。

それに、カイが旅に出る前まで、あの熊には名などついていなかつた。

『わたくしの大事なくまちゃん』

確かにコイファは、そう呼んでいたはずだ。だが、今は「カイ」と自分と同じ名をつけて……

(ひょっとして、コイファはあの熊を私に見立てて、さみしさを紛

らわしていたのだろうか）

それほどまでに、私を……私の帰りを……

ズキリと胸の奥が痛んだ次の瞬間、さらには、とどめの一撃が飛んできた。

「それに、陛下は約束して下さったもの　わたくしを守って下さるつて」

だから、少しごらい遅くなつても、きつとこへ帰つてきて下さるわ。そう付け加えて花が咲いたように笑つたユイファを、果然とカイは見つめた。

（そう、だつた……）

『田のことをカイに知られたとき、ユイファは、

『わたくしは……実家に帰されてしまうのでしょうか』

と不安もあらわに尋ねてきた。「帰されてしまう」「帰れる」ではなく、彼女にとって、故国へ戻ることは、決して喜ばしいことではなかつたのだ。自分を化け物呼ばわりし、心中ひそかに恐れ蔑む人々と再びまみえねばならない。ましてや、一度破談となつた娘を再びもらつてくれるような国はそうそうないだろうから、恐らくそのまま宮中に幽閉されるか、あるいは病死と見せかけて……

だから、カイはきつぱりと請け合つた。

『大丈夫だ。このことは誰にも漏らさぬ。たとえ誰かが知つたとし

ても、何も心配はない。この手で、必ずそなたのことは守つてやるから。だから、もうそんな顔はするな。安心して、ここに頼つて良いのだぞ』

そうだ。

そうなのだ。

あれは、決して「安請け合い」などではなかつた。あのとき、ライは心底から思つていたのだ。彼女を守れるのは自分しかいない、と。似たような境遇を持った自分だからこそ、誰よりも共感してやれる。同じ孤独を知つていて自分だからこそ、誰よりもその孤独を理解し、癒してやれる、と……

どんなに政に精通したティエンにも、「本当の王家の血筋」を継いだりくにも、これだけは、決してできはしない。なのに……それなのに、何故自分はこんなところで蹴躡いているのだ。ユイファの孤独を埋めてやるどころか、あんな哀しい顔までさせておいて、さも自分ひとりが居場所を失つた不幸者であるかのように嘆き悲しみ、拳句にこのようになっていたらくにまでなつて……！

「……竜神王、殿」

水晶玉の上で、カイは両の拳を握りしめた。

「申し訳ありません。私は……私はやはり、ここに留まるわけには行きません。帰つてやらねば……たとえどんな姿であつたとしても、たとえ再び王位につけなかつたとしても、帰つて彼女に深く詫び、あの約定を果たすことだけは……！」

答えは返つてこなかつた。代わりに、ふあさり、と背中に何かが

掛けられた。ティエンの上衣であった。

「まったく……」ついさきには幻術で衣服のひとつも出せないにせんと、田のやじ場に困るだらう。「

その上衣をさらにつかりとカイに着せかけ、あちこちを整えながら、竜神王は嘆息した。

「本当なら、その稽古もつけてやりたいところだが……それでは、あの姫君をますます待たせることになってしまつからな。ま、ティエンにでもきちんと教わつておくことだ

「え……？」

カイは田をぱぱくりさせ……あらためて自分を顧みて、さらに仰天した。ちんまりとしていたはずの両腕が、元に戻っていたのだ。否、腕だけではない。浅黒い胸板も、武術の鍛錬の成果でハツに割れた腹筋も、上衣からはみ出す形ですらりと伸びた両脚も……

「ほれ、ちゃんと鏡でも確かめてみい」

顎をしゃくって、竜神王は、水晶玉の反対側に設えられた姿見を示した。

「そのようなものを見てしまつては、正直、ますます手放し難いのだがな」

「は……？」

怪訝にカイは問い返し……姿見を振り返つて、またまた驚愕した。

父との別れ

「行きなさい。そなたの言う通り、そなたの居るべき場所は、ここではない」

姿見に映つた竜神王が、深くうなづいて言い切つた。

「その姿なら、自力で地上にも戻れよう」

……そう。カイは、厳密には、人に戻つたというわけでもなかつたのだ。姿見には、二十年間見慣れた人としての自分の顔が映つていた。けれど、その額の生え際あたりには、以前はなかつた灰色の角が一本、によきつと突き出でている。上衣の裾からは、黒くて長い尾がしゅつと伸び、背中に開いた穴からは、大きな黒光りする翼が一対、これも伸びやかに広がつていた。

「あ、あの……」

「なあに、ティエンだとて、それと人の姿とを使い分けておらう？ その稽古も、あやつにつけてもらえば良いだけのことよ」

戸惑いを隠しきれないカイを、竜神王はあつさりと笑い飛ばした。

「それとも何か、ついさつき、『どんな姿になつても良いから戻る』と言つたのは嘘だつたか。ならば、やはりここに残つて儂のあとを継ぐか？ 今のそなたならば、もはや誰ひとりとして異論など」「いいえ、それだけはっ！」

ぶんぶん、とカイはかぶりを振つた。ええいままよ、とばかりに、先ほど竜神王がやつていたのを真似て指を組み、人の姿をした自分

を必死に頭に浮かべてみる。とたん、ぱんつ、とこづきと共に、角と尾と翼が消え失せた。

「……ほお。やればできるではないか」

竜神王が、にんまりと牙を見せた。

「やはり、気の持ちようの問題であつたな。戻りたい、あの姫君を守つてやりたいといつ氣持しが、迷いを凌駕し、新たな力をそなたに与えたのでありますよ」

「御意にござります」

素直に、カイは首肯した。

「それ」……父上にも、血信を与えていただきましたゆえ

一瞬、沈黙が流れた。

「そなた……今、儂を父と呼んだのか？」

ややあつて、竜神王が確かめるように問いかけた。

「こんな儂を……一度は、そなたに刃さえ向けた」

「三月の間に、一十年分の御心を掛けていただいたのです。これで父上をお呼びせねば、天罰が当たりましょ」

相手の自責にかぶせるように言葉を継ぐと、カイは微笑んだ。それから、あらためて相手に向き直り、深々と頭を下げた。

「こんこんとお世話をになりました。それに、本当に申し訳ありません

んでした。せつかくあれこれ心配いただいたといふの」「

「ああ、あれはただの試みよ」

「試み、でござりますか……？」

「左様。ああでも言えば、さすがのそなたも尻に火がついて人に戻る気になるかと思つてな、試してみただけのこと」

ふん、と竜神王は肩をそびやかした。

「だいたい、儂はまだ後継者が必要なほど^じ年齢ではないわ。あと五百年は現役であるつもりゆえ、万一気が変わつたとしても、しばらくは譲つてなどやらんぞ」

小さくカイはふきだした　そんなことを言いつつ、一向にこちらを見ようとはせず、あまつむえ、しきつと目をじぱじぱさせてまでいるのがよくわかつたから。

空を飛ぶためにはらためて竜人の姿となり、衣服も上下とも整える。竜神王に導かれて天空城の門まで出てみると、空はほとんど雲ひとつなく晴れ渡つていた。月明かりと、例の裏庭をはじめ城内各所に焚かれた松明のおかげで、帰るべき王宮の場所も十分に視認できる。

そんな下界の様子と門柱の上の風見鶏の両方に目をやって、竜神王が断じた。

「つむ、この天候と風の強さなら容易に下界まで降りられよう。あとは風向きがつまく変われば、瞬時のうちにあちこちへ帰れるはずだ。では……」

続けかけた声が、ぐつと詰まる。ゴホン、と咳払いして、竜神王

は顔をそむけた。

「何と……！」からも、かみなかしも上中下三國が一望できるとほー。」

あえて気づかぬふりをして、カイは話柄を変えた。

「水晶玉を通しての眺めも素晴らしいものでしたが、」いづして直接眺めるのも、また格別ですね」

すると、思いがけず、はずんだ声が返ってきた。

「そうであるひー。幼き頃、初めてこのさまを見たとき、実に美しいと思つた。ずっと、ただ飽かず眺めていたいと……眺めるだけで十分だ、とな。それゆえに、『大義』を振りかざしてこの世界を攻めんとする父親の心が理解できなんだ。一度は地上に下つたのも、そのためよ。自分自身の不徳でコアン＝ナスルに私怨を抱いていた間だけは、そんなことなどすっかり忘れておつたが……」「

再びこちらを振り返つた黒い眼まなこが、まっすぐにカイを射る。

「繰り返しになるが、すべてそなたのおかげぞ。そなたと再会し、それをきっかけとして、過去のわだかまりが完全に消えたからこそ、また昔のような心を取り戻すことができた　まじと、感謝しておるぞ。

案ずるな、儂の目の黒いうちは、決して軍部に勝手な真似などさせん。その代わり、儂の命数が尽きようとしたそのときには……今度こそ、ティエンと共にここに戻り、儂のこの意思を継いではくれぬか。竜族の寿命は長いゆえ、その頃には、そなたらも、地上人の間にどどまつていては何かと不都合にもなつてくるであろうしな。そなたは生真面目で、まっすぐな心を持つた努力家だ。そして、

ティエンは柔軟な思考を持ち、人心掌握の技にも長けてある。それらを両輪として、ぜひ竜族と人族との架け橋となつてほしい。この通りだ

驚きのあまり、とつさに返事が出てこなかつた。あの誇り高き竜王が、自分のような小童相手に、地につくほど頭を下げている……

「どうか……どうか面をお上げ下さい、父上」
おもて

その手を取つて、カイは言った。

「父上のお気持ち、しかと承りました。その約定、必ずや果たしに参ります」

「まことかー？」

「はい。一言ばいざいません」

それどじろか、願つてもない話だとさえ思つていた。五百年……
は誇張であるにしても、この分なら、「そのとき」が来るのは、あと五十年は先だろう。その頃には、カイも人としては老齢の域に達しているはずで、周囲からは「いい加減に引退して下さい」などと、それとなくほのめかされやらしているのではないか。ユイファアとて既に孫のひとりや二人いるような年齢で、「守つてやる」必要など塵ほどもなくなつてしているのに違ひない。

その機をとらえて、政の舞台からこつそり姿を消し、天界へと上つて、今度は竜神王の父の意思を継いで、人と竜との架け橋となる。老後の過ごし方としては、まさに理想的だと言えよう。それに、何より「ティエンと共に」と言つてもらつたのが嬉しかつた。やはり父は、心の底ではとつくにティエンを赦していたのだ。そして、その行く末をこつそり心配してゐた カイに対してもうだつたように。

風見鶏が、風の流れがカムナギ王都の方向に変わったことを告げた。

「せ……」

言葉少なに促すと、父は、またしてもくるりと後ろを向いた。ライは、それを咎めなかつた。例によつて、こみ上げてくるものをこらえているのだろうと察しがついたから。

「では……父上も、お達者で」

今一度頭を下げる、カイはバサリと翼を広げ、地面を蹴つて風に乗つた。このよつに大々的に空を飛ぶのは初めてだつたが、風の流れをうまく見計らつたおかげか、妙な方向に飛ばされることもなく、ぐんぐんと見慣れた王宮が近づいてくる。

(ゴイファ、ティエン……今帰るぞ!)

それに、リクにも謝らねば 黙つて急に消えてしまつたことと、それゆえに、きっと相当な心配をかけてしまつたであらうことを。

(ティエンとゴイファに挨拶を済ませたら、さっそくリクの行方を追つてみよう)

「の前会つたときの様子を考えると、ティエンはあまり良い顔はしないだらうが……

(そうだ、先ほど父上の水晶玉を拝見させていただいたとき、リクがどこで何をして居るのかも確認しておくれのだった……)

ちらりと後悔が心をよぎる。だが、たとえそうしたとしても、恐らくは無駄であつたろう。いみじくもティエンが推測した通り、竜の王者の神通力をもつてさえも見通せないような場所に、リクは幽閉されていたのだから。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

何者の力も及ばぬよう、幾重にも張られた結界

その内側に作られた小部屋に、リクは横たわっていた。この二月みつきの間、ずっとそうして寝かされていたのだ。腕には太い注射針が刺さり、眠り薬と栄養補給の薬が流され続けていた。

口から食べ物を摑つていないせいか、頬はこけ、唇は真っ青を通り越して紫にすらなっている。その顔が、不意に悪夢でも見ているかのように歪んだ。

「ち、が……カイは、そん、な……うああああっ……」

引き裂かれるような叫びと共に、背中が弓なりにのけぞった。まるで雷にでも当たったかの如く、びくん、びくんと体が痙攣する。

「まつたく、見かけ以上にしぶといやつよ」

ぐつたりとなつたリクを見下ろして、ぶつぶつと文句を言ったのはドウタクであった。この三月みつきの間、彼は何度となく、催眠状態にしたリクの心に侵入し、術をかけ続けてきた。無論、リクを思うままに操り、一日も早く、王位を篡奪させるためである。ところが、

毎度毎度この調子で、術 자체を拒絶されてしまうのだ。「罰」として、そのたびに苦痛を与えるようにもしてみたのだが、結果は同じであった。

「しかたない。もっと強い『術』を施してみるか」

続けてそう呟くと、竜魔王のそれによく似た印を結び、念をこめる。とたん、再びリクの口から絶叫が上がった。絶叫は、今度は間断なく半刻ほど^{とき}続き……それが止んだとき、ようやく茶色い瞳がゆっくりと開いた。

「我は、リク＝ナスル＝ハシム六世」

唇から、うつろな声が漏れる。

「現国王コアン＝カイ＝ハシム五世は、祖父コアン＝ナスル＝ハシム四世と、父コアン＝リク王太子を毒殺し、母コナ妃を斬殺せし仇敵なり。我の最大にして崇高なる使命は、これを打倒し、必ずや力ムナギ王家を『正統なる血筋』に戻すこと……」

国H、帰還す。

夜風がすうっと吹き過ぎて、コイフアが小さくしゃみをした。

「もう入った方が良さげだな」

彼女を揺すり上げて、ティエンは叫んだ。

「『』みんな、ほんとは散歩なんつーのは毎回にするもんなんだらうけど……」

「わかつています。昼間はお仕事があるのでもの、しかたがないわ」

「ひこり笑つて、コイフアは答えた。

「それに……お仕事の合間にま、陛下のことも捜してこるのでしょう？ 本当はとっくに王都みやこへ戻つてきていらっしゃるはずなのに、全然お城に戻つてらつしゃらないから……そういう、そういう言えば、リク様つてどなた？ その方のことも、一緒に捜してこらぬのよね？」

「あー……」

片目をつぶつて、ティエンは首の後ろを搔いた。まさに「おつしやる通り」だった。下手をすれば王室転覆とカイ自身の生命の危機を呼びかねないだけに、やはりどうしても放置してはおけず、自分なりに、竜の能力やら独自の情報網やらを駆使して、一人のことを捜し回っていたのだ 残念ながら、全く成果は出ていなかったのだが。

「ほんと、姫さんが相手じゃ、何の隠し事もできねえな」

「いいのよ、わたくしを心配せたくない黙つていたのでしょ？」

「これまた鮮やかに看破して、コイファはもう一度こいつした。

「でも、たぶん、陛下のことそもそもう搜さなくて大丈夫だわ」

「へ？」

ティエンは怪訝に聞き返し……次の瞬間、ぶつたまげた。

「でええ～～っつー？」

雨雲ひとつかかるといいといふのに、夜空を貫いて雷が落ちてきたのだ。

「危ねえつー！」

とつさに伏せて、ユイファをかばう。

(あんなの食らつたら、ひとたまりも……ね、え……！?)

ところが、予想に反して、物音ひとつ起こらなかつた。雷　だと思われた光は、むしろ、ゆっくり、ゆっくりとこちらに下りてきて……ばさり、と羽音を立てて目の前に降り立つた「それ」を、六のあくほどティエンは見つめた。

「おまえ……カイ、だよな？」

その証拠に、顔はカイ本人のものにほかならない。が、頭には角が、背中には翼が生えていて、立派な尾までついている。これは、まさか……

「まさか、仮装大会にでも出てたとか」
「……貴様にだけは言われたくないわ！」

思いつ切り、カイは仮面になつた。

「自分で、『素』の姿は早い話がこれの色違ひではないか。だいたい、久方ぶりの再会なのだと？ もうと氣の利いた言いようはないのか」

「ねえな」

にべもなくティエンは片付けたが、無論、それは方便だった。本当は、うまく言葉が出てこなかつたのだ。「何やつてたんだ今まで！」とか、「心配したんだぞ！！」とか、「どんなわけで、いきなり竜人化なんかしちまつたんだよ！？」とか、心中では、あれもこれもと渦を巻いているのだけれど、いざ口に出そうとすると、その手前で引っかかるつてしまふ、というか、胸が一杯になつてしまふ、といづか……

「どうされましたか、陛下！？ 何やら妙な光も見えたようですが……」

建物の方から、警備兵の声がかかつた。

「あ、いや……何でもない！」

とつさに応じたのはカイだった。そのまま目を閉じ、指を組んで何事か念ずる。ほお、とティエンが感嘆した。カイの体から、角と翼と尾が瞬時のうちに焼き消えたのである。しかも、身に着けていた物まで、ティエンが纏つているのと全く同じ部屋着になつっていた。

「随分な『進化』つぱりじゃねえかよ」

「ああな。これも父上のおかげだ」

「じくへ自然な動作でユイファをティエンから抱き取りながら、カイは言つた。

「ふうん……」

何となく相槌を打ちかけて、ティエンは眉をひそめた。

「ちよつと待て。おまえ、今『父上』ついたー？」

黄泉の国に行つて先代王ハシム四世に会つていた、とでも言つながら話は別だが、そうでないとするならば、それは、つまり……

「おまえ、親父んとこひつたのか？ 何でまた……つづ一か、聞いてねえし！！」

がつくつと肩を落としたのは、こつの間にやら隣で「許婚たちの喜びの再会の図」が大々的に展開されていったからであった。

「お帰りなさいませ、陛下ー。」

「ただいま、ユイファ。長いこと留守をして、本当に申し訳なかつたな」

「いえ、ユイファは、陛下がご無事でお戻りになられただけで十分にござります！ しかも、あんな立派なお姿にまでなられて……ええ、わたくしも、心眼でぢやあんと『見られ』ましたのよ？ もう元に戻られてしまつたなんて、本当に残念だわ。翼とか尻尾とか、ぜひとも触れてみたかったんですけど……」

「何と、あの姿をそのよつに……嬉しいぞ、コイファ。まったく、どこの阿呆とは大違いだ。とはいへ、ここでは人目について騒ぎにもなりかねない。あとで、いくらでも見せてやるつぞ」

「まあ嬉しい！ では、わたくしのお部屋で……あ、でも女官たち

に見られるのもまずいのですよね？ そうしたら、わたくし、夜中にこつそり陛下の御寝所に忍んで 陛下？ どうされたのですか

陛下？ お鼻から血が

「いや、これは、その……も、問題ない」

「……なあにが『問題ない』だよ」

幻術で姿を消しつつ、ティエンはぼそりと突っ込んだ。

(十七ならともかく、七つ前のガキに「夜中に御寝所に忍んで」と
か言われたぐらじで鼻血なんか出しあがつて……)

しかも、せりげなく「ビジギの阿呆」と形容されたような気がしたのは空耳だらうか。

(つたく、そいやつて姫さんに鼻血拭いてもらつてゐるその顔こそ、
よっぽど阿呆つ アホ 面ツラじやねえかよ………)

だが、そんなティエンの内心をよそに、二人はすっかり彼らだけの世界に入つてしまつていた。

「……まあ、全然止まらないわ！ どうしましよう、このままずっと血が出続けて、陛下がお亡くなりになつてしまわれたら………」「何を申すかユイファ、この程度で私は死んだりはせん。だいたい、そなたを置いて死ねるわけなどなかろうが。ずっと守つてやると約束したのだからな」

「陛下……！」

「コイファ……！」

(……あーあーあーあーもうー。)

盛大にため息をついて、ティエンは天を仰いだ。

(勝手にやつてろ馬鹿夫婦つ！…)

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

「……しつかし、まさかあの親父がおまえの命を助けるたあな」

カイの部屋に戻つて一通り話を聞くと、ティエンはあらためて目を丸くした。

「ああ。要するに、良くも悪くも情の濃い方なのだろうな。それゆえ、先代王陛下と母上の一件では烈火の如くお怒りにもなったのだろうが……その点、今回は、私がちんまりした仔竜の姿をしていたせいもあつたのだろう、まるで孫を溺愛する祖父様のようであつたぞ」

その溺愛ぶりを思い出したのか、カイは小さく苦笑を漏らした。彼の腕には、相変わらずコイファが抱かれている。今までよほど気を張つっていたのだろうか、城内に入ろうと歩き出してすぐにコイファは寝入つてしまつたのだ。いくら声をかけても搖すつても起きないつえに、無理に引き離そうとするとかえつてぎゅうつとじがみついてしまつので、結局ここまで一緒に連れてきたのであつた。

「どうやら、執務室の水晶玉にて、息も絶え絶えになつていい私の様子をご覧になつたらしい。そして、すぐさま駆けつけて下さつたのだ。てっきり、あれは女性との連絡に使うものだとばかり思つていたのだが、違つたのだな」

「嫌味かおい！」

たちまち、ティエンは渋い顔になつた。

「俺だつてあれだ、声かけた女の子たちが困つてねえかな、とか、さみしい思いしてねえかな、とか、隨時あれで確認してだなあ」

「それはそうと、リクのその後の行方のことなのだが

「無視かよ！」

ますますティエンは渋い顔になつた。その顔のまま、鉄瓶に入つていた茶を湯呑みに注ぎ、ずずず、とすする。

「つづーか、俺は、おまえら一人、一緒にいるもんだとばっか思つてたんだ。で、あの坊主を利用しようとしてる連中に、二人まとめて拉致されたんじゃないかつて……だけど、水晶玉には一向にそれっぽいもんなんか映んねえし、聞き込みしてもなしのつぶてでさ。ただ……」

「ただ？」

「あ、やっぱ教えねえ。そうだな……さつきの嫌味の件と、それから、この三月^{みつき}、さんざんひとに心配かけた件について、土下座して詫び入れるんだつたら話してやってもいいかな」

「はあ？ 何やそれ

今度はカイが、ウナバル詫り丸出しで顔をしかめた。しばしの間、彼は何事か考えるように視線を巡らしていたが、やがて、おもむろに立ち上がつた。

「ならええわ。オレはオレで、聞くあてがないわけやないし……」
「イファを部屋に送つたついでこ、そっちにも回つてくれるけん、おま
えは、そん茶あでも飲んで待つとけ」「……へ？ ひょ、おいつ……一？」

わざわざ出て行くつとある弟を、慌ててティーンは追いかけた。

VS・宰相！

「……なあ」

その部屋　宰相ハクロウの執務室の扉の前で、ティエンが不安げに囁いた。一人して同じ外見で歩いていては当然大騒ぎになるので、今は警備兵のひとりに身をやつしている。

「ほんとに、やつに聞いてみるつもりなのかよ？　つづーか、あのじつるさいオッサン相手にすんだつたら、ちゃんと正装してきた方が良かつたんじゃね？　髪だつて、そんな伸びっぱなしじゃ……」

ティエンの指摘した通り、カイは、相変わらず、さつき幻術で出した部屋着姿のままでいた。髪も、旅から戻ってきたままの長さのものを後ろで軽くまとめただけだ。つい数刻前までティエンが国王の執務室で家臣たち皆に見せていた、短髪で王族服をきつちり着込んだ「国王陛下」とはあまりにも落差がありすぎかる。

「『』これが『良いのだ』

カイは、しかし顔色ひとつ変えずに言い切った。

「それより、ここから先もついて来るつもりなのならば、頼みがある」

「頼み……？」

おつむ返しにティエンは尋ね……その「頼み」を聞いて、ちらりと面食らつた。

仕事熱心な宰相は、幸いまだ下城してはいなかつた。畏まつて国王を迎えた彼は、その姿を見て啞然とし、さらに続いて入ってきた「自分がさつきまで見ていた国王陛下」の姿を見て、引きつけを起したように立ちすくんだ。

「な、何故陛下があ一人……！？　といつか、貴様……貴様は、あのときの」

「そう、そなたが旅先で会った男だ」

蓬髪の男の方が、あとを引き取つた。

「そして、そなたは決して『見間違えた』わけではなかつたのだ
私こそが、本物のユアン＝カイ＝ハシムなのだからな」

完全に言葉を失つたハクロウに、これまでの経緯をざっと説明する。

視察だけでは見えてこない国の内情をざつしても自分の目で確かめてみたくて、こつそりと旅に出たこと。

とはいへ、玉座が空になるようなことはあつてはならないので、母が王宮に上がる前に産んだ子で、自分にそつくりな顔をした兄のティエンに影武者を務めてもらつていたこと。

そもそも帰途につこうとしていたところで偶然ハクロウと鉢合わせ、騒ぎを起こしたくなくてどうかに逃げてしまつたのだということ

と……

「謀るような真似をして、本当に申し訳なかつた」

そう話を結ぶと、カイは深々と頭を下げた。答えは、すぐには返つてこなかつた。ハクロウは一度大きくため息をつき、それから、

今聞いたことを頭の中で整理するかのよつて、目を閉じて、とんとん、と指で額を叩いた。

「信じ難い……と申し上げたいところですが、信じぬわけには行かぬのでしきうな」

セヤアツヒメツヤクカイに視線を戻すと、おもむろにハクロウは言つた。

「正直、いたさか妙だとも思つてはいたのです。失礼ながら、陛下は御即位後三年も過ぎようとしていらっしゃるのに、いつまで経つてもどこか自信なげで、大丈夫だろうかとこちらが心配になつてしまつとうなところがおありでした。それが、ちょうど半年ほど前を境に、嘘のように消えてしまった。あたかも別人になつてしまわれたかのようになつた。しかし、本当に別人だつたのだということならば、それも納得できよつといふものです。それに……」

白い髭の下で、唇がわずかにほころんだ。

「半年前に比べて、随分と良き面構えになられた。さぞや得るもの多かつた旅だつたの」「さりとて」

「ああ、無論だ！」

カイの表情が、ぱあつと明るくなつた。この先の話を進めやすくするために、あえてこうして旅に出ていたことを告白したのであつたが、ここまで色好い反応が返つてくるとは思つていなかつたのだ。

「Jの経験、必ずや今後の政務に生かしてみせよつて。……だが、その前にひとつ、ぜひとも断つておきたい憂いがあるのだ」

「憂い、でござりますか？」

「そうだ」

大きくカイはうなずいた。

「旅に出て間もなく、私は義姉上あね 亡き長兄上の奥様であらせられるユナ妃殿下にお会いしてな……」

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

「何と……」

すべてを聞き終わったハクロウは、ますます目を瞠つた。

「ユナ様が御所用で旅に出られ、その旅先で病に斃れられたということは伺つておりましたが、まさかその裏に、そのような事情が隠されていたとは……

しかも、あの少年が王太子殿下の……ですが、言われてみれば、確かに顔立ちといい、あの機転の利かせ方といい、在りし日の殿下にどこか似ていたような氣もいたします。

私がそう思うのですから、ほかにも同じように感ずる古参の家臣は必ずおりましよう。仮にその者が、畏れ多くも陛下が玉座にあらることに不満を抱いている不逞の輩であり、少年の所持していたという懐刀も見たというのなら、彼を手中に收め、王位を篡奪させようと考えたとしても不思議はないでしおうな。さらに、その者が私利私欲に駆られた野心家であったならば、少年を傀儡として政界を操り、間接的に我が国全土を支配しようという不届き千万な野望を抱く可能性も、全くないとは言い切れませぬ

「であるつ？」

得たり、トカイは身を乗り出した。

「それで、そなたに心当たりの者がないか尋ねに参つたのだ。そなたならば、政界のことも誰よりも詳しうえに、誰であろうと隔てなく、厳しく評価できる目も持つておるゆえ、きっと有意義かつ客観的な意見が聞けるのではないかと思うてな。

それに、もしかすると義姉上も、同じ人物に唆されたのではないかという気がするのだ。義姉上の御心の内に、もともと弟御を討つた私への恨みがあったことは事実だらう。しかし、そうだとしても、ああして狙いましたかのように私の前に現れるためには

「そうですな。日頃から御傍にあつた私ですら、今の今まで陛下が旅に出ていらしたなどとは夢にも思わなかつたのです。普段、陛下とほとんど御接触のないユナ様であれば、なおのこと 陛下を亡き者とせんと図る第三者によって陛下がどこに居られるのかを教えられ、『今こそ仇討ちの好機』などと囁かれたと考えた方が、はるかに自然というもの……」

もつ一度目を閉じると、ハクロウは額をとんとん、と指で叩いた。

「陛下の居場所と少年の出自に関する諸々の両方を知つてゐる、となれば、その者は政界の中核もしくは隠密方に限りなく近い立場にいるとみて間違ひないですな。なおかつ、生前のコアン＝リク殿下とある程度の交流を持つており、人ひとり拉致できるほどの手練れでもあり……ふむ、ひとり居りましたぞ。先代王様のもとで、まさにその隠密の頭を務めていた男で、名をドウタクと言つのですが

「ドウタク……」

その名を、カイは口の中で繰り返した。

「つむ、思い出したぞ。私の即位と同時に、年齢的なことや健康上の理由で職を辞した家臣が何名かいたが、そのうちのひとりだな」「左様にござります」

ハクロウは首肯した。

「ドウタクは、持病が悪化したという理由で職を辞しております。が、その後も病にかかる気配すらなく、現在は王太后陛下のお屋敷で、執事として働いているとか」

「義母^{はは}上の……！？」

カイが驚いた声を上げたそのとき、ティエンが不意に動いた。つかつかつか、と扉に歩み寄り、勢いよくこれを開け放つ。

「誰だ、そこに！」

こるのは、と続けかけた声が、そこで呑み込まれた。

「何だ……姫さんじやねえか」

「『めんなさい』……」

身の置き所をなくしたかのように、コイファは小さな肩をすぼめた。女官たちの姿はない。といつのことば、自分の判断で、心眼だけを頼りにひとりでここまで来たのだろうか。

「心配だったの。陛下、いつも宰相様に叱られてばかりいたから……」

「……何と、私は嫁女殿にそのような気苦労までかけていたか」

カイが苦笑した。今度は自分が彼女に歩み寄り、高々とその体を

抱き上げる。

「だがな、宰相はいつも私のためを思つて厳しことを言つてくれるので。それに、今回は相談があつて、」から出向いてきたのだよ」

「「相談……？」

「ああ。平たく言えば、」の国の誤つた部分を匕つ正し、匕のよつにしてよつ良き国として行へべか、といつた話だ。やつてあつたな？」宰相

「はい、仰せの通りに」れこます」

「ほんとかしい」

如才なく応じた宰相に、コイファはまだ疑惑の残る表情を向けた。

「でも……まあ、いいわ。確かに喧嘩や言い合ひの気配はなかつたし。だけど宰相様、あまり陛下をいじめはいけませんよ。陛下は、本当はとても泣き虫でいらっしゃるんですからね」

「……これ、コイファ！」

「」やカンペキかあ殿下確定だな」

慌ててたしなめたカイを、にんまりと八重歯を見せてティエンが小突いた。

とりあえず「伝えるべき」とはすべて伝えだし、女官たちも心配して捜し回つているであろうと思われたので、その後間もなく、カイはコイファを連れて彼女の部屋へ去つた。

ティエンは、この場に残つた。正確には、一旦出て行こうとしたところへ、カイたちを見送りに出てきたハクロウに田配せられたのである。

「あ……あなたの言いたいことは、何となくわかるよ。俺も、実は
さつき言った『野心家』のひとりなんじゃねえかって疑つてんだろ
?」

「ええ、ありていに言えば」

あつさり認めて、ハクロウは自分の椅子に戻り、ティエンにも来
客用の椅子を勧めた。

「聞けば、あなたは陛下の実のお兄様だといつ。しかも……陛下の
影武者を務められたのは、今回だけではありますな?
上中下三
かみなかしも國首脳会談の折と、それに、下つ国の王太子様の首級を挙げられた
あの戦も……でございましょう? いずれも、今回の場合同様、失
礼ながらあの陛下とはとても思えぬほどの手並みでございましたか
らな。

なればこそ、解せぬのです。そんなあなたが、何故影武者などに
甘んじているのか……無論、建前としては、『直接王家の血筋を引
いているわけではないから』ということなのでしょう。けれど、そ
れだけ面差しがそつくりなのならば、極端な話、そのようなことな
ど何ともなるというもの

「例えば、あの『あねさま』をけしかけて、旅先の事故に見せかけ
てカイを殺せば……つてか?」

自分から言つて、ティエンは肩をすくめた。

「いやいや、冗談じやねえよ。だいたい、そつまでして手に入れた
いと思つほど興味もないんだわ、『あの立場』には 三度
三度あつたかい飯が食べて、誰にも邪魔されずに落ち着ける寝床が
あつて、時々きれいなねーちゃんでも抱ければ十分に満足つて至極
お手軽な性格なもんでね。

ただ、俺、いろいろあつて日下『家出状態』でさ。カイは、そん

な俺のこと、何かと面倒見てくれて……そのくせ、自分からは決して助けなんか求めやしねえんだ。三国会談のときだって、下との戦のときだって、体調崩して床から頭さえ上げられずといにいるいつこのに、『これは国王たる者の務めなのだから』とか何とか言って、這いずっとまで出かけようとして。だから、つい見かねちまつたつづーか……ま、早い話が『兄馬鹿』ってやつ?』

結局、勧められた椅子には座らずに、踵を返す。

「それはそうと、あんたこそ、蓋開けたら実は自分が首謀者でした、なんつーことはねえだろうな?……ま、たとえそうだとしても、下の王太子とおんなじ目に遭わせるだけの話だけよ」

ちらりとハクロウを振り返った双眸が、刹那、鮮血の色に染まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6683w/>

黒竜異聞

2011年11月20日01時16分発行